物庵禪話 全

672
1
57

物庵禪話

物庵近重真澄著

はしがき

物庵とはいづれどこかの庵坊主住みなん
或は何し持前の本職を仕学者なること
さても好し仕けるに句讀も雲呼狐禪
のかを木阿彌以上の外徒も笑者も
掛らぬ代物とは笑止なる汁攪り御に
歐羅巴三界迄とはテモもつけの幸ひ
おつたがの病者いよいよ高じていさゝか黙をむ
玉極る嚴振つて著述の捷者すること
不文書の宗門を罪ぶるまを謂つべきぞ
讀む人確と心を持ちて玉ひてゆめゆめ持され

はしがき

物庵(もったん)とはいづれどこかの庵坊主住居せん
或は曰く持ちの本職を任せ学者なりなど
さても妙し仕掛けたるが句揚句理屈理屈
のもを木阿彌以其の外何れも筆者も
掛らぬ代物とは笑止こと汁懺り御に
歌屋も三昧迄とはテモもつけの幸ひ
おつだの病ましいなく高じていさゝか黙(もだ)をも
至極剛膽厳振つし考への纏まるすることと
不立文字の宗旨をと弄ぶるあと謂つべきを
読む人唯と心を持ち玉ひてゆめ持され
ぬ様して玉へかしと餅搗蟆(ばった)の如し
頬にふくらみ白毛表向ふ安本毎の

谷本梨庵

明治
45. 1. 26

自序

吾曾て試に自ら曹源一滴水に嗽く。料らさりき言々皆悉く野狐の氣を帶ふるに至らんとは。惡縁徒らに深くして後五百生を更ゆとも尙ほ解脱し難からんことを恐る。唯夫れ胡鬚赤しと雖も妨げず更に赤鬚胡あるを。河南河北固より凝滯する所なし。豈又野狐身の即ち淸淨身ならざるを知らんや。是此冊子亦其愛惜する所以を見るに足らん。若し人猶ほ以て信するに足らずとせば。請ふ先づ去つて函嶺の巓より望め。絲の如き大道長安に達せん。

明治辛亥歳冬十二月

物庵居士識

物庵禪話目次

第一　禪學一夕話……一
第二　禪と人物……二四
第三　余が參禪の動機……二九
第四　再び信心銘に就て（禪の不可説なる所以に論及す）……三一
第五　俠骨論……四四
第六　神速步行術……五一
第七　抑も亦青山の一角歟……五七
第八　佛教興隆の三策……六五
第九　思ひ出るまゝ……七五
第十　關山國師……七九
第十一　臨濟慧照禪師……八三

第十二　參禪錄の批評に就て（野々村學士に謝す）……八七
附錄　參禪錄を讀む……野々村權所君……九〇
讀參禪錄……大道　雪淵君……一〇二
第十三　金儲けの譚（獨文）……一〇七
第十四　金の使者一名古切手（佛文）……一一二
第十五　東鄕大將訓示（獨文）……一一五
第十六　時……一一七
第十七　禪と物質……一二一
第十八　國語と哲學……一三一
第十九　歐州留學……一三八
第二十　傳教大師と弘法大師……一四三
第二十一　學窓放言……一四六
第二十二　野狐禪……一六〇

物庵禪話目次終

物庵禪話

理學博士　近重眞澄著

第一　禪學一夕話

緒言

禪を修するはそれ猶は劍を擊つか如き乎。劍の主のする處は他なし。敵に先んして之を擊つに在るのみ。而かも劍を學んて終に能く其奧義に臻る者あり耶。禪は唯無と觀す。萬法をして一に歸せしむ。何ぞそれ簡なる。而かも禪を修する者遂に能く其玄妙を究むる事稀なり。樂天嘗て道を一老翁に問ふ。翁曰く、諸善奉行諸惡莫作と。樂天其卑近なるを怪む。翁曰く、三尺の童子も猶能く之を言ふ、八十の老翁も行すること能はすと。禪豈に容易ならんや。諺に曰く、生兵法大疵の基と。誠に然かり。然かも生兵法を恐れて學すんは終生遂に劍を把ること能はす。要は唯精神一到、當に必す其志を成すの日あ

らんことを期す可きのみ。

願ふに僕の禪を修するや日猶ほ淺し。未た毫も造詣する處あらす。呶々の長舌誠に是れ生兵法の失あるを免れす、愼んて而して戒む可きなり、唯本日會合の君子、學者あり武人あり、政治に商工に、各雄を一方に稱せらるゝの士なり。乃はち敢て聊か愚見を開陳し以て幸に高教を辱ふすることを得は、自家多少の大疵復た何そ辭するに足らんや。

夫れ禪は東洋獨特の見地、世界無比の悟道。僕の淺學を以てして他未た此種の教理あることを知らす。諸君若し僕の說く所を以て理ありとして更に益其妙用を發揮せらるゝことあらは是豈に獨り僕の幸のみと曰はんや。正に是東方新興國の爲めに、武勳以外。更に一大光明を放ち錦上花を添ゆるの美觀を呈する所以なることを知る。

第一章　禪は不可說なり

禪とは何ぞや。之を識者に問ふ。解を得て益惑ふ。禪の本旨は必す先づ所

得の智識を撲滅せんと要す。智識を撲滅して更に智識あり。是即ち悟道なり。既に是人間の智識に非らす。辭の以て說く可き者なし。只說かすんは以て人をして解せしむる能はす。已むを得すして之を說く。說いて而かも途に其眞を傳ふること能はす。却て誤解の加はらんことを恐れて、己に其自ら說く所を罵る。曰く是文字禪のみ、老婆禪のみと。見る可し、釋尊四十九年、五千餘卷の經を說いて末後に一字不說と云ふ。宜なる哉古今の大德誓つて眞風を一世に擧揚せんと欲する者は、孤奇嶮峻高く自ら持し、人の得て湊泊するを縱さゝることや。於是乎、世に臆說出て、禪を解して奇々怪々、往々人をして絕倒せしむる者あり。一僧煙管を捻して問ふて曰く、既に是烏に非す、什麼に由てか雁首と云ふ。答曰く、更に酸味なし、之を吸口と云ふに妨けすと。一僧更に問ふ、唯是一羽の雞、之を二羽鳥と云ふは如何。答曰、見すや一枚の菓子、呼んで煎餅となすをと。此類是を稱して落語家禪と曰ふ。頓智頓才を以て禪となす者の如し。然かも禪の問答、一見之に類する者あり。一休問ふて曰く、長松蜿々、什麼に由てか見て以て直しと爲さん乎。答曰、蜿々兮

白隱和尚筆

長松と。一休及食て行脚して伊勢に在り、自ら犢鼻褌を解いて地藏の開眼を爲す。滑稽笑ふ可し。而かも眞意の其間に存する者あり、古人爲めに之を頌して曰く、

序廻地藏堂。一休開眼場。此由不レ可レ說。緣起與レ禪長。

僕謂へらく、禪は誠に不可說なり。而かも其不可說なる所以を說くは、是人智の當に能くすへき所なりと。今之に論及するに先んし、別に尙ほ說くへき者あり。禪の修行法是なり。

第二章　禪の修行法

禪の不可說なるは旣に陳ふる所の如し。然れとも素是れ學說に非すして。實地實境なり。故に人の能く言ふことを解せすして、而かも猶水火の寒熱を辨別するか如く、足一たひ其境界を踏まは、左右原に逢ひ、萬千踵を回さすして至るの慨あらん。禪の敎育法は正に能く此間の消息を傳ふる者なり。古來曰く、一千七百則の公案と、一則の公案も亦た究めて其奥に至らは、以て

能く他の一千七百に匹敵すべし。然れとも人に根器あり、機に先後あり。未た其器に非らす、其機に到らすして、敢て强ゆるに至難の公案を以てせんとするは、是決して人を敎育するの良法に非す。古人是に於て深く思を致し、序を設けて修行の便となす。曰く法身、曰く機關、曰く言詮、曰く難透、曰く五位、曰く十重禁、是なり。而して之を貫くに常に坐禪の一法を以てす。坐を離れて遂に一分の悟脱たに無きは蓋し禪門の特色なり。

夫れ法身に關する公案は、専ら禪境を見得せしむるに在り。一切の語言智識を脱却して、尙ほ別に壺中の天地あることを知らしむるに在り。趙州の無字、白隱の隻手、洞山の麻三斤等、人の熟知する所なり。然も敢て此等數種の話に局する者に非す。一枝の煙管、一介の美人、眼に映し手に觸るゝ底の者、總に是此公案ならさるはなし。要は只公道を示して私畦に依らす。學者をして空しく岐路に彷徨せしむるの愚を爲さゝるに在るのみ。

法身は實に禪の第一關たり。透過し了はつて遂に何の異かある。古人曾て句あり。曰く、

鼠入錢筒伎既窮。十年蹤跡眼頭空。如今又問平田路、山社半吹黃葉風。

と。一唱し來つて感慨の特に身に切なるを覺ふ。

機關とは已得の禪境を運用せしむるに在り。初關の透過實に痛快ならは、機關は蓋し易々の業ならん。二百年前（寛延五年）、駿州荏原人、山梨平四郎と呼ふ者あり。放縦自恣、日夜宴樂に耽る。一日瀑布を觀る。水勢滔々、巖に激して降る。飛沫珠の如く消へて忽ち跡なきを見て感あり。頓に遊趣を損し、蒼卒家に歸る。一語を發せす。夜に及んて浴室に入り、兀坐瞑想、忽ち脊を徹す。掌裡に疼痛を感す。蓋し兩手相壓し覺えす爪尖の肉に入れるなり。晝は則ち默然啞の如く、殆と人事を辨せす。夜に及んて坐すること更に前日の如し。此の如き者三日。忽然として無字の極則に徹底す。以爲く古今獨歩と。忽を飛はして謁を白隱に乞ふ。白隱一見可と稱す。坐に恩昌尼あり。曰く、尼齡已に頽、自ら持するに懶し。卿乞ふ手を着けすして予を起たしめよ。

と。平四郎語なし。尼咄して曰く、卿已に禪に參す、此の如くにして可ならんやと。此種の一拶子、總て之を機關と云ふ。

言詮とは敎理を考究せしむるに在り。既に其境を見その用を得て、後之か道理を知らしむ。始めて活用あり。亦た修行の要道なり。然かも

僧問如何是佛、師曰口是禍門

と。言ふの非乎、言はさるの是乎。錙銖を判するは正に是れ禪和子の任とする所なり。

難透とは讀んて字の如し。禪理の骨髓、凡て具備して一則の中に在り。白隱の七難透。玄之又玄。須く二十年三十年の歲月を費し、苦參實修始めて能く得つへし。

如何なる則を以て難透と云ふや。是蓋し概言するに易からす。同一の則も器に依り根に應して其見地を異にす。人の見て以て難しとする處も、我か忽ち之を能くすることあり。我か見て未た必すしも深奧ならすとする所、他は却て之に無限の妙味ありと曰はん。見處の深淺は一に學人用意の如何に在り

て存す。於是乎、具眼の師家其徒を接するに當り、機に應し發に投して、適宜の公案を授け、言詮機關遂に其序を爲さゝる者常なり。夫れ只此一事を透徹せしめんと要す。何そ必すしも定盤星を認めて琴柱に膠するの愚をなさんや。

若夫れ五位十重禁は敎理の研究に屬す。罷參に及んて更に自修を費す。悟後の修行是なり。此の如くにして始て人に一道の春風あり。百物融和、化を敷き德を宣ふ。禪機の正に熟する所なり。

禪の修行それ此の如し。悟に應して機に階級あり。其方に第一關を過くるや、森羅萬象視て平常に異なり。屙尿送尿も亦た燦然として光を放つ。以爲く丈夫の事畢ると。過つて邪境に落つ。然かも禪に於ては僅に是一著步のみ。境致漸く老熟するに及んては、恬淡自如、物の爲めに拘束せらるゝことなく、泝に浴し舞雩に風し、詠して歸り、陶然として我か天地を樂しむに至らしむ。然かも尙は未たし。人多くは此境に至つて遂に之を脫すること能はす。唯た自ら潔ふして世と消み世と濁ること能はす。或は退いて陋巷に老ひ、里閭に隱れて以て得たりとなす。於是乎、世人往々佛敎を目して厭世敎となす。禪既た深く之を戒むることを知らさるなり。禪の圓圈は却て更に人境に復するを期す。所謂六道輪廻を說く者實に此の謂なり。

第三章　南禪と北禪

禪の修行は大要已陳の如し。然かも猶ほ世に南北の別あるを說く者あるは何そや。蓋し南禪は六祖慧能に起り、北禪は神秀を祖とす。南禪は頓悟を主とし、北禪は漸悟を要す。蓋し達磨より五傳して弘忍大師に至り、會下に神秀上座あり、一偈を拈して曰く

身是菩提樹。心如明鏡臺。時々勤拂拭。勿使惹塵埃。

慧能と云ふ者あり、一文不通にして久しく會下に磨頭の職に居る。之を改めて曰く

菩提本非樹。明鏡亦非臺。本來無一物。何處惹塵埃。

是より二派に分れて、神秀は敎を北方に垂れ、六祖は化を南方に敷く。後北

禪漸悟の道衰へて。南禪獨り雄を唐宋の世に專にす。僧榮西之を傳へて我國始て禪あり。寺を建仁寺といふ。頓悟とは一氣猛進直に禪の本體を究めて痛快痛切なるを貴ふ。漸悟は則ち梯子禪にして、小心翼々、窮て遂に其奥に到らんことを期する者なり。蓋し一千七百の公案何れか禪の機緣を具備せさる者あらん。敏捷悪利骨に徹し髓に透る底の者あらは、一則の公案以て直に禪要の秘訣を得へし。何そ漸悟を事とせんや。然るに今日專ら頓悟の禪と稱する者、亦前章巳に說く所を以てして頗る其漸悟に類する者あるは何そや。蓋し說あり。一千七百の公案、究めて之を盡くすと雖も、其器に非すんは遂に寸分の進境なし。之を蚯蚓の皮を剝くに譬ふ。之を脫する一回、遂に當初に異らす。如此して師家は尙ほ其愚蒙を捨てす。手を更へ術を盡くして何の時か其遂に彼岸に達することを待つ。所謂梯子然たるは亦た巳を得さるのみ。大根は一則萬則に當り、小根は萬則尙ほ一則に酬ひす。近年一居士あり。無字を捻弄する十八年、一日忽ち其妙契を得たり。歡天喜地手の舞ひ足の踏むを識らす。去つて城州八幡に至り可を圓福の老師に乞ふ。師一見忽ち無門關四十八則を許るすと。見る可し見に深淺あり根に大小あり、衆生濟度は方に應病與藥の已む可らさることを。

第四章　禪の境界

已に禪に關する誤解を說き又其修行法を說けり。是より將に禪と人智と其相異する所以を略述せんとす。蓋し禪は有に非す、無に非す、而かも有無共に存し、有無共に空しき者なり。心經に曰く、色即是空、空即是色と、一休又歌ふて曰く

有漏路より無漏路に歸へる一休
雨降らはふれ風吹かはふけ

と。此有漏無漏の中間に居て、無と化し有と現す、有無双々として遂に端倪す可からす。宛然として是れ武藏の二刀流なるか如き是即ち禪なる無からんや。顏回嘆して曰く、前に在るかとすれは忽然として後にありと。孔門の敎

亦た途に禪と別なる所なきに似たり。

曩に一友余に問ふて曰く、聞く君曾て禪に參すと、千里に客たりと雖も必す應に望郷の情なかる可しと。此種の疑問は今日蓋し一般世人の禪學者に向ふて發せんと欲する所なる可し。今それ人に喜怒哀樂の情あり。悲む可きに當りて悲しむ能はす、怒る可きに當て怒る能はすんは、是人情の全きを欠く者なり。何を求めて之を修することを爲さんや。夫惟ふに無には則ち萬法影を收めて天地廓寥、有には則ち地風火水粗を窮め精を盡くして尚ほ未た休むことを知らさるなり。然かも謂はすや、禪は則ち有無共に存し又共に空しき者なりと。玆に知る、有即禪、而して禪即有に非す。無即禪、而して禪即無に非す。今それ世の有を說く者只是常有に過きす。無を說く者却て斷無に落つ。有即無、無即有。有中に無あり、無中に有あり。悲は則ち悲、而かも悲中に悲なし。䏈す可し。余は悲は則ち悲なりと云ふ、悲は則ち樂なりと云はす。而かも悲んで傷らす、君子の事に非すや。

明暗雙々、禪機の渾熟する所、說て愈會し難し。今更に一二の例證を擧け

て以て此章を了らん。

飛橋雨に落ち、奔湍崖に激す。火車電の如く走つて之に迫る。前車墮ち後車繼く。客の能く免るゝ者なし。一人あり突然窓を排して出て蜓に向て飛ふ。全く人事を失す。漸くにして蘇す。足に雨履を穿ち手に旅嚢を提け而かも其何に由りてか免れしを知らす。是豈に所謂無中の有有中の無と云ふ者に非すや。

禪に寤寐恒一の話あり。一醉陶然柯得の鄉に入る。盜あり戶を排して來り大刀を提けて室隅に立つ。鼾聲酣に依りて高し。其足を擧けて枕頭を蹴るに及んで忽然として驚き覺む。恐愕措く所を知らす。只た免れんことを求む。人誰か其恒一を認めむ。然かも禪を以て之を見るに寤寐依然として恒一なり。何を以てか之を證せん。

禪境の話して而かも捕捉す可らさるは是其不可說なるが故なり。之を說いて千萬言、尙未た盡きす。之を會すれは則ち一刹那の事のみ。畫餅畢竟飢に充たす。何そ冗筆を弄せん。

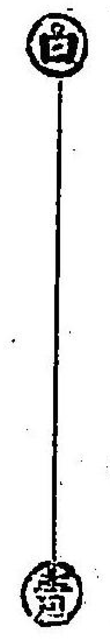
第五章　禪の理論的位置

何故に禪境は不可説なるや。何故に常智と相異ること此の如くなるや。請ふ少しく其理論的解釋を試みん。

此目的に向ふて必要なるは先つ常智の何者なるかを知るに在り。常智は蓋し相對的なり。相對的智識とは二者の關係に因て生し、此關係を確實ならしむる爲めに第三者の存在を要す。事理明白にして恐くは復た敢て論證するの必要なかるへしと雖も説明の透徹ならんことを期し左に之を略説す可し。

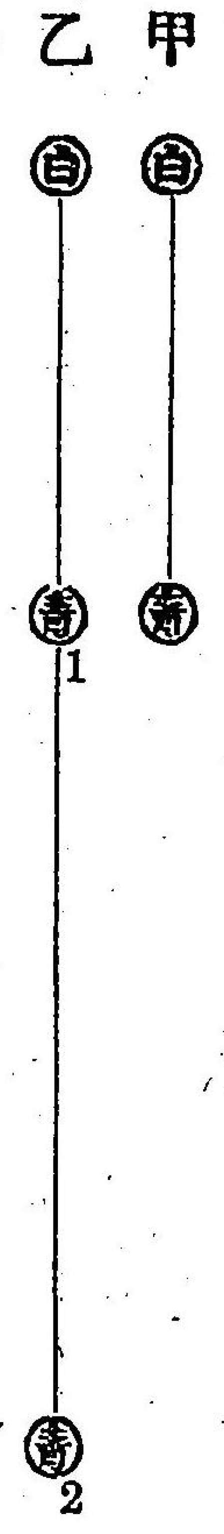
玆に一箇の棒あり。試に其長を問はん。人能く更に他の一箇を取つて相比較することを知る。曰く甲長く乙短かしと。又單に二尺三尺と云ふ者、亦是れ已に一尺と云へる一個の標準を取つて比較し來れる者に外ならす。共に皆相對的智識と云ふ可し。然かも更に一歩を進めて單に一片の長と云へる觀念の已に全然相對的智識より成る者たるを知るは稀なり。例之は玆に一箇の球體ありとせは此際更に長さてふ觀念の生すへき者なし。更に他の一箇を取る。

是に於て始めて其中間に間隙あることを知る。



是豈に長サは實は二者の相對に依りて生する觀念なることを示す者に非すや。而して此長サたるやそれ自身に於ては猶其長短を論するに足る者なし。故に之を甲とし又之を乙とするも

誰か能く其異同を辨せんや。人ありて若し甲の長サは乙よりも短小なりと云はゞ、是實は不知不識の間已に第三者の觀念を加へたる者なり。何となれば甲の乙よりも小なるは



(青)1の(青)2に移りたる後(青)2の舊位置か尚は青に於て存せしことを記臆して而して後言ふことを得べければなり。故に曰く長さてふ觀念は二者の關係に

依りて生じ、其長の大小は更に第三者の存在を俟つて定まると。

夫然り。吾人の觀念は相對に依りて生じ其確定には第三者の存在なかる可らず。故に吾人の智識は凡て皆三重の組織を成せり。此が爲めに吾人の認識には常に三段論法を使用するの必要あり。

此に到つて余は問はんと欲す。已に是相對的なり、其相對的の各物は何ぞや。是即ち哲學者の所謂 Ding an sich に關する問題なり。換言すれば、今日吾人が主觀的に比較綜合して見聞するが如き萬法は、客觀的果して實在するや否やと云ふ事是なり。然ども已に陳るが如く吾人の論理は其本來に於て相對的の者なれば、單に之に依りて以て Ding an sich を認識せんとするは頗る木に緣りて魚を求むるの嘲あるを免れず。人或は曰はん、人智にして已に此の如き者ならば何ぞ求めて其本に返るの愚をなさんや、只須く先づ智識の基線を一定し、他は皆之に對して相應なる比較權衡を保ちつゝ宇宙間に於る一種の三角測量を實行する者とせば則ち足ると。然り、今日の科學は實に之を爲す者也。科學の精要誠に人目を眩惑する許なりと雖も只是如上の測定を

精密にし以て宇宙の萬法を觀察するに過ぎず。故に余は此種の智識の益進步發達して窮極する所なきを希望して已まずと雖も、獨り如何せん常智の本質旣に此の如く複雜なる三重關係を要する者なることを。白と認め黑と識る簡なるが如しと雖もそれすら猶ほ時として其繁雜に堪へざる事あり。急遽倉忙なるに際して人往々其措を失するが如きは蓋し其好適例なり。

相對的智識の結果として更に奇怪なる現象あり。人多くは其理を悟らず只其弊に苦しむ。曰く吾人の確然不動なる事實を知る能はざると即是なり。蓋し所謂事實とは即ち三角測量の結果なり。然とも其方法に至つては或は精なる可く或は粗なる可く固より一定せず。是已に事實の變動を表する者に非ずや、試に晴雨計に於ける水銀柱の高を測定せよ。讀むと十回にして每回皆異る人能く遂に其何が事實なるやを知らざると多し。以て證となす可し。

夫此の如し。此結果は實に人生に無量の不安を釀す、試に之を人間安心の上に就て言はん。曰く平生以爲く頭腦明晰と。事に臨んで忽ち措を失す、如何か之に對せん。曰く昨是今非一定の信條なし、抑も何者か是萬古不變の眞

理ならん。曰く何。曰く何。此類極めて多からん。凡て此種の煩悶は一に人智の相對的なるに基因す。是に於て愈其相對的の各物を識得するの要あり。而して之を爲す者は實に此の禪學にして絕對的智識を以て其基本とす。唯如何にして之を得る乎。曰く一切の常智を脫却し、比較なき處、差別なき處。之を佛境といふ。萬法平等、屙屎送尿も亦た能く光明を放つ。是即ち法身の修行なり。而かも曰く

無佛處急走過。不走過草深一丈。

と。蓋し此境は只是本體。所謂靜にして未だ用を爲さず。是に於て乎其動を要す動は則ち比較相對なり。再び常智に復す。而かも曰く

有佛處不得住。住着頭角生。

と。無有雙々、正に始めて其完きを見ん。前章說く所の禪境と云ふ者此に至つて蓋し復た釋然たる者あるを見ん乎。

第六章　禪の活用

禪の活用は宇宙萬法の上に在り。世に之を禪宗と稱するか故に、單に之を一の宗教なりと信ずる者あれども、是決して然らず。只だ禪は萬事を包括するが故に其宗教としての動作も亦た實に偉大なる者あり。願ふに吾人人類が三段論法を以て相對的關係を樹立するや、之に依りて以て能く宇宙の萬象を網羅す。然かも人遂に之を相對宗として宗教視する者なし。只だ其相對的關係の宗教に關する者を目して種々の教法と爲すに非ずや。禪とは即ち絕對的智識にして常智とは全く其認識の方法を異にす。而して絕對は以て相對たる可きが故に、禪學者は即ち常人以外、別に乾坤あり、一倍の自由を有する者と云ふ可し、禪の活用の偉大なる以て知る可きなり。

先づ學術を以て之を說かん。世間普通の信仰には必ず一の Dogma を有す。Dogma とは一般論理、即ち萬事に共通なる三角測量、の基線以外更らに別途の基線を設くる事なり。已に此の如く餘計の關係の存在する以上、信仰と研究とは往々相撞着するを免れざるべし。是實に已むを得ざるの結果なり。禪には前章所說の理論によりて明白なるが如く、更に何等の基線だにあること

なし。絶對に於ける一點には本と何等の所形をも有せず之を動かすに及んで玆に始めて形あり。律するに科學を以てし、格するに哲學を以てし、行するに醫術を以てし、施すに商工を以てす。行として皆可ならざるは無し。立處皆眞。隨處作主と云ふ者は實に此間の消息を傳ふる者なり。

次に道德を以て之を說かん。禪心一たび收つて萬法皆空。天柱碎け地維缺く。前に古人なく後に英才なし。乾坤只一人。壯なるに非ずや。禪心一たび放つて森羅萬象。整然として寸絲亂れず。君に忠、民に仁。子は父の爲めに隱くし、父は子の爲めに隱くす、直きこと其中に在り。

夢と思へば何でも無いが其所が凡夫でネーあなた剛柔兼備賢愚併せ吞む。俁常に以爲らく、智者は愚者と擇ばずと。痴聖一如にして始めて能く眞の大人物たるを得べきのみ。

已に乾坤を以て一炬に付す。何ぞ又他の瑣々を問はん。祖元死に瀕して吟して曰く

乾坤無地卓孤筇。喜得法空人亦空。珍重大元三尺劍。電光影裏斬春風。

と。然かも死は生の息む所、哀んで而して悲しむ可きなり。巖頭賊に斬らる。一聲悲號其聲數里の外に徹すと。見る可し禪機の擒縱自在にして間髮を容れざる者あることを。

第七章　小乘敎と禪の關係

宗敎としての禪は如何なることを爲す乎。曰く祖を殺し佛を殺す。曰く釋迦達磨と手を把つて行くと。或は魚肆酒行にして放縱不羈、殆ど他宗人と比較すべからざる者あり。只萬人の模範として人生の徑路を指南すべき任に在るが故に往々にして行持綿密の人を出すと雖も、未だ之を以て最も貴しとは爲さゞるなり。傳に曰く釋尊曾て雪山に在り。一朝忽然大悟徹底す。山を下りて直に說くに其玄義を以てす。人得て會する者なし。是に於てか始めて敎を設け權を弄す。是即ち小乘佛敎にして僞も亦た方便たるを以て釋さる。然かも猶ほ其極則を眞諦に存するあり。南無阿彌陀佛其他の稱名題目は全く禪

の法身に外ならず。大乘小乘の別以て見る可し。

所謂大乘敎中專ら經論所載の文字に依りて眞諦を求むる者あり。唯夫れ禪は則ち然らず。文字を立せず。敎相を剗せず。一躍直に眞諦に迫らんと要す。此に於て乎大乘敎中復た派別を生ず。固より止むを得ざる處なり。

佛敎渡來以後、其神道と融和せんとするや、或は兩部神道を說き、或は仁義忠孝を敎ゆ。人或は其狡猾を嘲る。然かも前章已說の如く佛の本體は素と無のみ。動いて形を爲す、其宜しきに從ふて毫も捍格する所なし。或は他が始より所定の基線を設け神は王中の王、親中の親、君父も亦た他を奈何ともすることなしと說いて、人をして忠孝の途に迷はしむるが如き者と、自ら其選を異にすと云ふべし。

第八章　結語

惟ふに禪は實踐の敎。理を基として敎を立つるには非す。然かも猶ほ其間條理の嚴然として動かす可らざる者ありて存す。諸君若し僕の說く所を以て

或は可なりとし又或は否なりとす。二者共に妨げず。只之に因て少しく禪の何者たる乎を解せられ更に僕の爲めに其明說を惜まるゝこと無くんは僕に於て益する所實に大なり。所謂水母元と目なし、鰕魚を以て目となすの類乎。

終に臨んで請ふ更に一問を呈せん。婆子一僧を供養する二十年。娘子をして把住し問はしめて曰く正與麼の時什麼生と。僧曰く枯木倚寒巖。三冬無暖氣。婆子聽て怒て曰く二十年來此惡僧に供養すと。命じて其庵を燒き僧を逐はしむ。白隱此話を以て其徒に擧す。僧曰く只直に捉へて之を弄せんのみと。白隱言下に之を破門す。諸君今や歐洲文化の中心に在り。叙光扇影豈に又闘情の切なる者無からんや。知らず諸君は如何か其間に處せられんとする乎。蓋し婆子の燒庵邪。抑又白隱の怒喝なる邪。

第二　禪と人物

○問曰　古來禪者と云へば往々磊落洒脱、其素行常規を逸し、時としては或は道徳を無視し、却て物に拘らざるを口實とし、啻に自ら耻ぢざるのみならず、人も亦之を禪者の當然として許すが如き事あり。左なきだに綿密を好まざる初學の徒は乃ち之を見て仕たり顔に眞似し、以て普通人と異なる處あるを示さんとす。破戒無慚の行爲目を張る許りなる者亦無きに非ず。未審。禪門は只解を貴んで行を賤む乎。抑も又禪門には道徳なき乎。斯くても猶は禪門にては之を是認する乎。如何。

○答曰　否、不可なり。臨濟錄に所謂縦ひ從來の習氣五無間の業ありとも自ら解脱の大海と成ると云ふ者、其意豈に破戒無慚の行爲を許すに在らんや。願ふに衲僧家勇猛の大悲心を起し、意氣天を衝いて向上の一路を辿らば、眼中本と旣に一塵を留めず、何に由りてか善惡を論じ是非を判する底の閑葛藤を容れんや。然も禪豈に到頭世法と異なる者なりとせんや。一塵なき處、葛

象歴然たり。善を捨てゝ行せず、而かも猶ほ得々として自ら能く諸佛頂上の禪に叅すと曰ふとも誰か能く之を肯ふ者ならん乎。古德曰、針頭に鐵を截り、鷺股に肉を割くと。彌か上にも學び學ぶ可きは禪である。中途半端の修行に慢心して大慈大悲の本願を忘却することと有る可らず。

○問曰　孔門の敎修身齊家を以て其第一義とす。禪若し之と異なる處なしとならば、夫子の所謂心の欲する所に從ふて矩を踰えずと曰ふが如き、禪門にても亦復た之を道の至れる者とする乎。

○答曰　固より然り。然らば別に異を立てゝ禪を修するにも及ぶまじと謂ふ人もあらんかなれども、分け登る麓の道は千趣萬様なり、就中禪は最良の捷徑ぞと余は確信す。

○問曰　一休禪師は世の所謂大德なり。然るに其行爲往々狂に類し、晩年一盲婦と通じて子を孕ましむと傳ふ。如何か論じ給ふや。

○答曰　坊間に傳はれる一休の奇行中には假托の者多し。特に諸國物語に記せる者の如きは或は在來の公案に肉を付け衣を着せて事實に符會せし類の

者少からす。悉く信ずるに足らず。願ふに一休は其意當時の俗僧似而非禪者を諷刺せんとするに在りて、爲に往々惡辣なる手段に出でし者ならん。先年大德寺の塔中眞珠庵に就き、一休の遺物を拜觀し、其行持綿密なるに驚倒感嘆せし事ありき。例之ば一組の茶器中缺損せる者あらば、何年何月何日之を失ふなど箱書せる類なり。到底も諸國物語中の一休には有らじ。旣に此眞面目あり。轉して他の狂態に見ば其間實に及ぶ可らざる逸趣の有つて存することを知らん。盲婦に通せりと云ふが如きは僕之を知らず。事實なりとするも毫も眞似るには及ばぬ事なり。

○問曰　婆子燒庵の話は彼の婆子他を肯ふにも似又た肯はざるにも似たり。肯ふとせば彼僧枯木寒巖のみ、死水遂に魚住まず。若し肯はすとせば箇の甚麽にとかせん。

○答曰　肯ふと肯はさるとは且く措く。稠人の中能く佳人を斥くるを解すとも未だ必ずしも密室に之と戯ふるゝを辭せす。足下の足許はドウカ。

○問曰　向上の事誠に窺ひ知り難し。而かも世人は依然として猶ほ禪と道德との關係を疑はん。抑も禪の究極の目的如何。

○答曰　看よ、坐禪儀の冒頭に謂はすや、『夫れ學般若の菩薩は先づ當に大悲心を起し、弘誓願を發し、精く三昧を修し、誓つて衆生を度し、一身の爲めに獨り解脫を求めざるべきのみ』と。而かも最後に至つて更に一節を加へ、『希くば諸禪友、斯文を三復し、自利利他、同じく正覺を成せんことを』と結びあるを味ふ可し。

足下頻りに余に問ふに道德上の話頭を以てす。然かれども是余が說くを欲せざる處なり。從來余も諸友の强請により禪話を試みたること固より一再に止まらず。這般の問題又全く腦裏に湧かざりしに非ず。而かも未だ一回だも之に論及したることあらず。其故何ぞや。他なし余は說敎家に非ず。德育者に非ず。襟を搔き色を莊かめて此の道と說き德と論じ、宛然として辻講釋師めくが如きは到底余の性に合はざればなり。但余が從來の行動にして言議すべき程の者あらば幸に御忠告あらんことを。

○問曰　謹て貴意を諒す。只一事の尙ほ未だ鮮明ならざる者あり。方今師

家老宿其數敢て尠しとせず。從ふて其行解の物議に貴する者必ずしも之無きを保せず。斯の如くにして而かも尙能く禪を得たりとせん乎。如何。

○答曰　寡聞答ふる所以を知らず。乞ふ恕せよ。只願ふに凡そ師家たらん者は須く高才逸足、遠く俗流を拔き、居然たる一大强國の觀ある可し。而かも多くは其平生往來交遊する處によりて墮落せずんばあらず。其往々にして俗氣紛々、女子小人の陋態あつて自ら悟る能はざるが如きは、其罪寧ろ會下參禪の居士之に當るべし。道ふこと莫れ黃檗山頭能く臨濟を打出すと。臨濟却つて黃檗をして其巨腕を揮はしめき。語を寄す世上幾多の居士。君をして堯舜たらしむるは是れ伊周。君をして桀紂たらしむるも亦伊周。勉旃々々。

第三　余が參禪の動機

○法事の席に招かれ、亡者の行衞を尋ねられた時、誠は何にも知らぬ。返辭に窮せるを見て取りし主人は謝儀を載せたまゝのお盆で頭を一つ見舞ひき。欠けしお盆の一片を懷ろにし參禪に心掛けたと謂へば好いが、是は僕の話では無い、古人のである。

○相良の城下で仲間奉公をして居た前、僅かの粗忽から駒下駄で眉間を破られ。如何に主君なればとて餘りの無法、今にもあれ逆様に我が足下に腹這させて得させ様と。駒下駄攫んで山門に駈け入つたと云ふのも、同じく拙者の動機では無かつた。

○意中の佳人を他人に取られ。巳れやれ、ヤハカ其儘に置く可きかと。追ッ取り刀。相手の女を音のふて、待つ間程なく氣が變はり。無常の道に分け入りしも矢張他人の行履である。

○生きて居惡い此身體。去りとては又死ぬも惜し。トッ追いつ。山の麓で

三昧に入り。何時の間にやら夜が明けた。曉鴉の聲に氣が付いて。首を釣るのはモウ止めた。恨重なる三世の仇、正體見付けた上からはと禪に這入つた譯でも無い。

○努力又た努力。窮して通ずること能はず。急瀨を溯るに相似て。氣力を用盡するも遂に故處を放れず。ジレッタサに禪でも遣つたらと曰ふて始めたとすれば。頗る當世向きかも知れぬ。併し是とて僕の動機では無い。

○ツマリ僕には取り留めて諸君にお話するほどの譯は無い因緣は無いのである。否。有つた樣だが今では忘れて仕舞ふた。夫れよりは今コウ云ふ者が出來たから御覧に入れやう。

昨是今非理未ㇾ通ゼ。朝三暮四遂ニ無ㇾ功。伎窮メ恰モ似ニ錢筒ノ鼠ニ。活路開キ來ル厠屎ノ中。

第四　再び信心銘に就て　禪の不可説なる所以に論及す

▽東坡一夜曹溪に宿し傳燈錄を讀みけるに、燈花卷上に墮ちて書中の一僧字を燒きぬ。即ち筆を以て窓間に記すらく

山堂夜岑寂。燈下讀ニ傳燈ヲ一。不ㇾ覺燈花落チ。茶毘ス一個ノ僧ヲ一と。

佳謔覺えず人の頤を解く。

▽僧と云へば外五戒を受けて萬行を修し、內自心を頓悟して超凡入聖。此れほど貴い者であるのに、ドウ云ふ間違からか時々自分を僧、否、少くとも還俗僧位に心得て居る人があるのは、如何にも勿體ない次第である。

▽曾て佛京巴理に在りし日一友余を某官人に紹介す、言未だ半ならざるに官人之を遮りて曰く。高名は曾て既に之を承はる、今日のあたり相見るを得て喜甚しと、余私かに其意外に愕く。且くして官人余に問ふて曰く、時に貴下はお西ですか又お東ですかと。余聞いて啞然。

▽併し此は他人のする間違であるから、ドウでも宜いが。扨自分のする所

業は如何に。佛乘いじりなどは柄にもない。間違だらけだろうとも考ふるが矢張して見度い。之を淺間しいと謂つて咎める人もあらう。

▽併し又彌次馬も加勢の中と大目に見逃かして置かるゝ方も有るだらう。そこで頃日三祖の信心銘に就て取調べたことか有るから少し書いて見ませう。

▽隆興編年通論にも佛祖歴代通載にも信心銘の全文が出て居る、兩三字の差異はあれども大體同一文と見て支障なし、それから此銘の提唱には朱の眞歇和尚の拈古、元の中峰和尚の闡義解、吾朝では瑩山和尚の拈提、盤龍和尚の夜塘水などがある。尙此外に開版せられざる諸宗匠方の提唱本も數多い事であらうが此等は二三種閲目した。

▽今此等の諸書に就て異同を比較するに何れにも大差なしとは云へ、尙多少の相違あるを免れないから次に本文として通論所載の全文を掲げ異同の點は傍註として示すことにする。

至道無難。唯嫌二揀擇一。但莫二憎愛一。洞然明白。毫釐有レ差。天地懸隔。欲レ得二現前一。莫レ存二順逆一。違順相爭。是爲二心病一。不レ識二玄旨一。徒勞二念靜一。圓同二

大虛一。無レ欠無レ餘。良由二取捨一。所以不如。莫レ逐二有緣一。勿レ住二空忍一。一種平レ懷。泯然自盡。止レ動歸レ止。止更彌動。唯滯二兩邊一。寧知二一種一。一種不レ通。兩邊 通載 作處 失レ功。遣レ有沒レ有。從レ空背レ空。多言多慮。轉不二相應一。絕言絕慮。無二處不一レ通。歸レ根得レ旨。隨レ照失レ宗 通載 作功 須臾反 中峯 作返 照。勝二却前空一。前空轉變。皆由二妄見一 夜塘水 作現。不レ用レ求レ眞。唯須レ息レ見。二見不レ住。愼莫二 中峯 作勿 追尋一。才 中峯 作纔 有二得失一 通載 作是非。紛然失レ心。二由レ一有。一亦莫レ守。一心不レ生。萬法無レ咎。無レ咎無レ法。不レ生不レ心。能隨レ境滅。境逐レ能沈。境由レ能境。能由レ境能。欲レ知二兩段一。元是一空。一空同レ兩。齊含二萬象一。不レ見二精麤一。寧有二偏黨一。大道體寬。無レ易無レ難。小見狐疑。轉急轉遲。執レ之失レ度。必入二邪 通載 作迷 路一。放レ之自然。體無二去住一。任レ性合レ道。逍遙絕レ惱。繫念乖レ眞。昏沈不レ好。不レ好勞レ神。何用二疏親一。欲レ取二 中峯 作趣 一乘一。勿レ惡二六塵一。六塵不レ惡。還同二正覺一。智者無爲。愚人自縛。法無二異法一。妄有二 中峯 作自 愛著一。將レ心用レ心。豈非二大錯一。迷生二寂亂一。悟無二好惡一。一切二邊。良由二 夜塘水 作妄自 斟酌一。夢幻虛 中峯 作空 花。何勞二把捉一。得失是非。一時

放却。眼若不レ寐（中峯作睡）。諸夢自除。心若不レ異。萬法一如。如如（中峯作一如）體玄。兀爾忘レ縁。萬縁（中峯作法）齊觀。復歸（中峯作歸復）自然。泯二其所以一。不レ可二方比一。止レ動無レ動。動止無レ止。兩既不レ成。一何有レ爾。究竟窮極。不レ存二軌則一。契心平等。所作皆（中峯作俱）息。狐（通載作孤）疑淨盡。正信調直。一切不留。無レ可二記憶一。虛明自照。不レ勞二心力一。非思量處。識情難レ測。眞如法界。無レ他無レ自。要急相應。唯言二不二一。不二皆同。無レ不二包容一。十方智者。皆入二此宗一。宗非二促延一。一念萬年。無二在不在一。十方目前。極小同レ大。忘絕境界一。極大同レ小。不レ見二邊表一。有即是無。無即是有。若不レ如レ是（中峯作此）。必不レ須レ守。一即一切。一切即一。但能如レ此（中峯作是）。何慮二不畢一。信心不二。不二信心。言語道斷。非二去來今一。

▽ツマリ大同小異で互に誤と云ふことの出來ぬほどの者である。然るに禪門で古來提唱本として不斷に重寶がらるゝ處の四部錄を見るに、其中の信心銘は何に據つた者か知らぬが、句の排置の上に著しい相違のあるを見出す。即ち一つは

執レ之失レ度。必入二邪路一。放レ之自然。體無二去住一。大道體寬。小見狐疑。無易無レ難。轉急轉遲。

といふので。今一つは

究竟窮極。不レ存二軌則一。虛明自然（然字モ他本ニハ皆照トセリ）。何勞二心力一。非思量處。識情難レ測。狐疑淨盡。正信調直。契心平等。所作俱息。一切不レ留。無レ可二記憶一。

何う云ふ理由で斯く變化して居るか自分には分らぬ。

▽以上異同辯の序に今一つ云ふべきことは三祖の諡號に就てゞある。是は多くの史傳には皆鑑智禪師となつて居るに獨り編年通論にのみ鏡智禪師となつて居る。鏡の義は鑑であるが併し同字では無い。かゝる別諡も有つた者歟。信じ難し。

▽扨次に信心銘の講評である。曾て自分が之を講じた時に、達磨は人並以上寡言な方であつたが三祖になると反對にもう並以上の達辯家になつて仕舞ふたと謂ひましたが。其後中峯の闢義解を讀むに及んで此事は既に同和尚

が早く旣に道破して居ることを知つた。即ち和尙の言は次の如くである。

聞く少林の不立文字、直指の道、方に二傳して璨大師に至れるに師は信心銘五百八十四字を作れり。遐かに乃祖の風を變して文字の流布と爲せるに非らざるを得んや。

▽勿論信心銘以前に禪の極則を文字に現さんとした者は無いではない。即ち傅大士の心王銘である。水中の鹽味、色裏の膠青、決定して是有なれども其形を見ずと說いて居る處、筆を不可說の一事に染め形影を髣髴せしめんとせる苦心見るに難からず。併し文詞の上から見ても說明の上から見ても迚も信心銘の圓滿具足せるに比すべくもあらず。是三祖が獨り屢其饒舌を咎められて口禍の身に及んで止まざる所以でがなあらう。

▽併し何程言ひ回はし方が甘くとも禪の一事は到底不可說である。不立文字直指人心の外に一歩も踏み出せる者では無い。信心銘が如何にも能く出來て居ると曰ふて感服する者は必ずや已に多少見性の眼を具した人である筈で。其以外の衆には讀んで見ても何にやら分らぬと云ふのが事實たらうと思ふ。

▽一體禪は不可說である、併し獨り禪のみが不可說であると思ふと間違である。此はツマリ佛といふ者が不可說である爲めに然るのであつて、古往今來佛といふ字に明快なる定義を下し得た者は無いのである。

▽諸君も知らるゝ如く代數學にて未知數を示すに

$$a=x$$

と云いふ。斯く曰へば文章の形は $a=b$ と曰ふのと同一になるから a の定義は下せた樣に思はるゝが代數學で用ゆる x の使命を知つた者は誰れも之を間違へる者はない。即ち $a=x$ といふのは a は未知數なりといふことであるのです。丁度之と同一筆法が古來佛といふ字の定義を下す時に用ひられて居る。唯其 x といふ字の代りに充て箝めた文句によりて、或者は一見直に其假答なるに氣付く樣に出來、或者は何んだか a の定義を眞面目に下して居るのであらうと思はるゝほどに言回はして置く。併し何れにしても欺かれては行かぬ。決して $a=x$ の範壕を脫することは無いのである。

▽例之ば如何なるか是佛と問へば

乾屎橛……

と答へる。此答ぶりなら乾屎橛がxぞとは何人も直に氣付く。從ふて之を便りに佛の眞面目を直下に見て取らうといふ念も起る。然るに如何なるか是佛と問ふて佛は有難い者である、無量の壽と無量の德を具へ、三十二相具足圓滿し凡夫衆生の境界からは飛び放れて居ると答へたら如何。一應は成程左樣かと言いたく成る。即ち此答は已に$a=x$の範疇に居らずして$x=b$になつたかの如く思惑はさるゝのである。併し決して左樣では無い。無量の壽と云ひ無量の德といふ、其無量とは測る可からざる數といひふことで、即ち不可解と言つて居るのである。三十二相といふけれども佛壇の佛樣決して別に化物らしき容姿をせられても居らぬ。即ち是が佛なりと具體的に示せばそれは最早其瞬間に平常的の者に成つて仕舞ふのである。左もなくて眞に三十二相を兼備せる佛の姿なら想像しても能くは知れ樣筈がないのである。

▽此の如く結局$a=x$なりと示す外は無いけれども其xに何を充つるかと云ふだけの差異により宗に大小の二乘を生ず。假を眞の如く見せ掛けて此れで

欺くのが小乘の權教なり。併し疑心唯いや深くしてそれ式の教にては滿足されず、ドウにかして$a=x$といふ其眞面目に見參したいと願ふほどの連中には始て明らさまに乾屎橛の痛棒を加へる佛は乾屎橛なりと云ふのみでは面白いことも無いが、其乾屎橛で叩かれて見ては、何ンの只だ佛イジリよと曰ふて居ては濟まされぬ。直に來る我身の上の痛さで、一生懸命藻がきて見る外はない。此後者の如き手段に出づるのが即ち大乘教中殊に禪門の活作略である。

▽均しく佛を說かんとして居る。そして之に對する方法として禪門が取つて居るのが上陳の樣な者であつて見れば、今更ら禪門で不立文字と濟し込むのが不親切だとか、布教の上から面白くないなどゝ云ふて騷ぐ愚は出來ぬ譯である。併し又丁度其反對に何がな詞の上でxの言ひ回はし方を工夫して見やうと試むる人があつても、別に狼狽して之を異端邪說視して嚴しく指斥せねばならぬほどの必要もあるまい。何程藻搔いても到底此一事に寸毫をも添加することの出來る筈では無いから。

▽扨てかゝる見地から信心銘を取扱へばドウなる乎。其說明の仕方が餘り

に老婆親切に過ぎたりとして一方から嘲笑すれば嘲笑されぬことは無い。併し他の一方から云へば嘲笑する迄もない、何の効果も得られぬ位の事は三祖とて千分に熟知して居られる筈だ。併し元來が不言不語の宗旨だから此が無ければ三祖の時代に於てすら既に此く迄明白の見地を以て斯道を擧揚されたといふことは分らない。それが分るは實に此信心銘であると思ふと、嘲笑ドコロでは無い。吾人當代の人間は深く三祖の灰頭土面に向て謝意を表白せねばならぬ譯となる。

▽信心銘に對する此の如き感謝の念は古人にも既に充分有つた事が知れる。有つたに相違なければこそ拈提頌古其他種々の形で古人が之を賞翫された形跡が傳はつて居るのである。唯それと同時に淺識の徒が誤つて其饒舌に迷はされ有所得の見解を弄し。進んでゴニヨと云へる謎語の中に包有されたる眞意を會得しやうともせず。小乘權教の臼窠に墜在することを心配せられ、故意に其聲を大にして尤もらしい理屈を打ち消さうとして居らるゝのである。殊に其先達としては眞歇和尙の拈古を推す。之に次いで中峯の闢義解がある。

此も全く同一主旨から出て居るのである。

▽蓋し此等諸先德は信心銘を凡て二句宛打截つて離れ〳〵の者となし。それ〳〵に評唱して置かれたのである。それ故に此等の拈提を見る人は信心銘百四十六句五百八十四字と覺ゆる必要は少しも無い。至道無難でも、六塵不惡でも、手當り次第の句を記して之に參すれば好い事になつて居る。そうすると一句で好い者に百四十六句も用ひた三祖の手緩るさが自に見える許りになる。

▽併し今一本の大根を千枚切りに切り刻み、酢もみにして膳に載せたらドウであらう。其儘食ふても腹が張る。此は結構と言つて賞美すれば大根の用は既に辨して居るに相違ない。唯だ野にあるときの大根は如何にと氣付くべき便もなし。中峯や眞歇の遣方は人に大根の酢もみを當がふ者である。

▽中峯以後は固より現時の宗匠方に至つても多くは皆な眞歇一流の型に落ちて居る。今日坊間にある講義本は臨濟曹洞押しなへて、何れか此銘の提唱に酢もみ流を襲用せぬ底の趣向を爲す者あらん。實に是皆無と謂つて差支へな

し。

▽若し人余をして信心銘の酢もみを作らしめようとならば、余は恐く眞歇や中峯の上は手が遣れると思ふ。一句や二句づゝに切り刻むのでは猶ほ理屈がましいのである。何故に一篇五百八十四字、字毎字毎に頌し去らざるのであるか。願ふに此五百八十四字は一字々々に皆な大法を讃嘆して其聲今古に貫徹して居るのである。何んと言つて讃嘆して居るかと云ふならば、答ふるまでも無い、

至と謂つても
言語道斷

道といつても言語道斷、無といつても難といつても何れも皆言語道斷ヂヤ。

▽此れでは餘り料理が過ぎるといふ人もあらう。夫ならば、寧ろ本に返つて大根は大根のまゝで厨下に進呈するとしやう。そうすれば先方の氣儘に料理して用ゆることも出來るから、料理の仕損じは當方其責に任せずとして、頗る面白い結果が見られぬとも限らぬ。

▽かゝる考から信心銘を讀んで見ると全章を四段二十九節に分つことが出

來る。第一段には至道の何邊に存するかを示し。第二段には先づ至道を得る方法と已に之を得なば之を得し所以の筌蹄は早く捨てゝ仕舞はねばならぬことを示し。第三段には至道の體。第四段には其用を論じて終に篇を結んである。

▽以上の見方に就ては余は之を近著參禪錄に詳述し置きし故、今茲に之を重説するの煩を避ける。兎も角一本の大根には葉もあり鬚もある。之を有りのまゝに書き別けて見ると上述の樣な者になると愚考する次第であります。

▽以上不十分な調査で缺點も必ず多々ならんとは思うが、無道大和尙から原稿を乞はれたから、有るだけの材料で書き上げたのが此一文である。若し夫れ大方の示教を賜りて余が愚蒙を啓發するの便りともならば是實に望外の幸と謂つべきである。

▽終りに臨んで一言することがある。本文を草するに先じて春光院の孤山老和尙から澤山珍藏の佛典を拜借し且つ種々明説をも拜聽して行文に少からぬ便宜を得たといふことである。茲に謹で師の好意を鳴謝致します。

第五　俠骨論

荊軻曾て匕首を懐いて虎狼の秦に入り、易水を渡つて歌ふて曰く、風蕭々として易水寒く、壯士一たび去つて復還らずと。淵明乃ち平淡の一詩人を以て能く、豪放雄邁なる絶代の大作を出し、以て其迹を吊ふ。其詩に曰く、燕丹善く士を養ひ、志强嬴に報ゆるに在り、百夫の長を招集し、歲暮に荊卿を得たり、君子知已に死し、劍を提げて燕京を出づ、素驥廣陌に鳴き、慷慨我か行を送る、雄髮危冠を指し、猛氣長纓を衝く、易水の上に飲餞し、四座群英を列す、漸離悲筑を擊ち、宋意高聲に唱ふ、蕭々として哀風逝き、淡々として寒波生す、商音更に涕を流し、羽奏壯士驚く、心に知る去つて歸らざるを、且さに後世の名あらんとす、車に登つて何時か顧みん、蓋を飛はして秦庭に入る。凌厲萬里を越へ、透迤千城を過ぐ、圖窮して事自ら至り、豪主正に怔營たり、惜哉劍術疎にして奇功遂に成らず、其人已に沒すと雖も、千載餘情ありと。願ふに是れ一片の俠骨自ら制するに由なく、一死以て知己に報

ひて悔ひさる底の漢子を抽いて爽颯たる雄姿、千歳の下尙は能く眼前に躍如たるを見すや。而して其負氣卓牢渾身總是れ膽なるの大丈夫を狀するに至つては則ち盛唐の詩人王麿詰の靈筆に須つあり。彼は歌つて曰く、一身能く兩雕弧を擘き、虜騎千重只た無きに似たり、金鞍に偏座して白羽を調へ、紛々として五單于を射殺す。誰か知らん、咸陽の遊俠少年多く、華奔風流、白馬を驅り金鞍に跨かり、新豐の美酒斗十千、相逢ふて意氣君か爲めに盡さんとは。邯鄲由來遊俠を出し、不羈放縱殆と制するに道なきもの、豈に故なくして起ると曰はんや。高適則ち爲めに氣を吐きて曰く、邯鄲城南の遊俠子、自ら矜る邯鄲の裏に生長すと、千塲博を縱まゝにして家仍は富み、幾處か讐を報ひて身死せす。宅中の歌笑日に紛々、門外の車馬雲の如く屯す、未た知らす肝膽誰に向ふて是なるを、人をして却て平原君を憶はしむ、君見すや、今人交態薄く、黄金用ひ盡して還て疎索、玆を以て感歎舊遊を辭し、更に時事に於て求むる所なし、且さに少年と美酒を飮み、往來して西山の頭に射獵せんとすと、嗟呼果して然る乎。然らは則ち遊俠は蓋し托する所ありて起れ

る者なり。

夫れ惟ふに侠骨は人倫の精華、道義の淵源なり。彼は勢に趨くものを悪み、利に奔るものを悪み、強辯抗辭巳か非を飾る者を悪み、傲然として自ら高ふる者を悪み、競々乎として他人の鼻息を伺ふ者を悪み、信なきを悪み、義なきを悪み、愛なきを悪み、慈なきを悪み、上官あるを知つて下僚あるを知らざるを悪み、詐文あるを知つて口約あるを知らざるを悪み、御都合あるを知つて道理あるを知らざるを悪む。彼か千行の紅涙は常に弱者に向つて注き、敗者に向つて注き、理あつて伸ひざる者に向つて注き、資なくして起つ能はざる者に向つて注ぐ。其嘯くや嵎を負ふの虎の如く、其騰るや雲に乗するの龍に似たり。振起一番以て其所信に赴くや、洪濤澎湃として遂に收拾す可からす。壯の烈と、鬼神爲めに泣き、人天爲めに哭す。それ巳に之を貫くに一誠を以てし、之に當るに一死を以てす。何ぞ況や官に居て辭表を懐にするか如きことをや。稠人の前に立つて罵詈嘲笑の中心たる如きことをや。侠なる哉侠。我は侠に與せん。

世間悪を作さゝる者多し。是猶ほ所謂羨猾共に不可なる者にして毫も言ふに足らす。又善を行する者あらん。只是當に爲す可くして後僅に之を成す者。何の稱すべきか有らん。唯夫未た必すしも爲すを要せすして而して自ら進んで之か衝に當り、能く一身を犧牲に供して而して悔ひさる者、是れ之を眞の侠骨と云ふ。居常諜々善の爲す可きを説き、人の導く可きを唱へ。一朝事あり、類の身に及ばんとするや、則ち閔然退いて毫も曾て知らざるまねし、僕關せすと云ふか如きは、是或は其悪に與するの誚は則ち免るゝ事あらん。而かも進んで人を窮厄の中に救ひ、事を紛糾の間に裁するか如きは、遂に得て望む可からさるなり。是の如きは蓋し彼の滔々たる利益主義者の想ひ及はざる所にして、一に之を眞の侠者に待たすんはあらす。世の侠者に渇望する所以の者固より一日にあらざるを知らん。

今の時に當り、僅に一片の侠骨を持し、以て吾人の理想を實現する者、蓋し唯だ博徒の一群あるのみ。然れとも人或は其放蕩無頼天下の遊民にして共に齒するに足らさるを云ふ。然り、彼徒の無學文盲なる固より擧げて論する

迄もなし。之が細瑾小疵を求むるに至つては殆ど窮極する所なく、所謂多々益辯する者あらん。若し彼等にして實に取る可き處有らば則ち只其義俠の精神のみならん。頃者、余晩涼に乘じて新京極に浪華節を聽く、座に二三の大哥あり。余に說て曰く、子も亦た我黨の心事を知る乎。世人動もすれば則ち我黨を罵つて粗となし暴となす。何ぞ知らん、我黨の君子將に輪贏を盃吳座の上に爭はんとするや、細心精慮、眼苟も轉せず、口苟も開かず、快や尿快や飯、以て能く連日連夜の戰鬪に從事することを。正に是れ世の所謂一心不亂一生懸命といふ者にして、是の如きの境界恐くは子が口邊數莖の髭鬚を白盡して尙ほ達し得ざるの妙趣あらんと。余聽いて感發する所あり。膝を打つて大に嘆じて曰く、是ある哉、是ある哉、余も亦嘗て之を疑ふこと久し。顧ふに諸子の一機一境、迥然として遙に世と相異る者、其因蓋し皆擧げて彼の一心不亂の中にあらん。而して試に之を古今の靑史に照すに、楠氏の忠、加藤の俠は說かずもがな。德川氏以后、髯の自休、腕の喜三郎、幡隨院長兵衛を始として、近くは駿の次良長、阪の小鐵の徒に至るまで、孰か皆其の一心

不亂凝つて一片の俠骨と化し、以て神洲の精華を煥發せる者に非らざるを知らんや。然かれども余は更に進んで諸子に問はんと欲す。諸子已に能く次良長の名を記せり、小鐵の評を誦んず。而して恐くは猶ほ未だ他に天下の大俠客古今の大博徒あつて存することを知らざらん。此人。上は王侯貴人より下は草木禽獸の末に至るまで、凡て集めて自家社中の一員とし、之を率ひて天下に横行し六合に睥睨す。或時は百萬の猛士を簇からして雌雄を一戰の下に決せしめ、或時は萬朶の櫻花を發いて佳人を一室の内に舞はしむ。地に在つては河嶽となり、天に在つては日星となる。大史の簡、董狐の筆。孰れか皆此人本來の面目手腕眼前に活躍し來れる者に非ずと爲んや。然れども諸子或は曰はん、僕等遂に彼と一面の識なしと。嗟乎何ぞ思はざるの甚しき。宏量彼の如く奈何ぞ親疎を問はん。未だ相識らざるに當りて早く已に諸子の形軀を拉す。無底の藥籠徒らに深くして處を知らず。奮勵激發喚んで響ふるを期し、撥草參玄偏へに見性を要す。諸子乞ふ先づ意を決して一たび彼の足下に就くべし。彼必ず温顏客を迎へ遠來を撫し久濶を敘せん。諸子是に於て其の

來るの甚だ遲かりしを悔ひ、衷情を數行の酒に托して、茲に親しく親分子分の訂盟を交はすに至らん乎と。曰ひ了つて大哥の輩を見れば彼等只惘然として會せざる者の如く、相顧みて互に苦笑するのみ。余是に於て翻然悟る所あり。噫吾實に過てり。今や滔々たる者天下皆然り。自ら士を推し大夫と稱する者猶且つ大俠此の如き者あつて存することを知らず。顧ふに十にして八九を算す可し。今輙ち是を之責めずして却て之を大哥に問ふ。豈に本末を失すること甚しき者に非ずと爲んや。是を俠骨論と爲す。維時仲夏、陰雨斷續。病窓禿筆を呵し、稿成つて皎月樹間に挂る。古歌を口吟して曰く

本來の面目坊が立姿一目見しより戀とこそなれ

第六 神速步行術

饒舌るなら無舌で饒舌れ、芝居するなら腹でせよといふ風に吾邦の技藝の蘊奥は凡て皆口舌手足の末に止まることを忌んで、無理からでも腹藝を打たした者である。何れも皆禪から出た者であるが、就中人を驚かすに足るは飛脚の術であらう。道を步むに足を用ひずして腹を用ふると曰へば、其は恰も蛇か蚯蚓の樣にでもするのでは無いかと考へる人も有らうが、左樣では無い。步む道具は足であるが之を動かす原動力を腹に蓄ふるのである。之を神速步行術と稱して一日三十里を步むに難からず。熟するに及んでは能く五六十里の遠きに及ぶといふことである。

舊幕時代の名士の中でも大塩平八郎の如きは斯道の達人で、大阪から半日で入洛して賴山陽を驚かしたといふ有名な話がある。又仙臺藩の林子平は二日目には江戸に着き軍學の講義を聽いて行くのが常であつたと云ふ事である。

かゝる有力なる技術も傳ふるに其人を得ざれは取り返へしの付かぬ害惡を

生する。例之は昔時の事なれば江戸で大罪を犯した者が其夜の中に箱根の關を越すといふ樣な事も仕兼ねないから、弟子を選んで傳へ且つ中々秘密に行つた者らしい。今日此法を傳授して居る人が猶ほ生存せるや否や僕は知らぬ。僕が大學の豫備門に入學する前に其門衞に一人の老人が有つて是が中々の達人で有つたさうである。それから學生の中に其傳授を受けた人が出來て、それが未だ汽車の出來ない時分に東京鎌倉間を一日に往復して平氣な顏をして居たと云ふ事である。此學生で有つた人にも僕は面識は無いが、僕の友人に之を知つて居る人が有つて、親しく其談話を聞き又多少其方法をも教はつて、筆記して置いた者が、今僕の手許に保存されてある。

勿論技術の事であるから、此筆話を讀んだ丈では少しも歩けない。併し神速歩行術と云ふ者は何を修行する者かと云ふ事は分かる。大に伸びんと欲する者は先づ大に屈するといふ譯になるので、一日五六十里も歩まんといふ修行を四疊半の座敷で、而かも最初は端座したまゝ、稽古するといふに至つては頗る驚かざるを得ないでは無い乎。端座してする修行は腹の力を養ふにあ

つて、此點は袮僧家から聞へは恰も三度々々の家常飯にも比す可き者では有るまいか。果して然らば春花秋月、天を笠となし大地を草鞋と履き廻はる雲水生活には頗る持つて來いの藝當である。

此筆記の話の主人公が今猶ほ健在ならば直に之に就く道もあるが、左なくば只此筆記による外はない。それで兩三年も研究工夫して見れば、物に成らぬ事も無からう乎。世に僕と感を同うせらるゝ君子も有らうと思ふ故、今是から筆記本の大略を書拔く事に仕やう。

神速歩行術傳書

臍納序破急、

一足一息、中息、小息、

腰緩、小刻、小緩、

片足歩向四五、左右五六、腹歩、腰歩、前拔、後拔、

向風、後風、道千鳥、千鳥車、色道、砂道、

是が傳書の寫しである。臍納といふのが坐り込んでする修行で、それが充分に出來ねば用を爲さぬといふことである。それから其呼吸で一足一息以下三種の形を學ぶ。此れも矢張四疊半の坐敷でするので唯グル〳〵と幾度でも隅を回はると云ふのである。腰綏以下三種は長途を歩んで疲れた時歩行中にも之を休むる事の出來る方法であつて、先づ按摩の一種と見て好からう。片足歩以下は實地戸外に歩行する時用ゆる形で、ツマリ一足一息等の精神を以て幾分之を變化し速く歩める樣にした者である。例之は前扳では身を後に反らし前方を輕くして進み、後扳は前に傾いて進む、併し足の運には何處までも一足一息等の眞髓を失はぬ樣にすると云ふ譯である。向風、追風、各體の備を別にし、色道には泥濘を歩む心持を說き、砂道には海濱や砂利道の困難を凌がしむ。偖又た道千鳥や千鳥車では突嗟の間に身を翻へし　衝突を避くる爲めの處作を示す。僕の持つて居る筆記本には各條凡て皆な詳細なる說明が付けてあるが今は全く之を略します。

其他食事に關する注意が有つて、成るべく消化の好き者を用ふる事にして有ります。飯ならば二度煮を可とすと有る。ツマリ飽食を戒むるのである。腹工合は八分目で止め其代り一日四回又は五回も取る。

草鞋の緒は足の指の股に當る所は縦に重ね小寄紙又は布切にて結び指の擦れるを防ぐ。跗骨の上に結ぶには一度捻ちりてからする。此くすれば只一本を解くのみで鞋が脱けるからであるとして有ります。

腹には二丈許りもある白木綿を捲き付け旅宿に着けば神氣の鎮まるを待ちてから之を解く。

夜分足を伸べて寢ぬるは疲勞を增す恐あれば眠むる前に必ず膝と首とを緒にて絆り置く可しとある。

咽喉の乾くまゝに水を用ゆるは宜しからず。其代り歩行中常に口中にて輕くサ、〳〵と唱へ行く乎或は又舌を捲きて進む。是は確かに唾液の分泌を促がす効能ありて渴を覺えぬ樣になる。

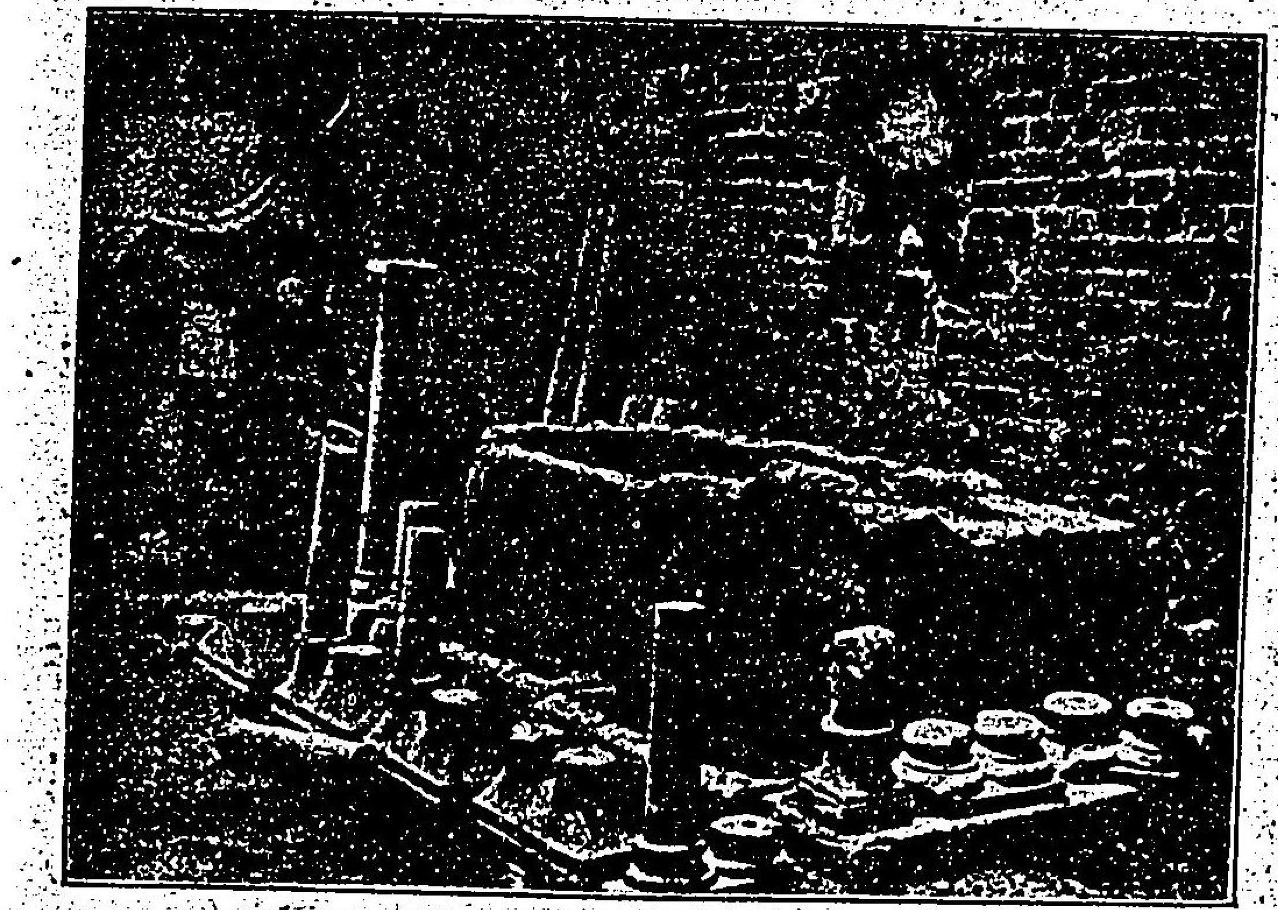
偖以上略述した處によりて神速歩行術といふ者の大概は分つた事と思ふが、遺憾ながら僕自身には未だ何等の經驗を持つて居ぬ。只前にも述べし如く吾

邦にある諸腹藝の一種として衲僧家の感興を惹くに足るだらうと考へたから玆に之を書き記したのである。

第七　青山の一角

○骨を瘴江の邊に瘞めんことを期せし韓愈には似もやらで、セーヌ河畔に我遺骸を捨てよ、希くは長へに愛好する佛人の群に在ることを得んと、遺言せし那翁の墳塋は誠に壯麗な者である。彼が一生の間に爲た事を恩に着る人も有つたらうが、併し又家も寶もメチャ〱に壞はされた恨に燃へし人の有つた事は確かである。去るにても時代とは奇妙な者よ。百代を經過せる今日では恩怨共に兩ながら消えて迹なく、玆の墳塋に參詣するほどの者は誰彼れの差別もなく皆一樣に脱帽して心からなる敬意を表して居る。磨き立てたる大理石の棺槨を軍服嚴めしき老兵の立番せる、一種の威あつて覺えず人を壓服せんとする處何となく日光の東照宮を思ひ出さずには居られぬのである。

○夫れと是とは反對に、見すぼらしく感じたのは伊太利を旅行した折エロナの市でロメヲのは無いがジユリエツトの塚があると云ふので參詣した時であつた。門前に香火を鬻く者が居たから直ぐ心許りの手向を爲た。誠に物淋



ジユリエットの墓

しい町の片邊りで旅人の魂を驚かすこと夥しい。夫れにしても本と／＼煉瓦の建物の中に在るのだから風雨の害も餘り受けまいし、加ふるに掃除手入が相應に行屆いて居るから心強い。之を目黒の比翼塚に比較すれば矢張霄壤の差と謂はねば成るまい。但し目黒の方に眠れる御本人同志は此方のよりは必ず遙に滿足して居るに相違ないと思ふ。

〇同じ伊太利はゲヌアの港に有名なるカンポー・サントー（墓地）と云ふのがある。白皚々として宛がら長橋を架したる如き回廊に幾百幾千となく並び立ちたる石像は何れも皆富有なる私人

の墳墓である。一基の石標に皆少くとも巨萬の財力を用盡して死後の榮華を誇る考であらうが、偖て之を眺むる吾等には如何にしても巴理のルウブルやプチー、パレーの彫刻を見て居る時の樣な心持には成れぬ。何にしろ其刻んである形像が多くは皆骸骨が薄衣を着け宙有に彷ふた時の姿や、天に號ひ地に憬がれて亡き人の跡を慕へる小供や未亡人の樣子斗りだもの。

〇羅馬のカタコンブも奇々妙々なる場所である。罌粟坊主の齋致僧侶に案内され、油煙の揚かる手燭を提げて、妖氣鼻を撲つ土窟の中に降りて行つた。降り着くと直ぐアーチ形の門がある。能く見れば是は膊骨や大腿骨から成る建築物だ。忌々ながら之を潜ると土手がある、脊椎骨を以て材料とする。偖次第に進めば兩側が土壁になる。之に横穴が有つて棚の形に成つて居る。何んでも耶蘇宗の出來始めには公然之を墓地として使用した者だが、後異教徒の迫害を受くる樣になつてから、此穴は矢張彼等の墓地であると同時に又其の世を忍ぶ屈強なる避難所に化したのである。如何樣廣大なる地下室にて羅馬

ゲヌア港カンポサントの一墓標

の町の下で方數里に及んで居ると云ふ事である。

〇ネアーペルの港に着いた日直にサンテルモの古城を吊ひ、螺旋形の石階を下りて何とも謂へず陰欝なる土室に這入つた。天井に近い部分に一尺四方許の小窓は有るがそれも素より鐵柵嚴めしく固めてある。言ふ迄もなく是は昔し城内に設けられたなりの牢屋であるのだ。薄暗い窓の明りにすかして見ると室隅に一の棺がある。中には軍服で手錠を箝められたまゝ木乃伊に化した屍體が見える。數百年前に起つた國事犯罪事件に關係せる軍人そうな。それから自分等の立つて居る床の下にも尙ほこんなのが幾らもあるから見せやうかと言ふことで有つたがモウ澤山と斷つた。

〇木乃伊と曰へば大英博物館の木乃伊こそ見事な者よ。今を去ること大凡五六千年、想像にも及ばぬ程前の、埃及國の王樣で名前まで能く分かつた人の骨が、半は朽ちた棺材と共に陳列されて居るのを見た。其外之よりは稍新しいので全身布で卷き固め美麗なる色彩に形象文字で履歴まで記るした者は幾千となく有つた。願ふに木乃伊とは兒孫の痛切なる哀情から亡き人の靈祭

らん爲めに作られた紀念である。それから何れも之を堅牢無比なるピラミッドに安置して、幾千代經とも變りなき安穩を享けさせ給へと祀き祭りし者ならん。左りとては復た如何にせん。有爲轉變の世の習ひ、物の憐はれを茲に留めて、大埃及帝國から英國三界まで墓地の移轉が强行せらるゝ始末となつたのである。偖それにしても古人〳〵と噂にはするが、何様僕には五六千年前即ち堯舜以上の人を今目のあだり見ることが出來たのだから、其時は少し妙な氣持にならざるを得なかつた。

○偖日本の墓地で光彩のあるのは泉岳寺であらう。四十七士が銘々に皆奇拔な歷史を持つて居て、浪華節か講談で語つて聴かすと、一年たつても讀み切れぬほどに有るが。偖足一たび泉岳寺の境內に及び、前後左右を見廻はせば、君臣一纒めにしてズラリと四十七八、それにまた天川屋とか何とか緣りのある面々まで、皆一度に拜謁することが出來る。是は重寶だと云ふのが兼ての考なりしも、巴里に來て其パンテオンを見てから彼の重寶さが猶々遠く此に及ばぬことを悟つた。ルソーやヴルテヤを始めとし、百餘年間、祖國の

認めて偉人傑士を爲せる者は凡て集めて幾十人、何れも厚く土室に葬つてある案内の先生が金モールの御仕着せで聲高らかに、是はベルテロー博士夫婦の墓、博士の佛國學界に重を爲せるは曰ふ迄もなき事ながら、さしも夫人の病歿を悼まれて同じ日の夕方に又もや跡を追はれたる博士の情愛に動かされ、前例を破つて夫人の柩をも玆に遷し、死後の同棲を許されし博士の榮譽こそ實に當代の語り草、なととやる處は泉岳寺には無い圖である。

○是と相似て更に莊嚴を加へし者を龍動に於けるエストミンスター、アベーとする。宏大なるネイブの床に偉人の名前が家並みに刻んである。ニウトンのお隣りがダーヴインで、チヨーサーの長屋にテニスンが住つて居るといふ樣な格である。勿論此表札の下には其所の主人が長なへに閑けき眠を貪られつゝある譯だから、勿體なくて浮々踏んでは歩るかれない。イヤ全く足許御要心である。

○パンテオンやエストミンスター、アベーを見てから、ドウやら急に大丈夫當に此の如くなるべしなんどと云ふ樣な氣も出たが。偖日本に歸つてから、

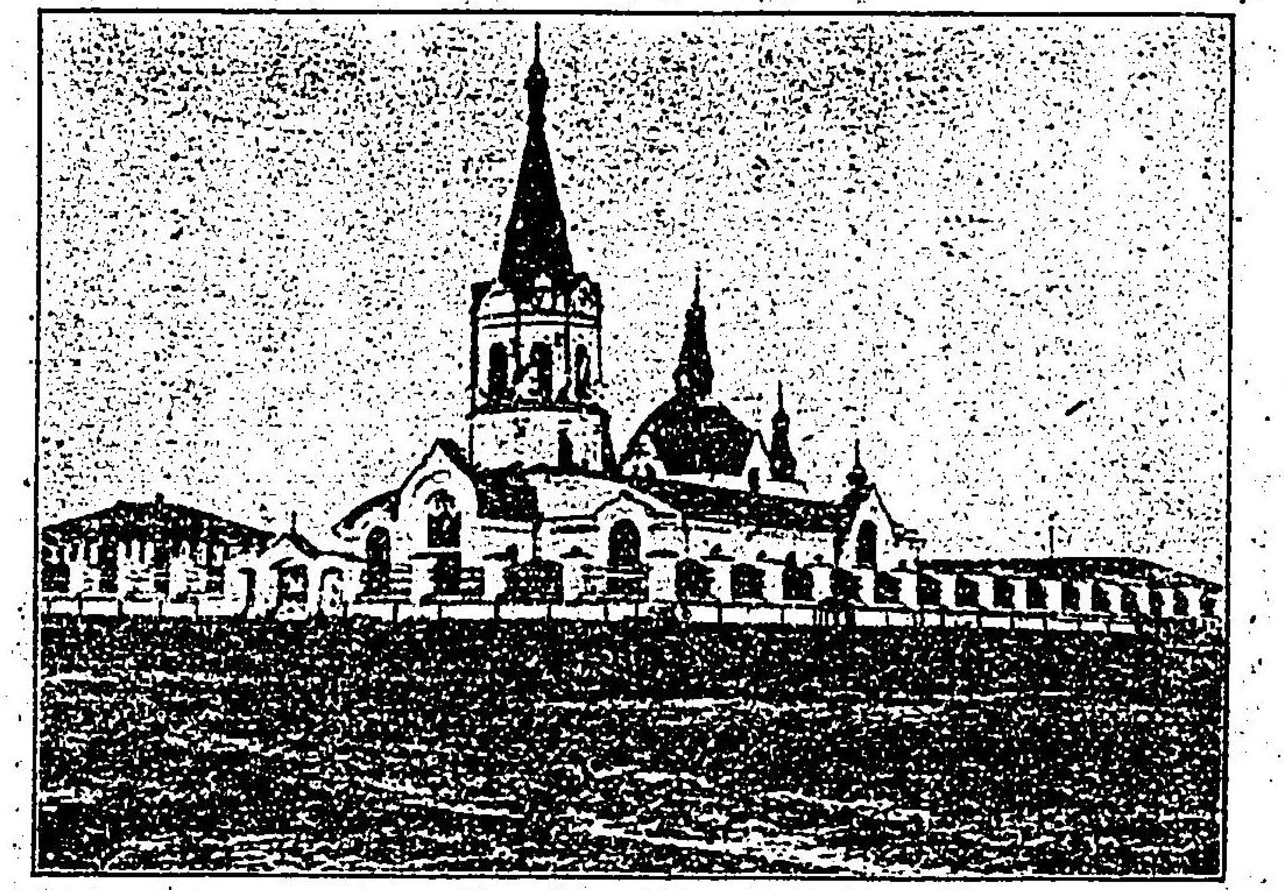
五六百級からある花崗石の石段を一氣に登り、彌陀の峰頂に、三百年後豐大閤の墳塋を吊ふた時。背後には嶽湖の天嶮あり、眼下には伏見京都の繁榮を眺めつゝ大明三界まで連れる大阪灣を控へたる形勝の地をトしたる大閤の雄圖を思ひ浮べ、嗟呼佳い景色、重箱の隅見た樣なパンテオンはモウ眞平と云はずには居られなんだ。

○預知千里龍門路、急瀬奔湍幾苦辛。此は今から二十五六年も前に僕が笈を負ふて獨り郷關を出て、今日の日本中學、以前の東京英語學校、に入學せんとした時、舊師修堂水野先生から僕に賜はられた送行の詩である。偖世の中は端なき紐の波にも似たるらん。僕等の爲て來た樣に今も亦た青年諸君は猶つて螢雪の勞を積まれ、巳かじゝ、目さす登龍門にと肉薄されつゝあるを信じて疑はぬ、又それは大に遣る可しであるが、併し諸君、吾人は門に入つても猶ほ盡きね。更に長なへに適往せねばならぬ一條の路あることを忘れてはならぬ。然りそれは死である。偖て死は易し、死處を得るは誠に難い。知らず諸君は何の處にかその形骸を捨てんとするぞ。哈爾賓か、馬革か、壘の

上か、抑も又た青山の一角か。

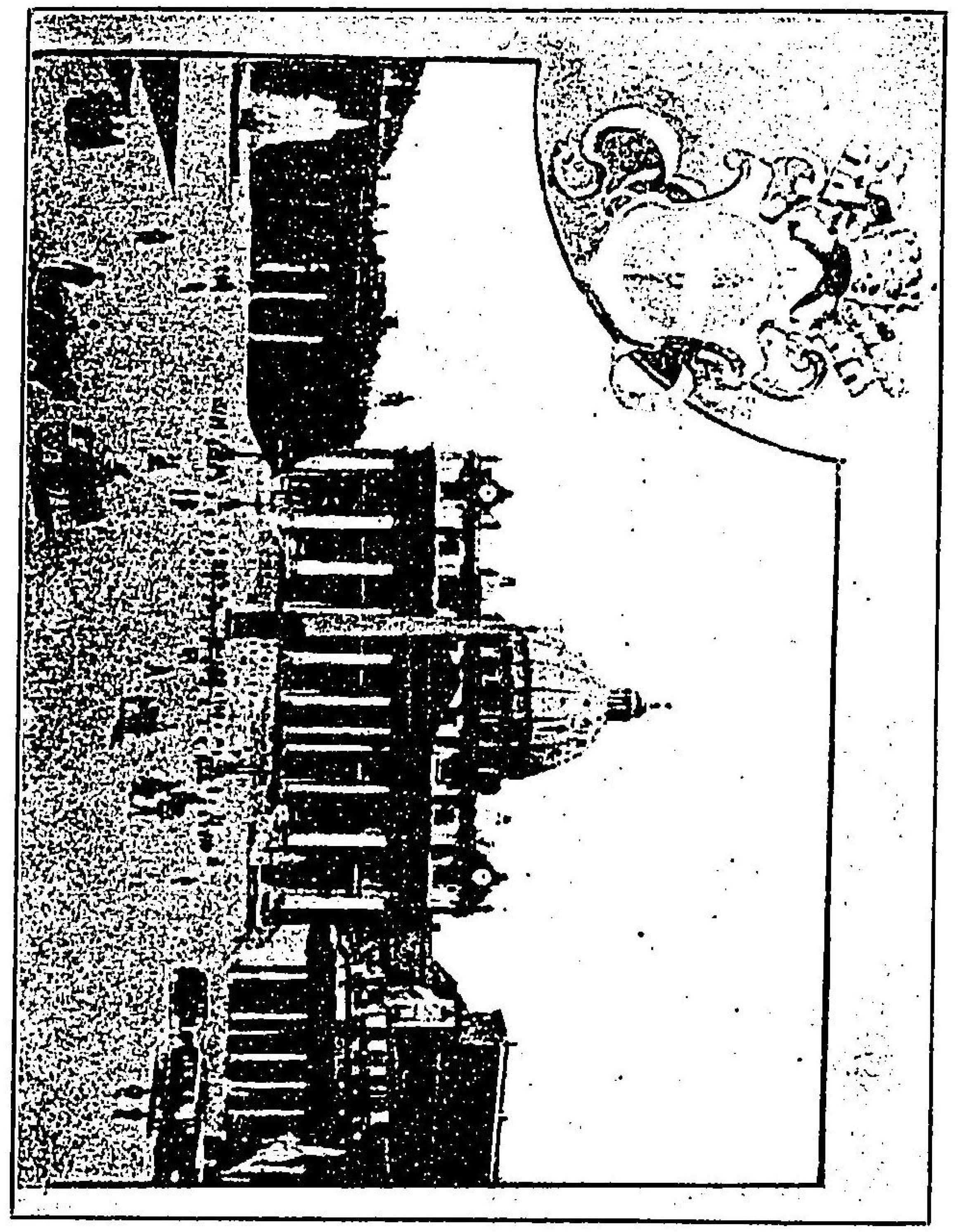
第八 佛教興隆の三策

余は今次西比利亞旅行中端なくも耶蘇教の西歐人に對する關係と佛教の本邦人に對する關係の頗る能く相似たる者あることに著目せり。西比利亞とは蓋し一望際涯なく坦々として連れる一大原野にして、露政府嘗て久しく之を以て其罪囚の流遷に充て同時に生民蕃殖の一法に供せし位なれば、言ふまでもなく文化不到の域にして住民の多數は皆粗野樸訥の弊あるを免れず。汽車の沿道、到る處に小部落あれども悉く皆矮屋蝸舍の群に過ぎず、殆ど顧眄に値する者なし。只トムスク、オムスク、イヤクーツクの如き著名の大都會は西比利亞中にても本と屈指の者なれば例外とせざるを得ず。偖かゝる見すぼらしき部落の中に何時も巍然として天空を摩する計りに屹立せる大建築あるを見るは是れ豈に一奇ならずとせんや。斯の建築こそ言ふまでもなく希臘教の教會堂にて、内に人あり、其人は彼等民衆に比すれば必ずとも一段勝れし學德あり、一村一落の仰いで以て師表とせる宣教師に外ならず。斯かる宣教



西比利亞マリインスク教會堂

師は人智未だ開けざる西比利亞の頑民を指導し、孜々として倦まず營々として役せらる。或る時は王者となりて慈み或時は判官となりて懲らす。必竟日夜に神の福音を傳へて餘念なき徒なり。今夫れ翻つて之を本邦の上古に見よ。當時民衆の先覺者たりし者は何れも皆是れ佛敎の僧侶なりしに非ずや。弘法然り、傳敎然り、親鸞、日蓮、又同じ、否、敢て例を遠きに求むるの要なし。現に明治御維新以前迄は全國到る處に寺子屋制度ありて之が師表たりし者は則ち佛敎の僧侶なりき。而して今日のあたり此の寺子屋制度に比肩す可き者



羅馬府サンピエトロ教會堂

を西比利亞の原野に在つて見る。彼我何ぞ夫れ其徑路の相似たるや。

願ふに西比利亞に於ける寺院は其本質に於ては決して宏大壯麗なる者と謂ふを得ず。只だ之を其四隣に比較して後其著しく偉觀を呈せる者なることを知る可し。今夫れ西歐文化の中心に於て、或は羅馬のサン＝ピエトロ、或はミラノのヅオモ、乃至はキヨルンのドームの如きに至つては其構造雄大無比、固より遠く超然として一世の表に出でたる者なるが故に且つ之を論せず。其他幾千となき教育の類すらも何れか皆輪奐の美を盡くし莫大の財力を靡しつゝ造作せられざる者あらんや。乃ち此等の教會は立派なるに相違なしと雖も之と同時に其の四周に於ける普通民衆の建築が極めて佳麗となりしが爲めに其の著しく人目を愕かすこと稀とはなれり。然れども若し人斯かる現象を以て單に建築上の問題のみとして看過するが如きことあらば、蓋し是大なる誤ならん。何となれば彼の四周の民家の進歩せると同時に人民其者の智識も亦た頗る進歩して早く已に宣教師輩を凌駕し去れる者あるが爲なり。

余の曩きに歐洲に在るや多く交を其地の青年に納れき。彼等成童にし元服

の禮を寺院に受けざる可からず。爲めに屢教會に登りき。歳壯なるに及んで殆ど復之を顧る者なし。否、啻に青年のみに非ず、一家の主婦主人と雖も亦た常に之に詣つる者實に寥々たり。一見其の宗教に對する感想の冷淡なるを疑ふべし。事實若し果して眞に然りとせんか、歐洲に於ける耶蘇教の勢力は今や或は孤城落日の狀に瀕せりと云ふとも不可なきに似たり。然れども如何せん此結論は斷じて誤れり。請ふ左に其故を論せん。

已に述べたるが如く、西比利亞に於ける耶蘇教の宣教師は今現に其地民群の先覺者なり。之と同樣に歐洲諸國に於ける宣教師も皆曾て一度は人民の師表たりし日ありしならん。此等慈善的事業は數代を經過して愈深く人民の腦裏に浸染す、耶蘇教衰へたりと云ふとも、豈に民衆何れの部分にか一片感謝の眞情の伏在すること無からんや。特に耶蘇教の歷史には惡戰苦鬪の活劇ありしを思はざる可からず。吾人は今之が記念を諸方の博物館裏に繪畫として發見するを得。其或は彼等自身が遭遇せる、又或は彼等が他に向つて加へたる、殘忍非道なる行爲は深く彼等の腦髓に雕刻せられ、子々孫々相傳へて次

して其記臆より離るゝなかるべし。凡て上記の關係は本來歷史的の事なるが故に本邦に於て新に生じたる耶蘇宗信者の預り知る能はざる處にして其狀或は恰も新に歸化せる外人の我國土に對する感情に髣髴たる者あらん乎。枝論は且つ措く。畢竟此の如く歷史的に培養し來れる耶蘇教の根底は決して一朝一夕の能く西人の腦裡より芟除し盡さる可きに非らざるを知らん。

觀して玆に至り仔細に耶蘇教の歐人に及ぼしつゝある勢力を繹ぬるに隱微の間猶ほ極て偉大なる者ありて存するを發見す。即ち歐人の一擧一動は先天的已に耶蘇教化したる者有りて今更ら事々しく毎日曜に寺詣てせずともの事なるなり。Gott sei Dank など云へる嘆聲は彼等が求めずして自然に發し得る詞なり。更に表面に現はれし耶蘇教の勢力如何を觀察するに先づ之を冠婚葬祭誓詞等の上に見る。冠婚葬祭は實に古今東西を通じて人間の大禮なり。誓詞に至つては本と良心の關係する所にして人格の基礎に抵つ。此かる重要なる諸點に於て耶蘇教は今日と雖も猶ほ其全權を歐人の間に維持せり。

以上西教に關して觀察し得たる所を以て之を我邦佛教の現狀に對比すれば

如何。其社交的表面に現はれたる者としては此には只僅に葬式佛事の一役あるのみ。然らば裏面的方面即ち安心悟道の點より見るとするも是亦佛教が現今盛に社會に貢献しつゝありとは言ひ難き者あらんと思はる。勿論僧侶諸師の中には碩學智識少からざる事ながら、先づ大勢より打算して何人も佛教の感化力は頗る薄弱なりと爲すに躊躇せし。然り佛教は今日己に退潮に棹しつゝある者なり。然れども茲に佛教家諸師の據守すべき最後の金城鐵壁あり。是れ恰も西教の歐人に對すると同一關係に出づる者にして即ち其邦人に對する歴史的功績を指す。未開時代に於ける佛教家の慈悲的活動は頗る目覺ましく其本邦の民衆を感化せること誠に著大なりければ、邦人の佛教に對する感謝の念は實際牢乎として堅く。迚も一朝一夕の能く奪却す可きには非らじ。此點よりして佛教家諸師は今日尚暫く安眠高臥、羅窓に閑夢を貪らるゝとも、卒然破滅の狀態に陷ることは萬々無かるべし。然はさりながら生存競爭の現世に在り、無爲徒手にして長く人後に落ちざる理由も無ければ、佛教家たらん者の今に於て奮起一番大に當代に雄飛せんことは、蓋し一日を早くして必

す一日の利ある者と謂ふ可く、乃ち亦た是を千早の孤城に據守しつゝ楠公の智略を襲用する者に比す可し。

諸師或は曰はん、請ひ問ふ其策は如何と。然り余に三策あり。今ま試に之を說かん乎。

第一、宜しく德性を涵養すべし　夫れ佛教は慈悲を以て其主眼とす。諸君にして若し之を以て畢生の目的とし又末代までの鏡ともせば、豈に啻に日本のみと曰はんや、更に世界に及ぼして以て其德化を布くとも、よも難事にはあらじ。願ふに近世慈善事業といふ者民衆の間に勃起し爲めに莫大の金錢を費やすことありと雖も、諸師の慈悲には固より一錢の投資すら要せざるべし。若し要する者あらば是即ち絕倫の努力操行のみ。余近頃妙心寺より惠贈せられし關山國師の御一代記を拜讀して益德性涵養の必要欠く可らざることを覺知し、更に其感化の偉大なるを仰がずんばあらず。夫れ國師は伊深山中に在り十年の間聖胎を長養す。此時に於ける國師は實に一介の乞食坊主のみ。而かも此僧一躍して帝者の師となり、再躍して一宗の開祖となり、萬衆皆隨喜渴仰

して措く能はざる所以の者は何ぞや。妙心寺の今日は開祖を距ること已に五百五十年、而かも猶七堂伽藍輪奐として駢立し無比の偉觀を呈しつゝある所以の者は何ぞや、是れ職として國師の積功累德の餘光に依らずんばあらず。嗚呼德性涵養の一事、是誠に容易の業に非ずと雖も只佛威挽回の最上策たるを奈何にせん。

第二、學問を爲すに在り　余は深く佛教の致義を研究せる者には非らざれども、少くとも其致義の深奥にして幽玄微妙なる哲理を包含し、何地に持ち行くとも決して忸怩たることなかる可きを信す。然れども悲き哉其佛教は今尙ほ佶屈聱牙なる漢譯其儘にて存し邦譯せられたる分甚だ少し。是が爲めに折角千古不磨の大典にてありながら空しく筐底に蠹魚の腹を肥やすのみ。豈に浩歎せざる可けんや。去れば之を邦文にし英文にし獨文にし其他又種々現行の各國語に譯し、如何なる階級の人間にても容易く之を讀み得る如き者とするは實に今日の急務にして、而かも是れ只だ我日本人にのみ可能なる事業なりと云ふに憚らず。且又佛典に現はれたる各種の哲理を只だそれのみとして研究せる學術は今日とても尙ほ或は存在せん。只之を以て詳に泰西の學術に比し世界の宗教と較するが如きに至つては、則ち亦た大に今後の碩學に須たずんばあらず。現今歐人にして已に指を佛教の研究に染めんとせる者固より少からず、只だ如何せん此等の學者は筆力遂に耶蘇宗の範圍を超ゆること能はず、爲めに佛教の享くる利益は却つて其害を償はざるの狀態なり。是故に邦人にして若し能く如上の論點に著目し、先つ佛德を主眼とし逆まに之を西歐諸國の宗教に及ぼすことあらば是亦た現下佛教振興に對する一良策たるを得べし。願ふに此事業たるや無限の內容あるが爲めに決して一個半個乃至は一代二代の中に望まるべきには非ず。力を集め時を積み勤勉努力して後始めて其目的を達することある可き筈なり。乃ち此點に向ふて佛教徒の奮起せんことも大に望ましき次第である。

第三、開祖の忠實なる兒孫となるに在り　夫れ孰れの宗旨にても必ず其宗に固有なる宗風あらん。佛徒若し嚴重に此等の宗風を維持し一歩も開祖の遺訓を超へざる底の決心あらば、以て宗風を改良向上することとなしとするも、

猶は以て之を傷害汚辱することなかるべし。若し能く此の如くならば宗風地に墜ちんとすと曰ふとも豈に能く然かることを得んや。魚肆酒行のみはすれども胸間に一點の至誠だも持する能はざるが如きは實に是宗門の逆賊にして世尊は之を獅子身中の虫なりと叱し曰ひき。

伊是の三策何れも皆な行ひ易からず。然れども若し勇猛の佛徒にして一たび弘誓願を振り起し驀直に向上することあらば、三策固より復た一として行はれざる者あることなし。行はれて而かも佛教の興隆せざること亦斷じてあるべからず。之をして推行せしむる者は實に只だ願の一事に繫れり。東坡嘗て曰く字を識るは憂苦の始めなりと。余謂ふ願あるも亦た然りと。之を海上に難破せる者に譬ふ。纔に一片の浮木を捉へて千波萬波と戰ふ。其の之を放つまじとするや、苦は則ち苦なりと雖も、或は遂に以て生を全ふするに足らん。其の苦に耐へずして之を放つが如きは固より一時の快にして身は忽ち海底の藻屑とならん。乃ち知る人間の操行只一の願あつて成ることを。願なる哉。願なる哉。

第九　思ひ出るまゝ

○滄然老居士、頃者書を浪華より飛ばし、予に一文を草せんことを命せらる。時に予新に歐洲より歸る、職務鞅掌稿を整へ想を練る能はず。命を辭せんと欲す。然れども居士老猶其寓居を告げず。問はんと欲するも童子なし。予をして此山中に在らん、雲深くして處を知らざるの歎あらしむ。謝絶するに由なし。乃ち隨感隨錄、僅に文を成し以て一時の責を塞ぐと云ふ。

○貝原益軒の養生訓に曰く酒は天の美祿なり。少飮めば陽氣を助け、血氣を和げ、食氣を廻らし、愁を去り、興を發して甚人に益あり。多く飮めば又能く人を害する事、酒に過たる物なし。水火の人を助け又能く人に災あるが如し。邵堯夫の詩に美酒飮教微醉後といへるは、酒を飮の妙を得たりと時珍云へり。少飮み醉へるは、酒の禍なく酒中の趣を得て樂多し。人の病酒に依つて得るもの多し。酒を多く飮んで、飯を少く食ふ人は命短し。此の如く多く飮むは、天の美祿を以て却て身を滅すなり。悲むべしと。

○只予は酒を嗜ます、病を得るの恐なしと雖も、所謂天の美祿にも亦得過はす。是とても豈に遺憾の極みならずとせずや。

○大凡酒好むほどの人の量を限ぎるは六ケ敷事と見ゆ。強て限らずとも濟むほどの人ならば、酒害などゝは思ひも寄らじ。萬葉集に

なか〳〵に人とあらずは酒壺に
なりにてしかも酒にしみなん

是迄來れば玄に入る、鬼神も三舍を避くるとや曰はん。

○何處も同じ酒中の仙、獨乙の吞み黨にはコンナ面白い御托がある。

Ob ich morgen leben werde
Dass weiss ich freilich nicht.
Wenn ich aber noch lebe,
Dass ich trinken werde
Dass ist ganfgewiss.

これを和歌にと思ふたが中々六ケ敷い。

○愉快は愉快だが、後腹の痛むはチト閉口サと云ふのをヰルヘルム＝ブッシュが

Ach, Reines Ylück geniesst doch nie.
Wer zahlen sou und weiss nicht wie.

とやつて居る。何處となく可笑味がある樣だ。

○夫れから又た

Was die Kunst für die Seele
Ist das Bier für die Kehle.

などゝ壁に題して濟まし込める酒家を見た事があつたが、是は譯して

酒無くて何んの巳が櫻かな

ではドウ乎知ら。

○如何にも酒は樂しきと見ゆ、只だ東坡の僧謂酒爲般若湯、謂魚爲水梭花、鷄爲鑚籬菜。竟無所益、但欺而已。世常笑之。人有爲不義而文之以美名者。與此何異哉。と云ふに至つては俗氣の頗る厭ふ可きを覺ゆ。だから

酒の話は是れで止める。

○借て嘗て朱の晁冲之曉行の詩に老去功名意轉疎。獨騎瘦馬取長途。孤村到曉猶燈火。知有人家夜讀書。とあるを見き。予も亦た頗る宵張りの癖あり。特に最近十年を以て最も甚しとせり。知らず何人か馬を我が門外に立て、冲之の如き詩を賦せし事ありや。見ぬ戀と云ふこともあれば逍つて見たいと云つても餘り笑しい事も無からう。但し主人は徹夜で何をして居ると云ふの乎。イャ其れは馬鹿らしい、何時でも此文にある樣な閑葛藤を書いたり、考へたり。

第十　關山國師

埃及のピラミッドは、話に聞かぬ人も有るまじ。左れど見ると聞くとは、又格別の者なりかし、予が見しは三四年前のことなるが、長き月日を閲して風雨寒暑の變に逍ひ、外部は痛く腐蝕されたる樣なれど、其尖端は今尙ほ依然として舊態を保ち、切目正しき大理石より成れり、想ふに落成當時のピラミッドは、削り立たる三角錐の如く、記帳面なる者なりしならん。今日外部の腐蝕されしは、石てふ者の性質、左も有るべき事なれば、固り曰ふに足らず。上下六七千年の間、大體に於て、鵜の毛斗の歪だになく、巍然として今尙ほ高く雲表に聳へたる、其狀唯驚嘆する外はあらじ。

斯かる建築等に用ひたる勞力費用は計算するだも難からん。有りと有らゆる人間の根氣を盡して、仕上げし者なれば其堅牢誠に天地の悠久にも譬へつ可し。經濟思想の著しく發達せる今の社會は、僅かの資本に、有らん限の利益を收めんとなれば、建物の性質も、亦自づと變化し去るべきは、是理の當

埃及國ピラミットの圖

然にこそ。一の橋を架けんといふにも、先づ其上を通行すべき人數より、車馬荷物の重なるを大略に見積りつゝ、それ相應の强味を有する者に仕組む。然れば敢て仕事の手扳かりと曰ふには非らで、計算以外の目方に掛らは、橋の安固は請合れぬ次第ならずや。豫定以上の人馬も通り、思設けぬ洪水に遇はゞ、橋は忽ち壞れつべし。斯かる類の建物は、唯用を充たす斗の者なれば、ピラミッドとは、本來の性質を異にせること云ふまでもなし。

師道の張弛に關して、古今の異を說く者あり。左れど尙ほ其理を明にせるは稀なり。顧ふに今日の師道も、亦經濟思想の渦巾に落ちて、橋普請同様計算的の者となれり。古より師として僅に一日の長ありといふことあれど、誠は一日の長よりも、二日の長にあらん。二口の長よりも、三日の長こそ望ましけれ。左れど若し、事實一日の長だにあらば、師になれぬ道理なし。僅かの勞力に、多くの報を得てんてふ理想ならば。其一日の長もて師たるに、などか躊躇せんや。唯笑ふべきは、自ら一日の長あり思へる間に、世は逸早く進步して、一日の處が半日となり、半日の處が追越されつる仕誼ともなり、果ては師道の立難き始末とはなるなれ。其趣彼の橋普請に似たらずや。古人の行は之に異なり。一日二日と目に見ゆる斗の相違にて、人の師たらんことを嗚呼がましく、根を限りに勉め勵み。それにても尙慊たらず。世を避け人を謝して、山中に隱れ。百錬千鍛。功成つて德は金剛の如く。天地に輝く計なり。是やがて彼の埃及のピラミッドにも、比ふべき者にあらずや。

關山國師の家風は何れの種類に屬すべきか。問ふまでもなく。日本のピラミッド。

僕昔時南谿の東西遊記を讀む。偶無道和尚の囑あり此文を草す。草し了つて自ら行文の頗る南谿に類する有るを笑ふ。

物庵附記

第十一 臨濟慧照禪師

自分が始めて提唱を聽いたのは、今から約十四五年前、熊本に於てゞある。其日の講坐が丁度碧巖錄上坐佇立の一章に當つて居た。斷際の全機後蹤あり、峻嶮なる法壘は固より一朝にして奪却すべきにはあらず。只だ恐ろしとのみ感じて引き退かつた次第であつた。饒舌老婆、水火の中に出來上つた臨濟が正宗の名劍同樣、切れ味の好かつたことは當然である。然るに其語錄を拜誦するに、所謂垂示底には却て主を論じ、賊を論じ、是を論じ、非を論じ、色を論じ、財を論じ、論說閑話して口も亦足らざるの趣あるは何故であらう。是か必竟臨濟錄なればこそ、誰しも默して批判も爲ないのであるが、チト煩冗ではあるまいか。

是は勿論煩冗なので。併し其煩冗を知りつゝ熱心に說かるる處が、臨濟和尙の手腕である。

今から三百五六十年も前に佛國巴里大學出の秀才に、サン、フランソア、

クシャヴイエといふ宣教師があつた。丁度信長時代に當る人で、此が日本に來て、ジエシユイトの宗旨を擴めんとしたのであるが。當時日本の佛教界は尙ほ中々の盛大で、學僧は皆五山や延暦から出づる。何方らへ向いても鐵中の錚々たる者ばかりで、流石のサン、フランソア、クシャヴイエも手を出すに處なく。何分日本の文明は總て其根本を支那に持つて居る、日本に佛道せんとする者は、須く先づ支那に入り、其文化文明を會得して、然る後徐に其術を施すべき者であるとして。遂に去つて支那に向ふた。是他なし。彼は糧に敵に依らんとせる者である。

近くは鎌倉の洪川和尙が禪海一瀾を著はされ、儒者の道を云々せられた。いらぬ事の樣だが、此が爲めに儒者の固陋を破つた事は著しい者であらう。但し洪川和尙は本來が儒者で、自ら其足らざる處に氣が付いて轉宗せられ、それから其研究の披瀝か禪海一瀾となつた者で、決して他を說得するが目的では無かつたのであらう。此點は却て臨濟錄に近い。

臨濟は素と學僧である。一介の見識を挾んで黃檗山頭に纔ち、他の會下に參じつゝ未だ曾て一個の疑義すらも起さゞりき。而かも三十の痛棒は甚しく彼の鼻柱を挫き、到底敵し難きを見て取つて、一生懸命に修行を遣り直して、出來上つた彼は固より鬼に金棒である。

一部の臨濟錄は彼の爲めの述懷と見ることが出來る。其垂示に於ける片言隻句も皆其淵源を經典に取り、一々之に批判を附して居られる。一朝十年の非を覺つて、血の淚で錬り上げられた見識を吐盡してある。此處が禪海一瀾と性質を一にして居る處である。併し之を布敎底から考へて見れば、又正にサン、フランソア、クシャヴイエが支那に遊んで其文物を研究したと同じ趣がある。只サン、フランソア、クシャヴイエは不幸其志を遂げず、再渡の日なかりしも、臨濟は能く曾修の敎學を縱橫に發揮して本來無一物向上の大宗旨を說破するに盡力せられた。之を敎法家が見て、脾胃肝膽說法聽法を解せず、是什麼者が之を能くするといふに至つて、ギクと詰まるといふ譯であらう。

然も是れ只布敎底のみ、然らざるも亦た只一部の述懷錄たるに過ぎず。臨

濟の臨濟たる所以は、的確に此書の中には無い。ソレなら燒いて仕舞ふかと云ふ氣の早い連中も居るだらうが、それは餘計な御世話である。

今や日本は昔日の日本にあらず。借問す誰か能く即今の日本を研究し、一字一涙細かに辛勤の面影を寫し出す者ぞ。更に或は糧を敵に取り、哲學と言はず、科學と言はず、法律といはず、經濟といはずして、轉轆々地に說法得する好漢あつて、出で來らざるや。

若し臨濟をして書くことは則ち書くに任す、說くこともまた說くに任かす、可惜許と謂はしむるとも、我は關せじ。

第十二 參禪錄の批評に就て（野々村學士に謝す）

益友野々村君、頃者、特に貴重なる時間を割愛し、鄙著『參禪錄』に對して、其感想を披瀝せらる。一大長篇、載せて「新佛教」誌上に在り。推奬甚だ過ぐ。僕敢て當らず。然れども、其の思索未だ熟せず、筆路艱澁を極むる者あるを指示せらるゝに至つては、僕深く君が精到の眼識に服し、切磋の益、頗る大なるを感謝せずんばあらず。

參禪の事たる、實參實究に貴ぶや固より論なきのみ。此が系統的說明に至つて、古來絕えて無くして今僅に之有る者、豈に故なしとせんや。泛々たる鄙著、固より言ふに足らず、然かも亦聊か這裏に貢献せんことを期す。只其抱負分に過ぎ、缺點必ず多々にして、偏に具眼者の有益なる示敎に俟ち、始めて能く大成すべき者なるは、僕の他まで知悉する處なり。君の卓說を拜誦し、啓發する處實に尠からず。玆に鄙見の二三を錄し、謹で請益す。敢て抗辯するにあらず。

兒童亦能く、其學得底を誇示するを解す。然るを況んや大人に於てをや。只夫れ、禪は則ち然らず。六十の棒頭始めて正眼を開き、十年の辛勤、僅に大事を畢了するに及んで、馬鹿は猶ほ依然として馬鹿なりと稱す。君は輙ち以て禪の無能を反證せんとする乎、而かも無所得無一物は禪の本旨たり、馬鹿を馬鹿として毫も慍ます。一絲加へす一毛立せざる處、豈に多少の奇特なからんや。

君又難して曰く、一段論法は華山の陽にして、三段論法は是桃林の野のみ、相交渉する處なし、何ぞ彼を以て根本に擬し此を末梢とするの理あらんやと。好哉問。正に是禪門の第一義に觸著す。試に語を換へて問はん歟。

（一）有は無に非す。無は有に非す。何ぞ有を以て無となすの理あらんや。否歟。

（二）無差別は差別に非す。差別は無差別に非す。斷じて相混同す可からす。

（三）正覺は六塵に非す。六塵は正覺と別なり。六塵惡まざるも曷若ぞ夫れ正覺に同しきを得んや。

其他倘ほ多々あるべし、渾て皆同一問に屬す。願ふに論すること此の如く詳に、兩頭並立して互に相下らざる處、是實に三段論法となす。若夫れ合して一段となり、放れて三段となる。集散離合、良將の兵を行ゐに相似て自在なる處、是即ち禪の本領にして、専ら悟入を要し、乃ち不可説の事たり。僕鄙著に於て、具さに之を論せり。君鄙著を讀むこと熟し、却て本問題を提起して之に向はんと擬す。事稍奇なるに似たりと雖も、然かも君をして疑著能く此の田地に至らしめし者は、即ち鄙著に外ならざるを思ひ、僕は則ち以て多少の成効ありと爲し、喜んで君の所説を迎んと欲す。

君更に曰く、兩智本來交渉沒し、修禪何の益する處ぞ。見すや馬鹿は則ち依然として馬鹿なることをと。今一人あり。波は波なり水は水なり相關せすと謂はん。又一人あり、波は水なり而して水に波ありとせん。波を以て水とすれば、一波の求む可きなし。而かも倘ほ其波あるに妨けす。知る可し自在は却て後者に在つて存することを。僕誠に禪に志す、而して化學の研鑽に於て過誤日夜相躡ぐ。君或は以て笑ふ可しと爲さん。只夫れ水を以て之を觀す

るに、曾て一失なし。水波並び起るに及んで、始めて敗闕を納る。樂地に苦痛あり。苦中に眞樂臻る。到頭僕に於て百愛之無きは何ぞや。

念佛と禪に至つては、僕未だ曾て其優劣を斷せざりき。聞說く、曾て幼童あり、父に陪して天滿宮に詣す。社門に立ちて問ふて曰く、孰れか是れ矢大臣にして孰れが左大臣なると。其父答へて曰く、我兒須く記すべし、矢大臣ならざる者是れ左大臣、左大臣ならざる者矢大臣と。僕亦た聊か傖父に私淑する所あり他の一笑に須つ。唯夫れ、君が說く處の如くんば、即ち是れ念佛禪一致論なり僕豈に敢て拒まんや。

明鏡高く懸り自家を反照す。僕をして其罪過を審にし、陳謝する所以を知らしめし者は、偏に眞摯なる君の友情に係る。感佩何ぞ止まん、敢て蕪詞を寄す。禿筆意を盡さず。請ふ恕せよ。

『參禪錄』を讀む

野々村梅所君

著者近重理學博士は京都南禪寺の毒湛老師に參して多年險難の工夫を凝らされたる知名の居士である。先年『禪學論』なる一書を公にせられた時。小冊子と雖確か

に當時の宗教界に一異彩を放つの好著として世の反響を期待したるに、思想界の幼稚なる、隨分禪學とか悟道とかいふ聲は聞ゆる現代でありながら、怪げな禪學書などは却て雜誌屋の店頭を賑すにも拘らず、終に相當の注意を惹かずして止んだことは、私かに以て遺憾とするところであつた。然るに先般京都帝國大學に於ては、學生修養の爲に有益なる講演を聞かさうといふ事になつて、著者は爲に數回の禪學談を試みられしが、其講演は今度又一冊子となつて讀書界に現はるゝの喜びに接した。「參禪錄」は即ちそれである。

批評に入るに先だちて本書に二つの特色のあることを一言する。一には此書は著者多年の實證工夫の餘に成れるものであつて、哲學史などを生嚙りにした著作家などが、自分免許の宇宙論や本體論から都合よく割出した議論では無いといふことである。素より多數禪書の中には徹底せる修養の上より書かれた者が無いではなかろう。然しながら時には之でも多少其道に苦勞したものゝ作かと怪まるゝ新著もある。如何に讀書界が幼稚であるとは云へ、此の如きことを本書の特色の一に數へねばならぬといふは情けない話である。次には、本書の著者は理學專攻の學者として科學の造詣深く、從つて隨分緻密明晰なる頭腦で斯道を點檢せられたと信ずることである。禪學などゝ云ものは、常識にては容易に其面目を捕捉し

難きものある處より。稍もすれば空漠なる議論が行はれて人生の實生活に沒交渉となり易い、傾向がある、禪宗門内の靑年ですら。偶西洋哲學史の一通りでも檢べた者は。直ぐ實在だの本體のと云つて。肝心な工夫は棚に上げて仕舞ふ樣な例もありと聞く。かゝる殺風景極まる現代に「參禪錄」の如きものゝ現はれたといふことは確かに空谷の跫音と云つてよい。さて本書は前後六章を以て成り。頗る組織的に出來て居る。が今其内容に就て之を分つ時は二つの部分として見ることが出來る。一は著者が禪に於ける實驗の記述であつて。二はその解釋である。與へられたる事實と。其解釋とは。決して混同すべきものではない。余は最初一々の章を逐ふて所感をつらぬる積りであつたが。今は到底其餘裕なきが故に。姑く此二部分を區別して概括的に愚見を述べようと思ふのである。

禪の境涯が。若しも雲水の生活をしたり所謂公案といふものを工夫したりしなければ手に入らぬ者とすれば。坐禪入室せぬ者はすべて門外漢であるに相違ない。樂より著者の云はるゝ如く。「職務上幾度か命懸けの境界に出入するを余儀なくせられた僕等は。知らず識らずの間に禪機を會得して自然に達人の風格が備はる樣な事もある。夫故にかゝる場合には少しも強て禪を學ばねばならぬことは無い」であろう。然しながら。四海波靜かなる太平の御代に十年一日の如く書生と書物と

を相手にして暮らす余輩に在りては。到底死生の境に出入する樣な芽出度い經驗しなく。去りとて別に入室參禪といふ樣な奥床しい消息は夢にも知らぬとして見れば。實證味道の余に成れる此一冊子を批評せんなどは。實は全く分限を忘れた嗚呼の沙汰として遠慮せねばならぬ。そこで余は右に二つに分けたる前の部分に對しては。宗教學者に向つて興味と實益とある研究資料を供給するものとして感謝するに止めて置く。只茲に數言の已むべからざるものあるは。著者が與へられたる内證告白の價値といふ事である。これ向上の一路は無邊際にして前途窮極するところなし。著者は第六章の結語の中に。「更に已事に於て未だ門墻だも窺はず」と謙遜して居らるゝが。此一語は或は徒に一片の謙辭として見るべきものでなく。恐らく正に著者の實感であろう。然しながら。それにも拘はらず著者が此披露を敢てしたる所以のものは。一は「古人が專ら當時の人情風俗に鑑みて立案せられた說話を其儘そつくり持て來て直に之を今日の人間に讀み聞かせた處で更に角膜に入り難き者あるは固より免れざる所である」が故に。「古人の言句を直に假用せずして必ず先づ之を今日の通語に直して」示すの必要を感じたるに出でし譯であつて。此點に於て讀者は最も重きを置かねばならぬと思ふ。元來禪宗の主旨は不立文字とさへいふ位だから。況して俗世界に沒交渉なる難解の文字を弄てし得意とすべ

き筈がない。明眼の知識は決して此の如き窮窟に陷らぬのである。白隱の如きは東海道馬士唄一つでゝも見事に用を辨じたものだ。禪宗が一切の哲學的若くは神學的用語を斥け。好んで詩歌に寄せて消息を擧示する所以は。所謂詩言志歌永言であつて。詩や歌など人情の天眞を流露せしむるものはない。即ち子守も歌へば馬士も唄ふ。此る俗言を取つて一宗の用語とする所に。傳燈列祖の用意もこもつて居ると云はねばならぬのである。然るに今日の禪徒は果して如何。不立文字を標榜しながら。其實難解の死文字を使つて。八宗九宗に劣らぬ文字宗となり澄まして居る。均しく文字宗となり澄ますなら。却て平生不立文字などゝ云ふだけそれ丈け文字が多いと云つてよい。余は此點に於ける著者の用意（成功の如何は姑く別問題として）を深謝せねばならぬのである。加ふるに著者は處々に味深き譬喩を自在に使用せられてあるがその之を用るや。實に譬喩以上の力がある。（當然の話ではあるが多くの人がそうばゆかぬ）修養と親切とに出るに非んば此自在は手に入るまいと思ふ。殊に其境涯を開示せらるゝの一段に至つては。その態度分明且つ大膽にして。大に後進を啓發するに足るものがある第一章に「禪とは何ぞや」と題して世人の惑を正して云く。

宇宙を達觀すると云ふから定めし深い者であろうと想ふ人もあらうが。其實

決して左様ではない。元と〳〵無自覺を自覺に返へして使ふ其間に御悟りがあるのだから。現在世間で分らぬ事は悟つても矢張り分らぬ馬鹿なら不相變馬鹿に相違ない。

何といふ親切の一言であらう。定まりきつた事ではあるが。御悟りの切賣りを商賣にする人々には到底ごういふブチ明けた告白は望み難いにも拘はらず。實際世上參禪に志す靑年達の間には。何か一つ是迄分らなかつた事柄が分かつてそれ丈け物知りになることの樣に思へる者は決して少なくない。道元禪師が。空手にして鄕に還る。所以に一毫も佛法なし。任運に且く時を延ぶ。朝々日は東より出で。夜々月は西に沈む」と云はれしは。所謂「馬鹿なら不相變馬鹿に相違ない」の境涯にして。こけても只では起きぬといふ當世の才人では中々空手にして故鄕に還らるゝ筈がない。膽力を養はんが爲に坐禪をしたり。神經質を苦にして入室したり。少しでも物識りになられる積りで參學したりする人々も。能く著者の此數句を味ひ得て。早々に工夫を怠らざれば。必ずや意外の處より宗門向上の一大事を透過し。求道の要は求めざるに在るの消息に通ずることが出來るであらう。

などゝ云はば。いつしか著者の尻馬に乘つた樣で面白くない。著者が親切を込められし內證の披瀝はどこまでも芽出度〳〵と納めて置て。さて與へられたる內

證的事實の解釋に至つては。余は頗る同意し兼る點が無いでもない。其一は禪と學問との關係如何といふ問題に就てである。著者は右にも述べたる如く。『馬鹿は不相變馬鹿に相違ない』とまで明言せられてありながら。第四章に於ては禪を以て一種の認識法又は推理法となし。科學的知識は相對的にして所謂三段論法に依るものなるが故に。學究惡智惡覺にして到底確然不動の眞理を手に入れることは出來れと斷じ。此大眞理に逢するには。是非共一段論法とも稱すべき推理法に依らればならぬと結んである。借問す。科學上の經驗的知識が與ふる相對的眞理と禪の確然不動の眞理とは一方は不完全にして一方は完全なりとして區別するかそれとも完全不完全を以て區別すべきに非ずして全く面目を異にするものとするか。約言せば。程度の差さするか。若くは本質の差とするか。若し後者を取りて本質の差とせば。二者は元來人文上その受持を異にするものにして。甲が乙の代理を爲なさず。乙が甲の名代ともならず。分業の約束なるが故に決して互に惡智惡覺など喝へ罵り合ふべき筈の者ではない。馬は華山の陽に歸し。牛は桃林の野に放ち。牛馬各自趣くべき處に趣けばそれで事足る譯である。牛が千里を馳せずとし惡牛と貶する必要もなく。馬が牛乳を與へずとて惡馬と斥くる理由もない。相對的眞理と禪理とは互に事由と援林との關係の如くにして。何れの一方も決して他の一方

の根本でも基礎でもなく。互に相俟ち相資けて人文に貢獻するの善友となるのである。然るに著者は三段論法は一段論法の組み合せであるといふ見地よりして。

此の如き見地から推せば。一段論法を用ゆる禪的智識は基礎であつて。吾人の日常底は其應用に屬するものである。然るに吾人は基礎を忘れて只其應用に齷齪たる觀あるは何故であらう。古來禪學者が禪的智識を稱して根本智となし。日常底の者を稱して後得智となして居るのは。能く此間の消息を道破し得たる者なりと謂つて然るべきである。

と論じてある所より見れば。禪の眞理と科學的眞理とは恰も本と末との關係を爲し。前者は確然不動にして完全とし。後者は動搖不定にして不完全とするものゝ如くである。果して然らば。著者が後者を取らずして前者を取り。本質上の差とせずして完全不完全といふ程度の差とする次第となるが禪と科學とは決して完全不完全の差ではあるまいと思ふ。科學が如何程發達すればとて。思慮分別を以て本領とする以上は。決して一歩も禪に近づく筈のものではなく。禪の苦勞人がいかに聖胎長養を怠らざればとて。決して之が爲に科學的智識を獲得する譯のものではない。所謂「馬鹿は不相變馬鹿である。」科學的智識が根本となつて禪的智識が得られぬと同じ樣に。禪的智識を基礎として科學的智識の得らるゝ筈はない。歷史あつ

てよりこのかた禪的智識を基礎として開けた科學と云ふものゝ有ることも聞かず。禪的智識を基礎とした爲に發達した科學といふものゝあることをも聞かぬ。既に事實に於て根本とも基礎とも成つて居ない以上は。禪的智識が日常底の根本基礎であるといふの議論は恐らく立つまいと思ふのである。縱令過去の科學に禪的智識を根本とせざりしもの故致方なしとして姑く置き。將來の科學中に禪的智識を根本とするものが假に出來たとしても。(換言すれば著者の說の如く一旦平等に入りそれより更に差別に出で來つて科學を研究するとしても)其科學的智識のみは果して確然不動の絕對的眞理に叶ふであろうか。此の如き智識と雖。苟も其が科學的智識である以上は。何處迄も經驗的智識。相對的智識たるに止まるの外はあるまい。手近く云はば。著者か專攻せらるゝ化學上の法則は。縱令著者が無から再び有に出で來つて研究せらるゝにしても。科學的智識としては矢張り相對的當然的智識に止まりはすまいかと云ふのである。此時著者と雖。禪を根本とし基礎とすれば科學的智識の動搖を食い止め得るとは自認せられまい。そして見れば禪と科學的智識とは元來面目を二つにする別種の者である。若し同じ科學的智識の中に於て。甲の智識は比較的に確然不動。乙の智識は動搖不定と云ふならば。此時初めて甲は乙よりも完全にして乙は甲よりも不完全なりと云ひ得るが。科學と全

く任務も方針も相異れる禪を取り來りて科學的智識に對比し。前者は完全にして後者は不完全なりと斷せんには。其標準は果して何れに在りや。元來優劣を以て論ずべき限りにあらざるものを強て優劣を以て論ぜんとするが故に。終に一方を惡智惡覺と名けて斥くるの已むなきに至るのである。且それ今一歩を進めて論ずれは。禪は有無の相即を談じ。色と空との不二を說くことは。著者の懇ろに示さるゝ通りであるか。科學の上では有は決して無に非ず色は決して空に非ず。若し強て科學的智識の根本として二邊相即を立る時は。科學は之を根本より否定するとなる。二邊相即は獨り科學に根本を與へぬのみか。正にその否定である。已に科學の根本的否定たるべき二邊の相即か。絕對的智識として相對的智識の根本を成し。後者は前者の應用であるといふの義は。如何にして成立つであろうか悟境に入れは分かると云つて仕舞へば話は素よりそれきりである。二邊相即の絕對智こそ悟境の上の活消息として敢て說明は求めないが。その絕對智を根本としたものが世間の科學的相對であるとの議論に至りては。大に說明を要する次第である。著者は科學的智識の缺點として三條目を數へ。一には動搖不定。二には懷疑に陷り易く。三には槪念の用をなさずと云つて居らるゝが。さりとて禪の一段論法なるものは。此る缺點(姑く君の云はるゝ如く缺點として)ある科學を改良して缺點

なき科學とするの動力があるでもなく。科學の仕事は何處までも所謂鉄踏ある科學に任せて置て。科學で辨じかぬるお門違ひの用事丈けを引受くるのみとするならば。それでは一段論法の禪が三段論法の科學の根本でも基礎でもなく。科學の任務を果す上より云ふ時は。禪は有つても無くても何等の影響も受けぬものとなる。珍な根本。變な基礎ではないか。

其二は。著者の禪と念佛との優劣論であるが。徒らに長文になるを恐れて爰には簡單に批評する。著者の議論に從へば。禪の長所の一と云ふべきは何等の本尊もないと云ふ一事であつて。何處迄も自力で勇猛に進り拔く處にあるのであるが。他力念佛の敎に在りてはなまじいに本尊などを立てゝ救ひを求むるが故に。自家の骨折りに實力が充實せず。さりとて絕對的に本尊に縋かるといふことの出來よう筈なく。所詮徹底なくして終るの外はないとの主旨である。然しながら。他力敎徒に努力の足らぬといふ事は。彼等の爲の警語としては余も双手を擧げて歡迎するが。優劣を判別するの言葉としては恐らく事實に適中すまいと思ふ。白隱の所謂頭禿ろに齒疎らなるが殊勝氣に打ち泣き〱念佛するものを悉く他力敎徒と目すれば或は著者の議論も立たぬともなかろうが。眞劍に他力の門に入らんとする者の勇猛と苦心とは。決して公案工夫の場合と變つたものではない。著者が貶する他力敎の經典には。三千大千世界に充滿する猛火の中を勇猛に過ぎ行きて他力を聞き開けよと戒めてある。他力の文字に拘泥して他力を貶するは。隻手の文字を笑てそんな聲があるものかと無造作に斥くると同樣ではあるまいか。何等の本尊もないぞと云ふことが正に歷とした一の本尊となつて。其本尊のお救ひを賴む禪徒もありとして見れば。何等の偶像もないぞといふことが恰も立派な偶像となれる耶蘇敎と相對して。禪宗とても一の他力敎となるの恐れがないとは受合は出來ぬ。そも〱禪と念佛とは其外觀に於ては現代流行の二大宗旨として並立せるか。いづれも其弊害を咎め合へば際限はない。禪徒は自分の宗旨に本尊がないぞと云つて本尊を餘所に片附けて仕舞ひ。自分が獨り須彌壇の上に登つて豪さうに澄ましこんで居る。念佛者は一生懸命に(實は欠伸半分で)本尊を圓の中心として壇上に祭りこみ自分は常に繼子根性といふ一定の距離を半徑として難有さうにその周圍を行道して居る。百年千年めぐりめぐつても一步も中心の本尊に近づくの見込はない。若しそれ煩悶痛心の極。夜叉の如く狂ふて壇上の本尊と組み打ちを初める程の無鐵砲あらば彼は忽ち回心懺悔して再び壇下の人となり。五體投地して長しへに大悲の光明を仰ぐであろう。此人に取つての本尊なるものは決して著者か輕々しく一笑に付し去らるゝ樣な禪のものではないのである。

以上叙し來つて回顧すれば。著者と著書とに對し敬意を表せんとして。却て蕪辭往々禮を失せるの點が少なくない。決して評者の本意にあらず。一に著者の寛容を乞ふ次第である。鐘は上野か淺草か。いづれにしても著者が自得せられし鐘聲裡の消息は。他人の容喙し得らるべきものでなく。又素より妄に容喙した譯でもない。只上野か淺草かの解釋に至りては。不幸にして著者と所見を異にするものあるを一言せしに止まるのみ。實践證悟の上より云はゝ。そのいづれと解するも別に左のみの影響はあるまい。只恐るゝ所は。上野淺草の議論に花が咲いて。却つて鐘聲耳に入らざるの一件である。

讀參禪錄

大道雷淵君

參禪錄は科學者なる近重博士の新著なり、吾人は茲に此の書を紹介して世上に推薦す、吾人は禪學に對して門外漢たると同時に科學に對しても門外漢なり、不可言不可說なる禪學に對して、禪學門外なる科學(或は哲學或は通俗)の言說を試みたる本書を紹介するに、禪學及科學の門外漢なる吾人自ら當る、亦可ならずや、指は月にあらざるも以て月を指すべし、若し指頭を誤りて月となすものあるも、是指の罪にあらず、

博士は現今に於て禪を說くに二大要目あるを說破して曰く、一に古人の言句を用ひずして今日の通話に從ふべく、二に學術進歩して系統的說明の行はるゝ今日又系統的說明に從ふべく、禪の本領の不可言、不可說は其の不可言、不可說なる所以を說くべきなりと、此の二大要目は實に現代人の禪學解說に對する痛切なる要求を示したるものにして、世人は夙に意識的に若くは無意識的に此の要求に對應するものなきを遺憾としたるなり、

禪學者と世人殊に世俗の學者と禪を語るや、猶聾同士の談話の如し、禪學者の所說に誤なきも、其の用語及說明方法の現代的ならざるが爲に、世人及學者の解する所とならず、學者は又學問的の說明を要求するも、禪學者は學問殊に科學に通ぜざるが爲に、其要求を容るゝ能はず、互に揣摩と臆測を交換してトンチンカンの問答となる、誠に聾同士の問答に似たり、禪の內容其の物を說破すべからずとするも、其の說破し得べき形式(或は輪廓)をも適當に說破せらるゝに至らざるは誠に遺憾にあらずや、蓋亦止むなきなり、何となれば今日の現狀に於て禪學に通ぜるものに科學若くは學問的智識を求むべからず、又學者に禪を解するものあらざればなり、本書の著者たる近重博士は科學者にして禪學を修めたるの士 誠に禪界と俗界との間に劃せられたる一大鴻溝に架せらるべき好個橋梁となるべきもの

なり、本書は實に現代の要求に對應する空前の著作なり、著者は本書に於て現代的通話を以て禪學を解するの努力に成功したり、吾人は敢て成功したりと思ふ、されど現代青年の多數の文字に乏しき、尙本書の如き老婆心切なる俗解に就ても難解の字句行文ありとなさんも測られず、然らんには亦止むなきのみ、通話的解說の外、本書は敢て學問的及系統的の說明を試みたり此の方面に於て又本書は空前の努力を致し而して幾何かの成功を收めたるもの丶如し、

本書の緒言には禪の略解、說明の方針及禪の誤解に對する辯疏を擧げ、第一章なる禪とは何ぞやに於て、縱跌橫說勉めて禪の輪廓を髣髴せしめたり、第二章公案に於て仔細は公案の目的及種類を說明し、第三章坐禪に於ては坐禪の方式、之に對する生理的狀態及理法を說明したり、一に足を組み、二に脊梁骨を直立し、三に手を重ね、四に下腹に力を入る、此等方式に就て一々生理的心理的安定狀態を保つ所以を叙說したり、而して坐禪の修道に對する所以の外、單に体格上究竟到著地として三種の特徴を擧げ、一に身体の抵抗力の增進、二に健康の助長、三に氣息調整を致え、此の第三の特徴に就て著者自身入定中、醫師の檢診により腹部に强大なる力あると、肺臟の運動甚しく遲緩にして、聽診器によりて其の音響を聞く能はざるを明らかにしたるを說きたるが如き、誠に興味少からざる生理的

實驗に屬す、著者は更に進みて禪定の冬蟄狀態なる假說を提供したり、是頗面白き假說なり、禪學其の物の研究としては枝葉に屬すべしとするも、科學的研究としては、生理學、醫化學其の他諸種科學に涉りて興味ある研究を進むる餘地の此の方面に多かるべきを思ふ、

第四章は禪觀の科學的批評なり、科學的とあるも、寧哲學的と曰はんを適切なりとせずや、何となれば本章は主として認識論上の立論に屬すればなり、而して通常の認識及推理を三段論法となし、禪を一段論法となす、是著者獨特の見地にして、比較誠に切實なるを覺ふ、著者は又三段智識の三缺點として、智識の動搖不定、懷疑の傾向及比較の餘裕なき場合に於ける無智識を擧げ、禪の一大長所として本來無一物の却りて未來永劫世態變遷の影響を受けざる破天荒の宗敎たる所以を喝破す、氣焰頗揚るものあり、學者或は學問的智識を貶するに過ぐるを憾むものあるべきも、本章の趣旨は從來學問的智識を過重したるを矯むるに急に、且主として禪的絕對智を揚ぐるに切ならんとするものを察すべきなり、本章は最大體上より禪觀を批評し得たるものなり、第五章に信心銘を擧げたる、恐らくは是著者の禪本領を髣髴せしめんとする老婆心なるべきか、

吾人は極めて大略本書の一般に就て紹介を經たり、尙最終第六章結語あり、中

に曰く、

私かに謂へらく禪は是れ東洋獨特の見地、今僅に本邦に於て其餘喘を保つ、若夫高く宗風を擧し盡て衆生を度する底は則ち世に其人なきに非ず、顧みて之が深遠なる哲理を闡發し能く眞俗二諦の交渉を明白ならしむるに至つては則ち或は鉄如す、此泛々たる小冊子固より能く之が遺漏を補ふ者に非ず、只幸に他の具眼の大家に撥することを得て一たび巨腕を本問題に試みられんことを庶幾するに過ぎざるのみ、

本書の着眼と態度とは以て明かに察し得べきなり、吾人は敢て世の俗人、學者及青年に本書を紹介す、

第十三　金儲けの譚（獨文）

Wie ich ein grosses Geschäft machte:

Erzählung des Generalarztes a. D.,

Baron Ishiguro.

Da Ich jetzt wieder zum Dienste einberufen bin, dürfte ich eigentlich meine Ansicht über den gegenwärtigen Krieg nicht so offen kund tun. Doch ich habe gerade ein schönes Thema gefunden, und bitte die Leser, mir einen Moment geduldig zuzuhören. Die Geschichte handelt davon, dass ich kürzlich zum ersten und einzigen Male in meinem Leben ein grosses Geschäft machte und den Verdienst unter eine arme Familie verteilte.

Vor 34 Jahren hatte ich für einen jungen Studenten, Kikuchi, zu sorgen. Er wohnte bei uns und meldete sich in einer medizinischen Schule an. Da er sehr fleissig war und ein treues Herz hatte, wurde er von meiner Frau und mir sehr geliebt. Einst reiste er in Sommer nach seiner Heimat um seine Eltern zu besuchen. Als er zu uns zurückkam, brachte er eine schöne Mappe alter Bilder mit, welche er von einem reichen Manne in der Heimat gekauft hatte, und sagte dabei zu meiner Frau:

"Gnädige Frau! Interessieren sich vielleicht für die Kunst, und gestatten mir wohl Ihnen diese Mappe zu überreichen."

Die Bilder waren von einem berühmten Künstler, Harunobu, und bestanden aus 12 Blättern. Sie stellten Damen in prachtvollen Kostümen dar, jeder Jahreszeit entsprechend. Uber dieses

Geschenk war meine Frau sehr erfreut und gab dem jungen Mann einen Taler, und das war etwas mehr, als Kikuchi dafür bezahlt hatte.

Nach einigen Jahren machte Kikuchi sein Staatsexamen und wurde Militärarzt. Er war sehr tüchtig und arbeitete in den Kriegen mit China oder in Japan selbst sehr energisch. Infolgedessen wurde er zum Oberstabsarzt befördert und würde es noch weiter gebracht haben, wenn er nicht plötzlich im Jahre 1899 gestorben wäre. Nach seinem Tode musste seine Witwe allein für ihre vier Söhne und eine Tochter sorgen. Dies war gar nicht so leicht für eine hilflose, alleinstehende Frau, wenn sie auch etwas geerbt hatte und eine kleine Pension bekam.

Zuerst dachte ich gar nicht mehr an die Mappe, die Kikuchi meiner Frau geschenkt hatte, bis ich im Juni 1905 amtlicher Geschäfte wegen nach Kanasawa reisen musste, Auf der Rückreise traf ich im Zuge Herrn Matsumoto, einen Grosskaufmann für Exportgeschäfte aus Kobe. Er erzählte mir dass alte japanische Bilder zu hohen Preisen in Amerika angekauft würden. Darauf fiel mir plötzlich Kikuchis Mappe ein. Sobald ich zu Hause war, fragte ich meine Frau, ob sie die Bilder immer noch in ihrem Besitz habe.

"Jawohl, lieber Mann!" antwortete sie. Die Bilder sind mir nicht nur wertvoll, weil sie ausgezeignet gut sind, sondern auch weil sie ein Andenken an Kikuchi sind. Deshalb habe ich sie auch immer sehr sorgfältig aufbewahrt."

"Schön," sagte ich. "Willst du mir nicht die Bilder für 100 Taler verkaufen?"

"Mir wird ganz weh ums Herz, wenn ich daran denke, dass ich dieses Andenken an Kikuchi weggeben soll," erwiderte meine Frau. "Doch ich habe seit dem Kriege mit Russland schon alles, was ich mir gespart hatte, dem Roten Kreuze, den armen Hinterbliebenen der Soldaten, und noch andern Unglück lichen geschenkt. Wenn ich also mit der Mappe noch 100 Taler verdienen kann, so ist es mir auch eine grosse Freude, dass ich damit wiederum etwas gutes tun kann."

Darauf bezahlte ich ihr 100 Taler und erhielt die Bilder.

Als ich nun im Juli desselben Jahres wieder nach Kobe reisen musste, nahm ich die Bilder mit und zeigte sie Herrn Matsumoto. Er lobte sie sehr. und bezahlte mir sofort 700 Taler dafür.

Gleich nach meiner Rückkehr nach Tokyo lud ich Frau Kikuchi ein, zu mir zu kommen, und nachdem ich ihr alles erzählt hatte, sagte ich zu ihr:

"Ich habe dieses Geschäft nicht für mich selbst gemacht, und werde also nur 100 Taler davon als den Preis behalten, den ich selbst für die Bilder bezahlt habe. Den Rest werde ich dann unter Sie und ihre fünf Kinder verteilen, was 100 Taler für jeden von ihnen bringen würde. Doch wünsche ich, dass Sie das Geld nur zu folgenden Zwecken benutzen dürfen.

I. Wenn Sie persönlich einmal schwer erkrankt sein sollten;

II. Wenn der erste, dritte und vierte Sohn Leutnant werden sollte und sich eine Uniform kaufen muss;

III. Wenn der zweite Sohn sich ein Geschäft gründen will;

IV, Wenn die Tochter sich verheiraten sollte."

Als die Witwe diese Worte hörte, weinte sie vor Freude und dankte mir tausend mal für diese Wohltat.

Nun glaube ich, dass auch die Leser mir den anscheinenden Eigennutz verzeihen werden, als ich meine Frau veranlasste, mir die Bilder zu verkaufen. wodurch ich so ganz nur auf meinen Vorteil bedacht zu sein schien. (Ostasien, 1906, No. 103.)

右は明治三十九年頃雜誌「大陽」に登載せられたる石黒男爵談話の梗概を余の抄譯し伯林にて公刊せる者なり。今左に本文の大意を陳ふれは。

今より凡そ三十四年前男爵家に菊池生と云へる學僕ありき。傍ら某醫學校に通ひて勉强しけるが、資性温厚なる者なりしかば深く男爵家の眷顧を受けき。或夏郷里に歸省し再び東上せるとき春信筆四季十二枚續きの風俗畫を持參し之を男爵夫人に献せり。當時其價格は大凡一圓ほどの物なりしならん。後菊池生は檢定試驗に合格し軍醫となり或は西南戰爭に或は日淸戰役に從事し累進して軍醫正の職に上りしも卅二年不幸病に犯され遂に不歸の客どなりしは頗る遺憾なりき。尙は家には未亡人あり四人の男兒と一人の佳孃とを教養せざる可らず。婦人の任務としては決して容易の業に非らず。

日露難を構ふるに及び男爵は再び現役に服し東奔西走盛に軍國の事に盡瘁せられしが、偶神戸の某貿易商人より古畫の高價に賣買せらるゝを聞き急に思付く處あり。彼の菊池生の手土産を百圓にて夫人より買取り更に之を七百圓にて轉賣せられき。乃ち菊池未亡人を招き偖て云ふ樣、一圓の資本は化して今や七百圓となれり、中百圓は已に妻に仕拂へる余自ら取らん、殘る六百圓は貴家一族六人に均しく分配せらるべし、將來多少の助ともなることあらんかと曰ひしに未亡人は涙を流して喜ばれき。

附錄 石黒男爵より著者に贈られし書翰——益御多祥恭賀申上候然れは今便東亞第百三號御送り下され右號中老生の逸事御掲下され瑣々たる小事も貴下の靈妙なる筆によりて他邦に迄光彩を放ち候段御芳情感謝不堪候云々——明治四十年二月二十五日於東京石黒忠悳

第十四 金の使者 一名古切手（佛文）

Le méssager des Finances,

le timbre poste.

Ah! pauvre petite chose! Tu n'es pas seulement l'ami des enfants, qui trouve l'éternel repos dans le petit album des collectionneurs. Mais quelle surprise on a en réfléchissant quel travail tu fais, quelle énergie tu déploies. Si petit que tu es, tu fais tout ce qui est possible, tout ce qui est grand. Certes, personne ne peut t'égaler. Tu és à Paris, à Londres, au nord, au sud. Tu n'es pas seulement dans les grandes villes, mais aussi dans le plus petit village et avec le même plaisir dans tous les endroits où l'on veut t'envoyer, bien loin dans le désert ou dans les plus profondes forêts—rien ne te fait—tu ne connais pas d'obstacle. Le tropique ou l'artiqu', c'est pour toi tout à fait égal.

Ainsi tu n'as jamais trouvé le temps de rester oisif. Mais, pourquoi as-tu tant travaillé? C'est pour nous apporter les nouvelles les plus diverses: que la Russie a encore renvoyé la Douma, que la reine de Saxe est disparue avec son professeur de langues, qu'il dégèle en Allemagne, alors qu'il fait encore froid à Paris. Tu te glisses comme un serpent dans la chambre d'une jeune fille, et tu lui apportes mille doux baisers. Tu t'avances soudain dans le camp jusqu'au général, et tu lui racontes tout ce qui se passe chez son ennemi.

Tu ne m'as pas oublié non plus, et je te remercie bien cordialement de m'avoir apporté les par des aimables de la bien aimée de mon coeur; des nouvelles de mes petits enfants— comment

croissent les arbres de mon jardin— j'ai toujours eu par toi tous les détails de ce qui pouvait m'intéresser. Particulièrement je fus bien content de ton service, lorsque tu es venu comme le méssager des finances— m'apportant de l'argent.

Jamais on a rien ou de plus fort que toi. Tu n'es plus du tout cette petite chose méprisée à tort.

嗚、可憐なる者よ。汝は只兒童の翫弄物たるのみならず、又能く好事者の集中に入り、玆に限りなき安眠を貪る。然れども人一たび過ぎ去りし汝が活動に想到らば、異様の感嘆を止め得し。抑も汝が立てたる功勳は如何に、汝が示せる精力は如何に。態は憐れ、姿は瘠す。さあれ汝は大凡爲さる可きほどの業に爲さゞるは無く、偉大なりと云へる事に關らぬは無かりき。昨日は巴理、今日はしも龍動。或は南或は北。世界の大都に放浪へども偕て榮耀榮華に慣れしには非ず。虎伏す野邊、水なき砂漠。望まれて汝か行かざりし隈やある。

斯くて世に有りけんほど、一刻の暇とても汝は持たざりき。訝かし抑も何が故に汝は爾かく働きしぞ。又しても露國は議會を解散しき。否とよサクス

の女王は召給へる家庭教師と故ありて。今年の巴理のいと寒きに。獨乙の北は薄氷など。あらゆる諸國の出來事を汝は逸早く世に告げき。敏くも蛇の毒を吐き、美人の帳下幾度か忍ぶ戀路を語りけん。然あれ又萬死の中に敵狀偵察の任を帶び帷幄の臣と仰がれし汝の昔も雄々しかりき。

汝は又私人の使ひをも辭することなかりき。一片の飛箋卷きて又舒ふ。郷信傳へ來つて萬里旅人の情を慰する、偏へに汝が至仁至愛の行動に頼りき——
——幼きは如何に——老ひたるはそも——庭の木立の繁りたる——屋根の瓦の破れたる——何れか旅情の動かざる。何時逢ふとても嘆くことを知らざりき。別けて汝が——ア丶、大義大義金の御使者を務めたる時。

憐はれ世の人。古切手とて努め粗末にはすまじきぞ。

第十五　東鄕大將訓示（獨文）

Vortag des Admiral Togo

bei der Trennung der verbundenen Geschwader am 21. Dezember 1905.

Infolge des Friedenschlusses nach dem zwanzigmonatlichen Kriege kam unsere verbundene Geschwader ausser Dienst, und ist gestern getrennt worden. Doch muss man nicht denken, dass unserer Marine dadurch die Arbeit erleichtert worden sei. Um sich über die Erfolge des Krieges auch in der Zukunft freuen zu konnen, und um das Volksgedeihen ewig zu sichern, ist es selbstverständlich, dass die Marine im Frieden wie auch im Kriege immer bereit sein muss. Es muss bemerkt werden, dass ihre Macht nicht bloss aus Schiffen, Waffen und dergleichen besteht, sondern, was am wichtigsten ist, auf dem persönlichen Mut ihrer Mannschaften begründet ist. Sehen Sie mal, wenn eine vor unsern Kanonen den Feind hundert Mal schlägt, so *tut* sie gerade so viel, wie hundert Kanonen, aus welchen nur einmal geschlossen wird. Deshalb müssen wir zu allererst unsere Macht geistig und nicht nur materialistisch zu vergrössern streben. Wenn wir den grössten Teil unseres Sieges auch der übernatürlichen Macht unseres Kaisers zu verdanken haben, muss man sich auch überzeugen lassen, dass auch viel die alltäglichen Ubungen in der Zeit des Friedens dazu beigetragen haben. Nachdem wir diese Erfahrung gemacht haben, können wir keinen Tag mehr müssig zubringen. Vergessen Sie nicht, dass das Militär eigentlich immer ein Kriegsleben führt, und das ganze Leben hindurch dieselben Pflichten hat, d. h. im Kriege muss es fechten und im Frieden muss es sich üben.

Jn der uralten Zeit hat unsere Königin Singokogo über Korea gesiegt, und seitdem hat Korea uns für mehr als vierhundert Jahre angehört. Kaum hatte unsere Marine ihre Macht verloren, ging Korea uns wieder verloren. Wenn wir auf die europäische Geschichte zurückblicken, sehen wir die britische Flotte welche im Anfange des 19. Jahrhunderts in Trafalgar sehr tapfer focht und seitdem konnte ihr Vaterland ganz ruhig sein. Hieraus kann man leicht sehen, wie sehr das Gedeihen eines Landes von der Flotte abhängt. Unsere Marine konnte infolge ihrer täglichen Übungen im Kriege siegreich kämpfen. Sie muss natürlich noch immer stärker werden, um mehr und mehr für das Vaterland arbeiten zu können. Der Himmel wird nur dem helfen, welcher so denkt, während er dem, welcher mit einem einmaligen Siege schon zufrieden ist, nicht beisteht. Wir möchten hier die Worte eines alten japanischen Ritters zitieren, welche folgendermassen lauten: "Nach dem Siege mache den Helm fester."— Göttinger Zeitung, d. 10 Feb, 1906

勝つて兜の緒を締めよ

第十六 時

○留學中の感想を書けといふ注文なるも時去つて既に久しく今更急には思ひ出されぬ。因て其時といふことを直に題にして話して見やう。

○一ヶ月を三十乃至三十一に割つて一日二日と名が付いて居るから其だけで一ヶ月の仕事の目論見には差支へ無い樣にもあるが其實決して左樣で無い。三十日に割つたのでは同じ資格の日が三十あるので日常の生活には餘り繁雜過ぐるのである。

○古人は既に其煩冗なるを救ふべき道を知つて居た。手近な例は朔日十五日といふ呼聲である。朔日十五日は小僧の安息日である。乃至は御赤飯を炊く日である。緣日に五十稻荷あり五十の呼聲で一月に六度の緣日が明快に表白されて居る。

○以上の例は仕事を休む日を示す場合の方で其度數は無論多くない。實際活動する日取を示すには記臆に便利な樣の呼聲を用ひてある。例之ば一六三

八とか二七五十とか四九日とかいふ類である。之を皆寄せれば一から十までの數になるから月中の日で表はされぬ者は無くなる。而して是は暦式に日數に一二三の番號を付け無造作に呼立つるとは餘程違つた趣を示す。若し單に一三六八と讀み上ても決して覺えらるゝ者では無いが一六三八と引繰り返へして云ふので頗る美文化され爲めに又吾人の記臆力を助くること大なるのである。

○然るに此呼聲も今日にては只僅に寺院の片隅に保存さるゝ位の事で一般世人には殆ど忘れられて仕舞ひ、其代り只だ拙劣にも日數に番號を付けて暦の諳誦みた樣な事をして居る。

○尤も我邦にても七曜の名は既に輸入せられ一六三八や二七五十の代りに學校や役所で用ひては居る。併し是れも日曜の外は其呼聲を利用して居ると見ゆる點はない。

○今の有樣では七曜を設けた主旨は少しも理會されて居らぬかの感がする。日曜日だからと曰へば人は直ぐ休暇だなと悟る。併し水曜日だからと謂つても何とも思ふまい。昔人か今日は三の日なればとか六の日故とか曰つて稽古に行つたのとは寧ろ劣つた觀がある。

○流石に本家だけあつて歐洲では七曜の名が意味ある呼聲になつて居る。水曜日と云へば書生の耳には土曜日と同樣に半ドンの響がする。月曜日といへば公設の展覽會は大抵休みと心得て好い。大學の講義でも此日の朝は缺席者が增す。尤も是は前日の惡結果からではあるが。それから一家の中でも月曜か火曜に洗濯物を出せば土曜日には必ず返へる。從つて今日は土曜日だのに何故洗濯屋は品物を持參せぬだらうかと思出す栞になる。木曜日を大掃除日とすれば金曜日の晩には芝居見と極めて置くといふ樣な譯である。

○朔日と云つて御赤飯を想出す如く木曜日で大掃除を思出せば家の內は一ケ月に四回も淸潔法が行はるゝ譯で歐洲の民家は中々淸潔である。邦人は淸潔を自慢の樣に云へども呼聲が唯歳暮の煤掃である以上年に一度しか大掃除の機會は無いでは無いか。

○だから曡の上にマッチの屑が一本位落ちて居ても餘り小言を云ふ人も居

らぬ獨逸の家庭でソンナ事を屡やつて居ると目玉の來る位は當然である。甚しくなると損害賠償の訴をも受け兼ねない。

○折角新しい七曜の名まで輸入しながら元の方がモット氣が利いて居ると云ふのでは殘念故、ドウカ其七曜の名に日常生活上の意味を持たす樣にしたい。只だ學生の講義を聽く時間割に用ひらるゝ位とは淺ましい。

○偖愈ソウなれば、生活上に秩序が立ち出す。漫然時間の勵行などゝ喋いでも社會が勵行するだけの必要を持たねば迚も行はるゝ筈がない。然るに若し木曜日は掃除日なればとか金曜日は芝居見の日故とか毎日毎日に向ふて其目的が出來て居れば人から言はれずとも時間を勵行せなければならぬ事になる。それから社會が全體に期せずして勵行する樣になるだらう。

○以上卑近な話なれども亦是余が留學中に感得した處の一端である。之を一種の社會改良策と見做し實行する人あらば其日から必ずそれに相應するだけの効果の有る可きとは余の固く保證する所である。

第十七　禪と物質

日本には昔から山師と云ふ詞があります。此山師と云ふのは本來は鑛山業をして居る者の事でありませう。併し吾人は今日山師と云ふ詞を隨分可笑しい意味に用ゐて居る。是と恰度同じ樣な事が外國にもあつたのであります。それはアルシミストと云ふ詞に就てゝあります。アルシミストと云ふのは錬金學者とでも飜譯しませう。彼等の本來は金屬を取扱ふ化學者なのでありますが、其れが恰度山師と同じ樣な可笑な意味を持ちました。其譯は彼等の中に只鉛とか鐵とか銅とか云ふ樣な安い金屬を黄金に變へて金儲けをしやうと云ふ事を考へて働く者があつた爲めであります。之に就て面白い話があります、と云ふのは或時一人の錬金學者が羅馬法王の所に參りまして、私は鉛を金にする法を發見致しましたと云つたのであります。すると法王は大層之をお褒めになつて、錬金學者に大きな財布を贈られた。錬金學者は案に相違な顔付をして居るから法王は、汝は鉛から金を作ることが出來ると云ふのだか

ら差當り其入物が入用だらうと思ふと云はれたそうである。

今一つ如何にも一般の錬金家が輕蔑せられて居たかを見る可き事實がある。それは一六七五年に佛蘭西で出來た本でルメリー著クール=ド=シミーと云ふ本があります。此本が出來てから化學が動物質、植物質、鑛物質といふ樣に分けて物質を論ずる事になり從ふて又有機化學、無機化學といふ分派の生ずる端を開いたのである。其本を一六八五年に英國のワルタ=ハアリスといふ人が譯してウースタア大公に獻上したのであります。其獻上の詞に此本に書いてある事がらは社會を益すること實に尠少でない。著者は眞摯なる研究家で世間の所謂錬金家とは截然として其選を異にする、因りて今之を譯して、閣下に獻上し以て世上に弘むる一法と致したいとしてあります。是に由つて見ても山師と普通のアルシミストとの關係が能く似て居ることが解るのであります。

偖多くのアルシミストの目的の可笑かりしにも拘はらず、其研究せる結果には多少の眞理を含んで居たものがあつて、是が基礎をなして今日吾人の學

びつゝある化學上の學説と成つた者も敢て少くは無い。

一體宇宙間の森羅萬象は皆悉く變化と云ふ者があります。其變化は次の三種に分つことが出來る。

(1)甲の物質と乙の物質と互に反應して丙と云ふ物質の生ずる場合、之を化合と申します。

(2)甲の物質が反應して乙丙といふ二つの物質に分るゝ場合、之を分解と申します。

(3)甲の物質と乙の物質とが反應して丙丁といぶ二物質を生ずる場合之を複分解と申します。

如何に不思議に見ゆる變化がありましても、研究して見れば此三の形式の中に這入るのであります。そこで其變化から能く考へて見るに、物質には二種類なければ成りません。第二の場合の如きは一の物質が反應して二の物質となると云ふので、是は壞れるものであります。第一の場合の如きは唯化合するばかりで分解することの出來ぬものであります。因て物質に元素ありと

云ふ觀念が生じて來るので、此元素からして種々の化合物が出來るのであります。此元素と云ふのは日本語でありまして英語では Element と云ひます。此は元來は拉丁語の Elemens から來た者である。今日本語で云へば假名四十八字に其始めの三字を取りてイロハと云ふ。西洋でアルファベトと云ふのも希臘のアルファ、ベータから取つたものである。そこで此の Elemens といふ語はアルファベトの中程からl m nの三字を取り出して一つにしたので、矢張假名から文字の出來る如く、元素から物質の出來ることの意を寓した者といふのである。

其元素に就て希臘のアリストテレスと云ふ人は、宇宙の萬物は地水火風の四元から成ると云ふて居る。此思想は東洋にもある。或は此方が本家かも知らぬ。如何にして四元よりなるかと云へばアリストテレスは曰く、例之ば一個の金塊を取りて見るに其堅い處は地である、之を熱すれば液體となる、即ち水であると。かう云ふ風な考を持つて居たのであります。然るにアルシミストの研究は夫自身には不完全ながら能くそこの處の考を一歩進めて先づ變

化の三種類を確定し、遂に健全なる今日の元素思想に到達せしめた譯である。

現今元素の數は八十一ほどゝ成つて居る。併し此は極めて確かな者のみであつて其他に未決定の者も少くはない。例之ば日本素といふ者も既に提出されて居る。

偖て此の如く元素思想が確立して元素と元素から化合物を作ることは出來るが一の元素が只それ自身に於て何等かの變遷を受け他の元素を生ずると云ふ樣な事は有り得ざる次第と定まつた。そこでアルシミストは自分の研究で自分の目的を否認したので即ち是は一種の自殺と謂はねばならぬ。

かう云ふ學說で化學は此百年間ほども持續した。勿論是は學問として非常の進步であつた。然るに茲に再び一の疑を生ずる樣になつた。それは其の八十以上の元素を系統的に調査するから起つた疑問であつて頗る有力なる次第である。即ち今八十有餘の元素に就て各其原子量といふ者を測定し而して其數字の順に排列して見ると奇妙にも其の相隣れる元素の間に性質の類似がある。即ち是は簡單なる數字に比例して性質が遞變し行く譯で此の關係を一の

定律にし之を元素の週期律と名くる。偖て疑問は是から生ずるのでツマリ元素に週期律ある原因如何と云ふのである。

此疑問に對して有力なる答案は萬有一元說であらう。元素が其原子量に比例して性質を變ずるといふことは其元素に更に共通なる、モウ一段低い程度の元素あり此が一つで某元素、二つで他の元素といふ風に、集合の度合に應じて今日ある八十有餘の元素を現出して居る譯ではない乎と曰ふのである。而して此の根本的元素を假りにウアマテリーと命名する。故に若しウアマテリー說が眞實となれば今度は學問が逆になつて昔のアルシミストの錬金術こそ却つて合理的の者であると云はなければならぬ譯となります。

昨の是は蓋し今の非。眞理といひ原則と云ふ。皆是一時的方便のみ。ウアマテリー說の初めて提出さるゝや只だ是週期律說明の用に供せらるゝ一假說たるに過ぎざりしが。玆に最近此假說に實驗的證明が出つる樣になつて來て頗る吾人の心膽を驚かした譯である。是實に彼の有名なるラヂウム元素發見に由來するので如何にも近頃の大問題である。委細の事は今玆で陳述しやう

とて到底出來る話でないから止めるとして、先づ要點のみ云へばコウである。即ち其ラヂウムからエマナチヨンと云ふ者が發生せらるゝ。是は重い瓦斯體元素で原子量約二二二であります。此重い元素を眞空管に集め數日間放置すると今度は原子量の非常に輕い而して從來已に知られた元素でヘリウムと云ふ者に化して仕舞ふ。即ち一元素が他の元素になつたと云ふのである。此かる變化は實に近代發見せられた事實の中でも特に驚天動地の性質を帶びた者と謂はねばならぬ。偖此等の研究は主として英國の化學者ラムゼー先生の手で爲されつゝありますが昨年自分が先生の敎室を訪問した時にも多忙の間に丁寧に其の實驗に關する裝置などを示して下すつたのでありました。勿論大問題の事でまだ〳〵決して萬事終結したと云ふ程度には進捗して居ないから今後愈ドウなる歟。是は學者の深く注目せねばならぬ點であります。

物質に關して横から見た處は理化的哲學となつて以上陳べ來りし通の有樣を成す。偖之を縱に上から見下すと形而上的の者になつて單に之を哲學といふのである。是から之を略述して見やう。今日吾人が物質と名けて居る者を

通觀すると、其間何れにも共存せる數多の性質がある。就中第一には擴かりの有る事、第二には已に甲の物質のある處に乙の物質が同時に存在するを許さぬ事。此二つである。デカルトの如きは特に第一の性質に重きを置き擴りと云ふ事とそして運動と云ふ事さへあらば宇宙の萬有を現出し得ると曰ふて居る。先づ擴がりと云ふことは物質を認識するには是非とも必要であるが唯擴がりのみでは靜に止まるそこで之に動を加へて宇宙を說かうと云ふのがデカルトの遣り方だ、併し擴がりとは何ぞ。擴がりが物質乎。物質が擴がり乎何れか分らぬ。已に物質ありとせば直に之に關聯して擴がりと云ふ考へが生ずる。擴がりと云ふ事を普通空間と申します。そこで今日では何だか分らぬなりに物質と空間とを設け、此空間に物質を動かし、其動の原因をエネルギーとする。エネルギー、物質、空間、とコウ成つて來ると次には運動變化の前後長短といふことを曰ひ出す、即ち玆に時間の觀念を加へる。偖て此四の關係から論じ出して今日の複雜なる哲學となるのだが。今兎も角此の四を只一つの公式に入れて相互の關係を示した者がある。即ち

$$E=\frac{1}{2}M(L/T)^2$$

Eはエネルギー、Mは物質、Tは時間、Lは空間を示す者である。偖此公式に於てEとMとの關係が中々面白い。吾人は物質々々と云ふけれども、實は物質を直接には知つて居らぬ。知る處はEのみ。而してEとLとTとの關係からMを計算して出すのである。計算の結果たるMは量に過ぎぬ。事實吾人の想像する樣にその量の後に或實在ありや否やは全然不明なのだ。それ故に吾人が物を賣買する時にも物質を直接には測らうとはせぬ。天秤を用ひて居る天秤は物の重を致ゆるので此は即ち前の公式にあるEに當る者だ。それで今一つモット分かり易い例を擧げて見やうなら。人あり若し突然杖で頭を叩かれたとする。此時に吾人は痛いと感ずるが早いか、それとも又ア、杖だなと感ずるが早いゞ乎、それは勿論痛いと感ずるのが早いに相違ない。而して後杖といふ物質だなと來る。丁度前の式はそのまゝ實行されて居る。要するに吾人は物質と云ふなれども實は物質の存在すると云ふ事を直接には知らない、必ず先づエネルギーを知るのであります。事實此の如くなるに、吾人は何故

かEの事よりも、考へには物質が先に立つ。見ぬ戀にあくがれると云ふ事はあるか、見もせぬ物質に眷戀たるは、只長い間の習氣によるのであらう。

扨てそうなると哲學上の議論は、E本位で宇宙を論ずる方が順序である樣だが、併し議論は循環して、そのエネルギーとは何ぞやと云ふことになる。エネルギーを吾人が認識するのは、そのエネルギーに差別のある間である。而して宇宙のエネルギーは時々刻々變化して、その差別を失ひつゝある。即ち平均しやうとして居るので、若し平均し盡さば、吾人は最早エネルギーも知らないやうになるのである。即ち此時に當りて吾人の考へは全く無に歸する。人は有爲轉變の世の中と悲しむけれども、有爲轉變あればこそ、世の中も在るのである。是れが無くなれば吾人の頭には世の中が消へてしまう次第だ。そこで初めから此差別比較の詮議を離れて、人生とは何ぞや、否物質とは何ぞや、エネルギーとは何ぞやと著眼して立つた者が、即ち我佛教である。此點に於て、私は特に佛教に理の卓越せる者あるを信ずるのであります。是を論ずれば又長談義になりますから、今日は先づ是だけで御免を蒙ります。

第十八 國語こ哲學

聽衆の多數は女子なりきと云ふ文句ありとせば、邦人は其から已に事實の完全なる報道を得。何等の疑惑も其間に挾まないのである。然るに此文句中多數といふ字を英譯して見ると

Agreater part か The greater hart

かといふ疑問を生ずる。文法上の形式から云へば最初の譯文も間違では無い樣にもあるが、併し今の塲合はAでは行かぬ。一定の聽衆の中で多數ならざる者は即ち少數で二者其一に居る。少しも融通の利かぬ分類である以上、之に定冠詞 The を附するは論理上當然の要求と曰はねばならぬ。それなら本に還へつて多數といふ字に何等かの冠詞が必要かど云へば左樣でない。日本語では只だ多數といふて置くのが本當で從ふて前に擧げた文章には缺點はない。

以上の例は極めて簡單なる者であるが。然し若し之を以て單に文法上の差異に基く者として閑却する人あらば夫れは大なる誤である。自分は之を以て

歐人と日本人との間に存する思索の經路に關する精粗の別をトすべき一種のguage なりと信ずる。

邦人が只だ多數と言つて居る場合に。それが確定的の性質を帶びた者だか不定的の者だが。そこ迄考へ及ぶ者は無からう。そこで其が何方かと言はねばならぬ場合になると少しく迷ひ出す。但し道理は道理故考へて解らぬ事はない。之を正しく判斷して冠詞を附ければ The であるといふ結論には達せらるゝ。故に日本語に冠詞が無いから全然推理を入れないと曰ふことは出來ないが。推理が無くても濟む場合があるから兎角に思索の經過が粗雜になるのは免れぬと言ふても暴論では有るまいと思ふ。

歐人の言語はやがて其思索の經路を綿密ならしむるので。其書いた者を見ると如何にも細かしい。即ち何處までもA greater part か The greaite part かの區別がして書いてある。之を邦語に直譯すれば煩冗に堪へぬ。之を固有の日本語にして仕舞ふは磨がきの掛つた刀劍を荒砥で砥ぎ直ほす樣な者である。邦語に直ほつてから後の文句は已に必ず幾割か其意味に於てボンヤリした者に化して居る譯である。

反對に日本文を歐文に仕樣とするには荒砥のまゝの者を磨き上げた狀態の者として取扱はねばならぬ譯となる故。忽ち感ずることは原文のボンヤリしたことである。之を色々に推理し忖度して譯文を作る。そこに大なる勞力が費える。其出來上つた者はそれなら何時でも好くなるかと云ふに決して左樣は行かぬ。磨き上げてピカ〳〵する者より錆の出た古銅に趣味がある樣にボンヤリした文章には一種の含蓄がある。此れが譯文には無くなる。此點は日本文の長所と見ても好い。併しそれたけ理論は隱れる。

偖て推理の明白でないだけで猶ほ其中に條理が立つて居る方は却て長所として見ることも出來るが。荒砥のまゝを幸に正宗の外にナマクラを混じて置いても目立たぬといふ失がある。即ち日本文殊に近頃の日本文には實に亂暴極まる者がある。此の如き種類は歐譯して見ると直に目に付く。

一々例證を擧ぐるは面倒であるが。手近に思付くまゝ少しく言つて見れば。第一英語には關係代名詞といふ便利な者があつて後へ〳〵と附屬句が續けら

るゝ。此の眞似をして邦文にも附屬句法を用いた者を近頃見受くるが何れも文を成さぬ。と云ふは關係代名詞とて決して無闇に使へる者で無い主句に關係ある事項を後へ持つて來ねば行文委靡して讀むに堪へぬ。換言すれば今日の邦文には文章論上に所謂脱臼的 dislocated 附屬文を積げて平氣で居るのが少くないのである。此の如き失も矢張思索の經路に條理がないから起るのであらうと信せらるゝ。

今一つ例を擧ぐれば邦文に抑揚頓挫といふことがある。此等もボンヤリと含蓄させて滔ぐ邦文では却て一種の妙趣を生ずる譯であるが。歐文に直ほすと忽ち前後の文に論理の矛盾を來たす樣になる場合が少くない。賞むべき所には貶し樣がない。貶すべき理由あれば賞むることは出來ぬ。此點も今日の邦人は餘り考へずに書き立て行くのではあるまいか。

日本文だけで見て行けば以上の過失も決して目に付かぬ。併し此は思索者の側から考へて見て實に面白くない事と思はるゝ。自分は是迄專攻上に關する論文を草する時には何時も先づ外國文で書く。すると筆の鈍いのも大原因

だが論理が立ち易いから忽ち思索上の過失に氣が付き直ほし〳〵て隨分長い間かゝつて出來上る。後之を邦文に譯する。若し始めから邦文で書けばズット早く出來るに相違ないが不安心で成らぬ。即ち此れは氣の付かぬ論理上の矛盾をやつて居るに相違ないと思ふからである。

扨此の如く文章と思索法との間に密接なる關係あること明かなりとすれば我國今日の思索界の狀況は誠に慨嘆に堪えられぬことと思はるゝ。文章といふ gauge が如何にも低い程度に滯つて居るからである。

自分は理科の方の人間であるが文科的の學問と理科的の學問には大なる類似が成立して居ると考へる。即ち兩方共之を三大別して第一を考證派第二を實驗派第三を思索派とすることが出來る。然るに本邦では理科でも文科でも思索派に屬する方が凡て振はない。此には國語其者の性質か大關係があるだらうと云ふことを上來の議論から演繹しうると思ふ。

そこで日本には昔から傳來した支那や印度の哲學がある。此には含蓄ある文字が使つてある。之を邦文に譯しても思索學の上から見れば大した益はな

い。國文は寧ろ論理を一層曖昧にして仕舞ふから。併し邦人は原文が自在に讀めるを幸いに之を歐譯して見ると好いと思ふ。すると其含蓄せる所を一々味ふて見る必要を生じ推理力も理會力も一段活動して來るに相違ない。斯くて日本の學者か儒佛の哲理を歐譯し出さば其時から始めて日本に印度學や支那學が研究せられ出したと謂つて好いと自分は信じて居る。

自分は固より淺學菲才なる上に專攻の學問の方が頗る忙かしいから十分に盡力することが出來ぬを遺憾として居るが、數年來佛敎の一部である禪に就いて多少其含蓄する所を剖析し、荒砥の正宗に拭を掛けた樣に之を仕上げて見度と希望して居る次第である。卽ち矢張之を歐文に直はして其細かい論理の篩に懸けて見るのを第一の手段とする考へである。

東洋の哲學に就いて文章上から思索の經路を正しくすることを勸告することと上陳の如しとして更に終に臨んで日本の國語學者に一言し度い事がある。近頃羅馬字論が復興して田丸博士なども盛に之を主張して居らるゝ。其外に漢字か如何。國字か如何と云ふ論もある樣である。併し自分は其文字の撰擇

よりも以前に日本の時文を今少しく論理的の者にかく事に注意したら如何と思ふのである。此は決して他人の惡口を云ふでは無い。前にも陳べた如く邦文は元來が含蓄的の者である故其爲めに玉石混淆して文理の亂れたのも氣付かぬ樣になり易い此が當今言文一致體や新聞體などの爲めに一層甚しく成りつゝあるから此點に注意を惹きたいと云ふのである。此點に就て世間未だ多くの人が論及しては居るまいと思ふたから茲に拙文を草したのである。

第十九 歐州留學

○西遊の命を得て暫時東京に足を停めた。茗溪の客舍に

漫趁聲聞二十年。堪嘆歲月似奔川。行裝私載觀光筆。欲賦歐山亞水篇。

と口吟み阿兄に示せしに、阿兄は直に

星々双髪一年々。豈料離卮酌茗川。他哉信潮回棹日。欲聽呉曲月灣篇。

と和した。内輪同士の事ながら矢張情は涙である。

○自分は何時までも書生氣質の取れない方だが、月沈原に着いて再び昔の大學生に成つた時には、それでも多少の感慨あるを禁じ得なかつた。併しイタヅラ盛りの若殿原が顔には生疵、鼻眼鏡、意氣揚々として右往左往に磨れ違ふのに見慣れては、自分も何時か若返つて、佳人と共に一夜を酒家に飲み明せし事さへ有つた。

狂伍青年入酒樓。强將笑語伴溫柔。誰知塲外霜如雪。約翰塔尖傳曉籌。

隨分馬鹿らしく聞ゆるが、是で語學の稽古もし、人情風俗も理會し得たので

ある。

○何様北緯五十一度か二度といふのだから冬の寒さは無論のこと。十月より翌年三月の末迄はチラリ〳〵と雪の絶間もあらばこそ。南海男兒是には流石閉口したが名にし負ふハーッの雪見に誘はれて、滿目白皚々の眞中に一日立暮した事もあつた。此時の絶景今でも目の前に髣髴す。

玲瓏巽是水晶宮。雪霽山城萬頽空。唯有彩霞飛不歇。吟鞍據盡落暉中。

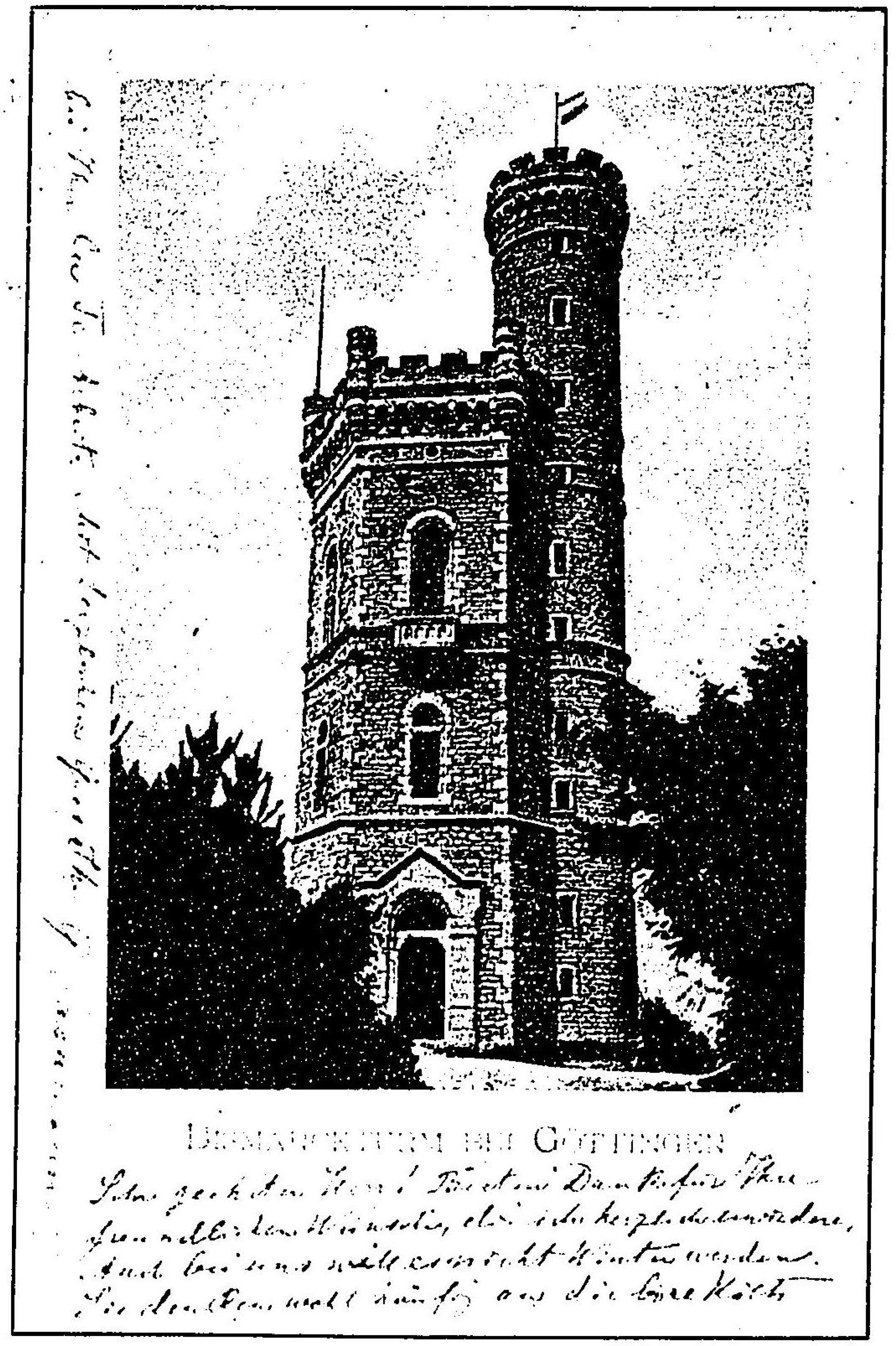
では萬一の妙趣だも寫し得ぬ。

○遥々日本から志させしタムマン先生に贄を執つて其敎室に通ふ様に成つてから、暫くは人並みの机に向つて居たが、自分の取扱ふ材料から毒氣が出づるといふ事で人氣の絶へた古敎室に移された。朝から晩まで全くの一人ボッチ。無言の業を半年ほどしたが此さへ修行と勇を鼓して

三尺羅窓付網蛛。有人枯坐太清癯。此生疑是毘耶客。未必沈痾親藥爐。

化學者だから是れでも好からうと壁に題した事であつた。

○去なきだに旅は物憂き者なるを、光陰空しく去つて人老ひんと欲す。春



タムマン先生手簡

過ぎ夏來りやがては秋の最中。孤筇飄然落葉を踏んで城東の小丘に攀ち稗公塔畔獨り慷慨の涙を揮ひし者蓋し幾回ぞ。

秋林寂寞宿ニ歸鴉ー。身ハ在ニ他郷ニ送ル歳華ヲ。書劍飄零多少感。稗公塔畔夕陽斜ナリ。

嗟呼日暮れて途遠し此の瘠馬を奈何。興趣油然凝つて西詩と成る。曰く

Dedanken eines Japaners

beim Anblick des Bismarckturmes im Herbste

Es sinkt der Abend nieder
Mit herbstlich fahlem Schein,
Die Erde stirbt nun wieder,
Wird tot der Wald bald sein.

Dort krächzend sieht man fliegen
Der Krähen öde Schar,
Auf kahlem Zweig sich wiegen
Zur Nacht, der Sterne bar.

So schnell, ach, ist vergangen
Des Sommers linde Pracht,
Schon bleichen meine Wangen,
In mir auch wird es Nacht.

Und all der Jugend Hoffen
Erstirbt, wie dieser Wald,
Von Sturmes Hauch getroffen
Vom Winter eisig kalt.

So fern von meinen Lieben
Ins fremde, kalte Land
Vom Schicksal hingetrieben,
Nur einen Trost ich fand.

Befriedigung im Streben
Dem Vaterland zum Ruhm,
Das heisst das Leben leben,
Ist höchstes Heiligtum.

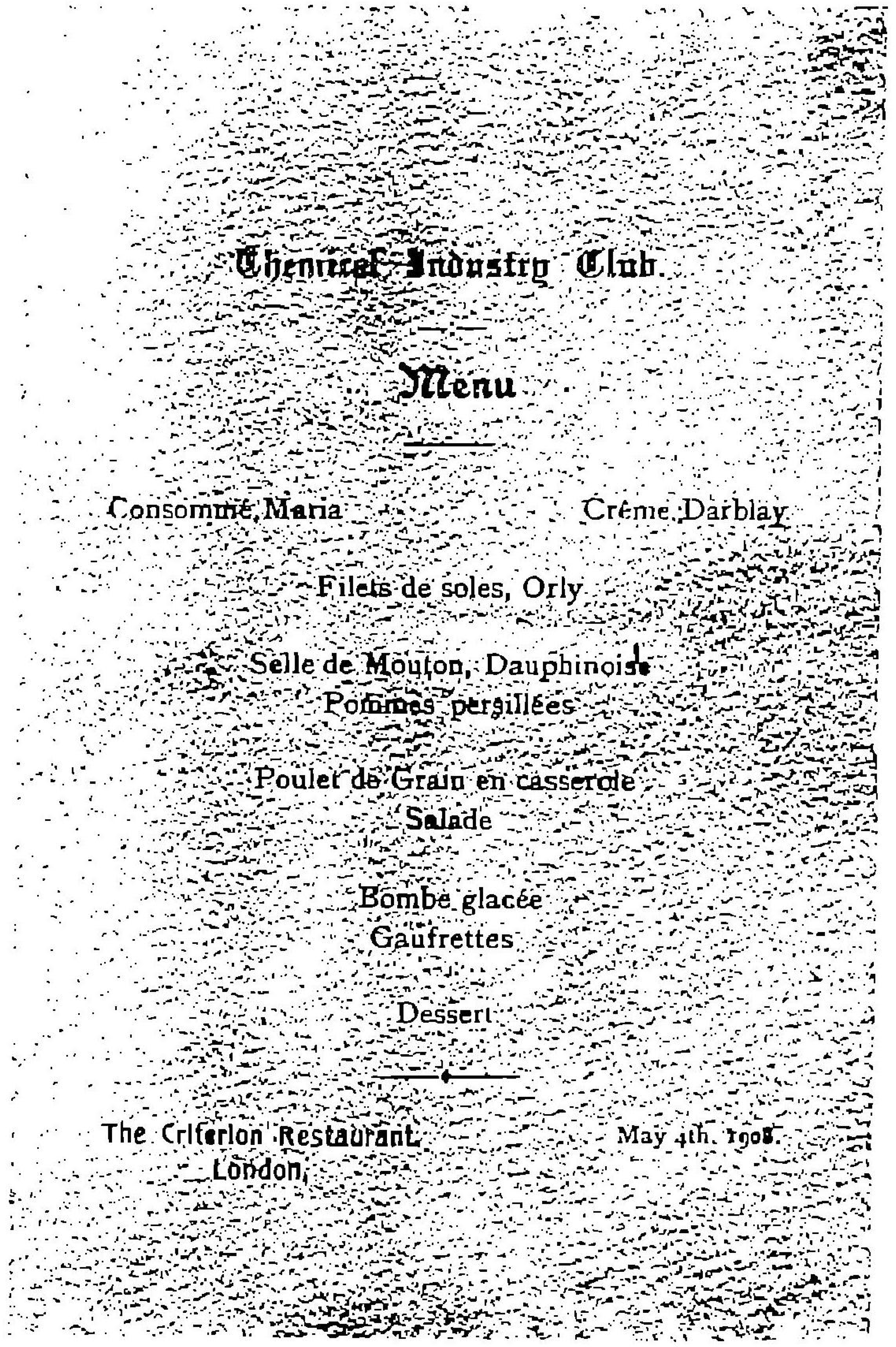
Dann trotzt des Winters Stürmen
Die Seele und bleibt warm,
Dann wird ein Gott mich schirmen
Mit festem, starkem Arm.

○之を月沈原時報に投ず。タムマン教授見て深く同情を寄せられ慰撫到らざるなかりき。此一段の事深く教授の心頭を動かせしと見え後來余が巴理の客窓に一書を寄せられし折りにも、吾子尚能く當年の冱寒を記するや否歟とありき。温情掬すべき限では無い歟。

○伯林や巴理や。何れも皆相應に長く腰を卸した方だつたが記す可きほどの事も無い。南船北馬見學の積りで飛回はつた箇所は西歐に半ばする。併し是とても偖て餘り情緒には觸れなかつた。

○英國に航して日本からの恩師ダイヴアス先生を音のふた時は如何にも馴かしき思かした。屈指すれば袂を東西に別つてより早や十年の昔かたり。曾て故老友刈谷無隱翁の句に

白盡當時兩鬢青。秋風握手話飄零。十年一掬相思涙。便是五千餘卷經。


Chemical Industry Club

Menu

Consommé Maria — Crème Darblay

Filets de soles, Orly

Selle de Mouton, Dauphinoise
Pommes persillées

Poulet de Grain en casserole
Salade

Bombe glacée
Gaufrettes

Dessert

The Criterion Restaurant, London. — May 4th, 1908.

工業化學會紀念

とあるを記せしが、此時如何にも實況だと思ふた。先生は兩眼の不自由なにも拘はらず宛ら自分を孫か小供の樣に庇はれて、ピカデレ＝ソルカスに、人馬の海を漕ぎ分けられた折もありき。化學會や工業化學會の晩餐には度々先生の招待を蒙つた。

○外遊三年、凉炎親疎、人情の機微にも觸れて見たが就中

時々書面能く不出代りに毎朝貴殿福壽延長無災無難諸願滿足を祈念申上候也

とは法乳の恩師、現妙心寺管長、高源老漢の遙々佛國まで寄せ給はりし御消息の一節なりき。貴ふとい哉、貴ふとい哉。一度も醫師の世話にはならず、又甚しき失態も無くて、兎にも角にも官命のほど仕果ふせたる、是固より先輩諸友に負ふ所あるは明かなれども、抑又老漢徹骨の慈悲與つて多きに居らざらんや。想一たび茲に到れば唯だ感涙の滂沱として下り衣襟爲めに濕ふを覺へざるのみ。噫。

第二十　傳教大師と弘法大師

自分は明治三十八年の春、妙心寺の先天會で傳敎と弘法に就て演説した事がある。而して此二大名僧を一緒にして話した處只の五分間で濟んで仕舞ふた。其草稿の全文は次の通りである。

傳敎大師は神護景雲元年の生れなり。延曆七年、齡二十二にして叡山に一乘止觀院を創む、即ち今の根本中堂なり。延曆二十三年七月日本を發し入唐、翌二十四年五月在唐僅に一年未滿にして歸朝す。蓋し帝眷頗る厚く長く淹留するを許されざる爲めなり。

弘法大師は寶龜五年に生れ最澄より若きこと七歲。延曆二十三年夏五月、最澄に先んずること二ヶ月にして日本を發し入唐。延曆は二十五年。改元して大同元年となる、其年八月に歸朝せらる。在外二年に滿つ。

此二人者皆共に一代の傑。出るに偶時を同ふす。施設する所恵を後昆に垂れ仰がれて名を佛祖に比す。若し夫れ得力皆凡て入唐の後に在りとせば則ち

滝留僅に一二年に過ぎず。今の留學生たらん者豈に紳に書し策に銘し以て其後塵を追はずして可ならんや。

只是だけで有つた。然かも余は此稿を携へて同じ年の夏西遊の途に上り夏益冬雪懐中から之を取去つたことは無い。歸來又巳に三年を閲し、今又此文を草せんとする時同じく之を懐に探くり得たのである。

偖僕か西遊中に日本の新聞を讀んで居ると谷本博士が東寺で弘法大師の事を話され滔々四時間に亘つたと書いてあつた。その後東寺では長いのが例になつて某先生も五時間、其次の某先生も亦五時間、總に皆弘法大師を説話して義くることを知らぬといふことである。

そうして見ると世間では大師の演説には必ず其長いのを賞美し短かいのは頓着せぬ者と見える。恐らく妙心寺の連中でも僕が只僅かに五分間に仕て除けた大師の演説を今日まで記臆して居る者はあるまい。併し玆に一つ不思議な事は其の聽衆にも又世間にも何等の反響を起さなかつた演説の草稿が六七年の今日まで尙は演者の懐中に秘藏せられ、其間北半球をグルノヽと回はり、

再び元との京都に舞ひ戻つて來て居るといふ事である。

顧ふに彼の草稿は言ふに及ばず、今茲に書かれつゝある文章も亦矢張短かいから世間には更に響きかせぬかも知らぬ。それでも古人の中には能く無絃の琴の音さへ聞き分けた者が有つたといふ事だから、低くとも兎も角音はする僕の文章を讀んで覺えず破顔微笑する底の老佛も無いには限るまい歟。

第二十一　學窓放言

一　大學教授と角力取り

詩人ハイネが月沈原大學を放逐せられ校門を出ながらの捨言葉は頗る皮肉つた者である。即ち一體何處の大學町にでも必ず皆永久不斷の新陳代謝が行はれて三年目毎に學生の新生代が芽を出す。此等の學生は全體として恰も一種の江河の如く學期學期の波に送られて彼斷へ此續き有爲轉變しばらくも休む時を見ぬのである、然るにかゝる江河の眞中に立つて不思議にも能く泰然不動の姿勢を維持し埃及のピラミッドでもある樣に思はるゝ者がある、何ぞ是れ老大教授諸氏に外ならぬのであると謂つた樣なことだ。

若しハイネの言魂が幸はふて教授の位置が誠ピラミッドの樣に動なき者とすれは大に人意を強くするに足る譯だが夫れは信せられぬ。否、僕の見る所を以てすれば教授には隨分榮枯盛衰の甚しい者がある。而してそれが殆ど全く體力の消長に伴ふと云ふのだから其點から見て教授の一身は頗る角力取に

類した者が有りはせぬかと考へらるゝのである。

僕は都合あつて久しく回向院の本場所を見に行く機會を持たなかつたが本年夏十何年振りかに始めて再び之を見た。偖此間に於ける角力取りの顔振れはドウである歟。西の海小錦大砲などいふ時代は夢の間に過ぎ常陸山梅ケ谷と云つたも既に昔である。今日では大刀山、是とて長くはあるまい。彼等は唯一の體力を資本にし之に稽古とか攝生とかいふ努力を加へてそして能く名譽ある勇者の月桂冠を戴くに至つたのであるが、其百千の努力にも拘はらず體力一たび衰ふればモウ夫なりけりで有る。

朝から酒を飮んで居ても智力衰へず大學教授が立派に勤まると云ふ人あらば是其體力の非凡なるに因る外はない。毎晩球を突きに出ても尙ほ相應に新智識に追付いて行けると云ふならば是とて一と通りの體力では長く續かぬ茲當で有る。其代り又毎日毎晩讀書に從事して居ても病氣にはならず、それから研究に思索に實驗に著述に其他あらゆる方面に氣力を用盡して夫れでも一年中別に臥蓐の苦みに逢ふ事も無い、只かくて連續不斷に學術の新生面に適

進し得る人あらば吾人は矢張其體力の抜群なるに驚嘆せざるを得まい。尤も之を年中酒びたりに成つて居ても其位の効果は擧げて見せるといふ手合から見たら或は遠く劣つた者になるかも知らぬ。ツマリ多少の優劣は有るにせよ兎も角弱くてはテンデ出來ない仕事である。

大學教授の盛衰が全然体力の上に在ることは明なりとして、只此は角力取ほど急激に現はれて來ぬのも確らしい。横綱の世代が五六回も變はる間に東西洋を通じて著名の大學者に夫ほど烈しい變動が有つたとも見えぬ。併し兎角は体力の盛衰に從屬するのだから結局角力取りと異つた事はない、ピラミッドの様にといふ祝福は何等の奇特をも示さぬといふに歸するだらう。處で角力取なら体が弱つて廢業した後に或は年寄にも成れやうし料理屋も開ける、其他何をしても人並みの仕事なら出來ぬほどには弱はつては居らぬ又爲じても差支は無い。だが大學教授では此の點が何うなる歟。

此から先きの議論は僕の知つた事では無い。只近頃僕の讀んだ書物に碩學オストワルド教授著偉人 Grosse Männer といふのが有る。初めの部分には人物

鑑識法それから偉人の行履などがあるが餘り珍らしい事も無い。結尾に近いて別に上記の問題に論及し讀んで居ても覺えずヒヤリとする程に甚しい、言語も用ひてある樣だ。露國の教授は助手講師時代なども通算して卅五年勤續すれば恩給として俸給全額を受けるなどいふ樣な事まで調べてある。併し僕は今此内容さへ御取次ぎすることを好まぬ。矢張之を諸君がオストワルドの様な大家の筆から直接に御聽取り又は御讀取りに成るに任かせるのを至當の所業と信ずる。

二　氣韵に乏しい藝術

技の神に入つた者は觀て居ても快い者である。併し今の人が妙技を談ずる樣子を聞くと其話が如何にも事實的に傾いて仕舞ふて妙が左程妙にも見えなくなつて來るのである、飛行機などにした處で此が古人の手で出來た者なら何れ程話を誇大して書いたであらうか。如何にも古人は想像的で詩的で左程にも無い事まで畫いた目には玄妙不思議に思はるゝ其れを其まゝ寫し出して

後世に傳へてある、到底も今の人が此の飛行機は一分に數里の大空を驅けるが彼れは何程の動力と構造が云々だから其位は勿論行けるだらうなど〻計算ヅク目に話して居るとは實に雲泥の差があるのである。今試に列子に出て居る二三の話を古人の詩趣に富んだ例として掲げて見やう

昔し魯の國に公扈といふ者と趙の國に齊嬰といふ者とが有つた。二人共に病氣になつたから當時の名醫で扁鵲といふ人の治療を乞ふた。すると病氣は直ぐに治ほつたが扁鵲の曰ふには御兩所とも此外に尙ほ生得の御大病がある、序に之をも治されては如何と曰ふ。何んな病かと聞いて見ると公扈には思慮あれども斷なく齊嬰は思慮足らぬ癖に遣り過ぐる、だから御兩人の心を取り換へたら丁度相平均して工合の好い者になるだらうとの意見であつた。そこで宜しく賴むと云ふ事になつて扁鵲は二人に毒酒を飮まし、迷死三日、其間に胸を剖き心を代へた。兩人蘇生してから心が轉宅した爲めに自分では氣も付かずに公扈の体は齊嬰の所へ齊嬰の體は公扈の所へ行つて仕舞ふた。之を見た家族は非常に驚いて騷ぎ出したと云ふ話である。

第二には鄭の師文といふ琴の名人の話。其技已に神に入つて天地をも感動させる事が出來る程である。そこで春に當つて商弦を叩き以て南呂を召けば涼風忽ち至り草木實を成し、秋に及んで角弦を叩き以て夾鐘を激すれば溫風徐に廻へり草木榮を發すと云ふのである。流石の師襄も之には感心して仕舞つて遠く及ぬばと曰つたと云ふ事である。

是等の話は何れも面白い。併し今日から云へば醫術でも音樂でも誠に長足の進歩をして事實的に上述の話の樣な手柄は遣つて居るのである。既にかく事實でやれる樣になると人間は左程詩的の想像を逞くする必要もなくなると見えて誰れしも今日の技術を詩にし話にして妙の妙たる所以を賞美せぬ。此が誠に可笑しいのである。

今一つの話、是は僕の專門に近い者を撰んで最後の結びに仕樣といふのである、曾て老成子といへる者尹文先生に幻術を學んだ、其時先生の曰ふには一體有生の氣と有形の狀と皆盡く幻なのである、萬象皆既に幻ならば吾子と雖も亦其中に漏れない、學ばずとても幻は出來る筈だと。此言を聞いて老成

子大に感心し三ヶ月間一心に工夫して見た處、忽ち妙用を得て、冬には雷を起し夏には氷を作るといふほどの者と成つたと。

此話位の事なら今日の學問では何れも朝飯前の仕事である。只之を想像から引き出して技の妙を賛嘆した者とすれば實に妙である。今日の學術技藝も此調子で頑して見たら何んな者になるだらう。但し前にも云ふ如く事實に成効せる今人は想像には頗る鈍い。鈍くても事實上には差支がないでは無いかと今の人は直に云ふだらうが、夫れだけ今の人に奥床かしい處が無いのだ。僕は如何にも之を物足らず思ふ。

三　教師と研究者

一人の大學教授が雨の日に傘を小脇に抱へヅブ濡れに成つて歩いて居るから何方らへ行かるゝ乎と聞いて見たら、實は今妻が停車場に着く筈だから彼れの傘を持つて迎に行く處だと相變らず傘は擴げられ無かつたと云ふ話がある。

此は實話か否や知らないが、月夜に木影を眞實の枝と思ふて一々飛び越へて行つたといふ話は確かに現世に現存した事のある某大家の逸話である。是には隨分外國では時々世事に疎く或意味に於て全く馬鹿な大學者が居る。是には隨分困らさるゝ事も有る様だが、去りとて其爲に全然其人の學力をも嘲笑に附し去つたといふ例は未だ聞き及ばぬ處である。願ふにかゝる偏屈なる先生には恐く教師としての力量を見出すことは困難であらう。例之は實驗室の机が醜いとか歪つたとか、入學人員が滑つたとか轉んだとか云ふ様な事には到底も氣が付かれさうにも無い。有名なるガウスと云ふ先生の如きは講義することを迄嫌つたと云ふ極端な例さへある。併し幸にも大學教授の任務は單に教師たるだけには盡きない。其點に於て猶ほ俗物輩の所謂困り者が悠々として其命脈を存續して行く餘地を有する譯だと思ふ。即ち其れは申す迄も無い研究者として活働する事である。

研究者たらん乎教師たらん乎。二者孰れを選ぶ可きやは即ち其人の性格によりて決す。此問題が到底も虚飾や好事で解決せらる可き筈は無い。だから彼の濡れても妻君の傘は差さぬと云ふほどの人に、八ヶ間敷規矩準繩を常箝

めて何んとか融通を付けさそうとしても其れが決して出來る者では無い。こんな人を嘲つたり冷かしたりするのは如何か。只今日我邦の如き新興國で百般の事皆急設を要し所謂俗識の發達して何にても一應は氣の利く人の欲しい時機には、兎角にそんな偏屈なる儕輩は何處かの隅に沒却して仕舞はるゝ傾は無い乎。併し是亦時勢の要求として止むを得ざる者かも知らぬ。だが結局は敎師重きか研究者輕き歟其の判定には具眼者の一考を須たねばなるまい。否。少くとも詩情詩趣の豊富なる點に至つては勿論研究者に限る事だ。

四　樽俎折衝

そこで一つ古人の眞似をして何か新しい科學上の事項を詩的に書いて見樣と思ふが中々美味くは行かぬ。併し是は眞似だから拙くとも已むを得ない譯だ。

偖て世間では能く外交とか何んとか曰つて騷いて居る樣だが高が小さな地球上の事ではあるし、そんなに六ケ敷譯もあるまいに、第一言語から通じないなど〻云ふのは實に詰らぬ話では無いか。然るに茲に科學子といふ先生が居る。齢未だ二百を超えざれども能く千萬年の古を知り、足未だ門外に出でざれども能く宇宙の遠に察す。言語の異、風俗の別、其他百般人爲上の慣例習俗などは固より眼中にない。研究至り盡して今や宇宙間の事物は之を探るに恰も掌中の物を指すの趣がある。

そこで古より九夷八蕃來朝すと云ふ事は聞くが併し如何な外交術でも日月星辰の特に聘使節を派して貢を科學子に致すといふ其程迄の結果に到達した例は持つまい。處が是が其科學子には有るので先づ其の使節の彼に到らんとするや、多くは曉天に於てする。而して常に巨聲を擧げて豫め人民に警告し然る後火光を放つて行裝美々しく人間に乘り込んで來る。只夫れ蓬萊路遠くして東道人なく爲めに直に能く科學子の手許迄來着し得ざる事もある。併し此の如き場合でも長き歲月の間には何時かは機會ありて面會の素願を遂げ能く上天の來意を告白するに至るのである。此かる使節の事を科學子は總て隕石といふ名で呼んで居る。

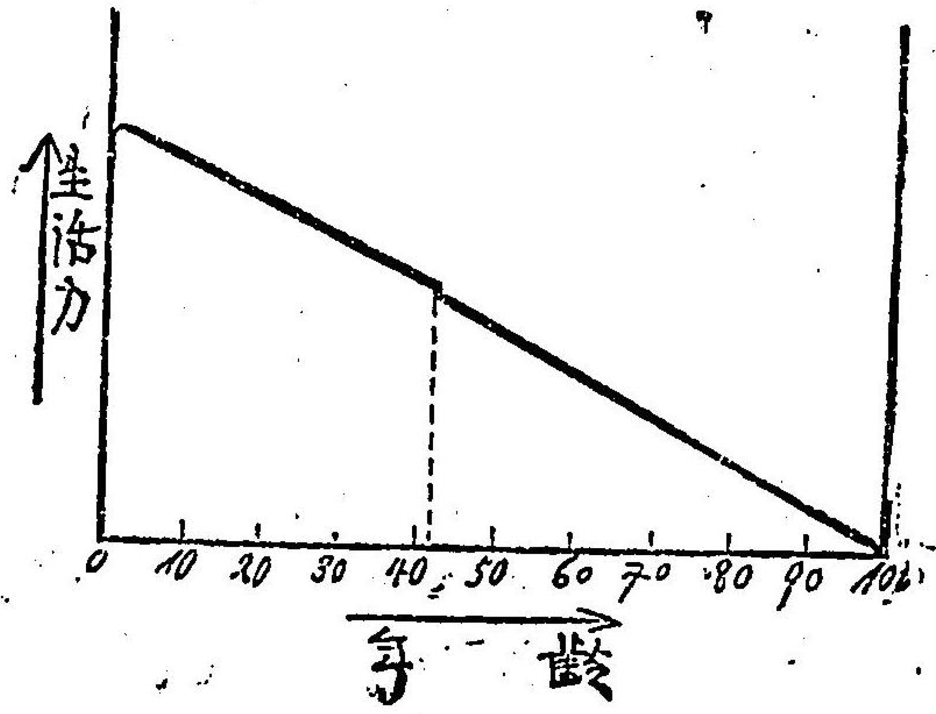
隕石は能く日月星辰を代表す。之を手にするは即ち日月を掌上に弄するのである。之を分析するは即ち天柱を裂き地維を碎くのである。之を論じ之を說くは即ち直に宇宙の化元に參するのである。此時に當つて眼豈に叢繭たる五大洲を見んや。豈に紛々たる王侯貴人あるを知らんや。是之を天上天下唯我獨尊といふ。ツマリ科學子の外交術は先づこんな者である。其氣焰の高くして當る可らざる又御尤千萬ではあるまいか。

五、人生學

此頃の心理學者中には人間優劣學といふ一派を起し掛けて居る者があるそうな。僕の人生學といふのは試に其顰に傚ふて創設したのであるが原名は即ち人生學だから譯語にはHomographieといふ字を用ひ樣かしらと思ふて居る。

凡そ此新學派は人生を數種の曲線により示さんとするので有る。第一先づ兩軸を設け縱軸を生活力とし橫軸を年齢とす。人の生るゝや苗にして秀でざるあり、秀でゝ實らざるあり。始め一兩年は案外に脆き者にて生活力必ず

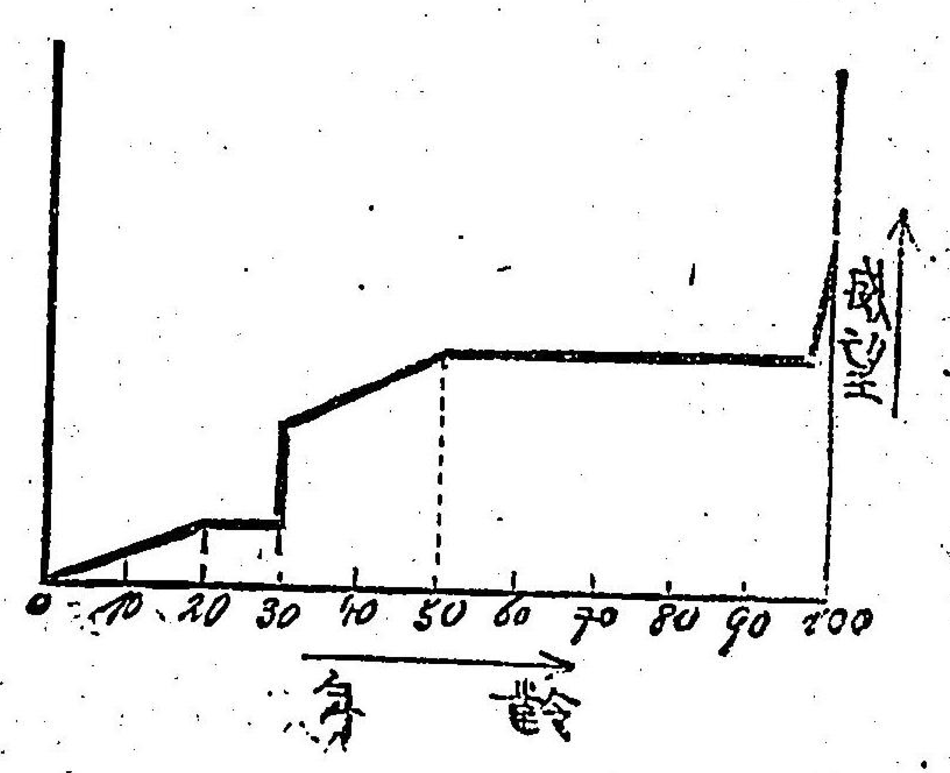
しも大ならず。之を過ぐる者は已に能く危險區域を脫して生活力最も旺盛なるを致す。上圖の最大點是なり。是より活力齢と共に減じて七十は古來稀なり。然れども時に尙ほ百歲を超ゆる者あり。四十二歲にして人に厄年あり、曲線中に一節を設けて之を表す。以上を活力線とす。



活力線

次には縱軸を威望とし橫軸を再び年齢とす。人生れて威望あることなく只能く齢と共に養ふ。大臣大將も亦皆本と書生の出と雖も書生に在つては則ち猶ほ固より未來に屬す。威望未だ全からず。是れ二十より三十に及ぶ迄威望線水平狀に走る所以なり。仕途に就きて始めて鬚あり、之を三十歲とす。僅かに威望を長す。四十五十にして能く局長次官たらん歟。衆必ずしも皆悉く大臣たる能はず。大將亦同し。是を以て五十以後威望の加はらざるを

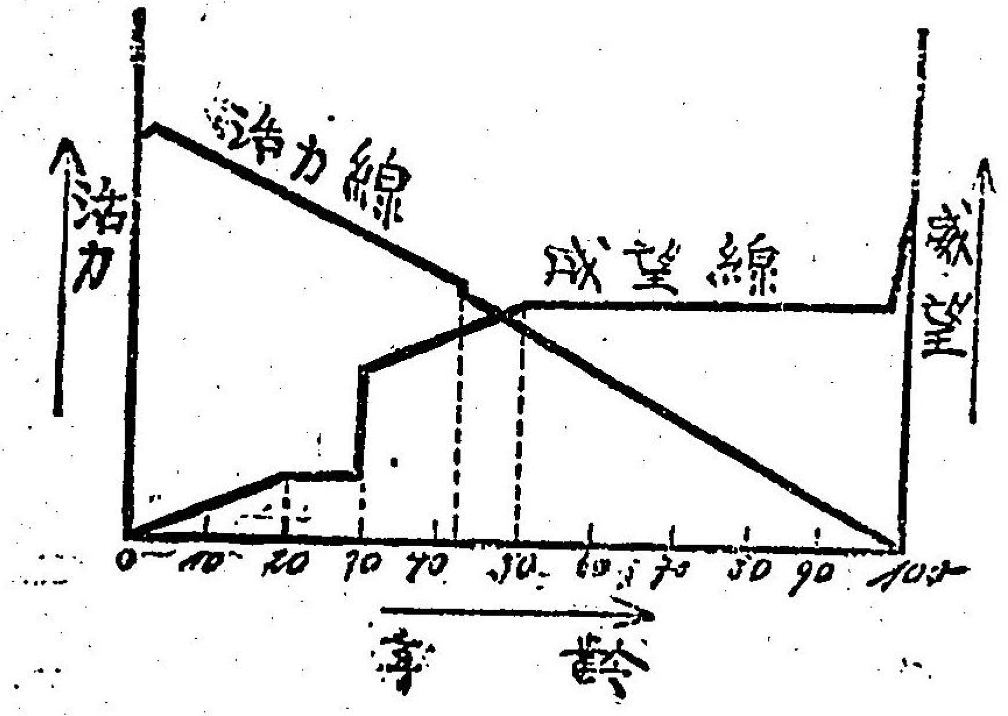
常とす。六十にして仕を致し威望或は減じ又或は減せす。以後數年にして位階忽ち昇ることあらん。命の將に終らんとするに因れり。圖中百歳に近ふして曲線向上す。然る後猶ほ或は死後の名を存し又或は



威望線

之を失ふ。即ち點線を以て假に示す。

更に此兩曲線を取つて之を一圖の中に收むるに則ち上圖の如く之を人生線と稱す。見る可し威望愈高くして活力愈減するを。嗚呼壽



人生線

か勢か。此に得て彼に失ふ。兩全を欲すと雖も人生學の原則は遂に之を許さす。此の睹易き道理すら解せずして人並以上の榮耀をも發しながら尚ほ百の百二十のと慾張る連中は宜しく先づ來つて予が門に入り、人生學の一端を明らむ可し。

放言もやれば猶ほ限なく出る。併し諸君が餘り煙に捲かれても宜くないと思ふから今回は先づ是れで止める。

第二十一　野狐禪

○富嶽の頂上で拾つだといふ千年の枯骨を懐にし鎌倉から長田信藏君が余を本郷の下宿に訪ふたのは恰度余が余の誠堂の建立に掛かつた時で有つた。余は此時始めて君から三昧の説を聞いた。

○それから十三四年も前郷里の小學校に居た時、一の廢寺が再興になり、越溪下の青道心が京都より下り、頭上に破裂する砲彈には驚かすとも、落つる線香の灰の音を聞き逃がすほどの鈍馬には成らぬと、豪語した事の有りしを其時朧げながらフト思出した。

○東京から熊本に赴任することに成つて、誠堂も其まゝ引ばつて行つたが、其頃そこに一人の老和尙が有つて尻褰らけで例の通り作務して居ると、通り掛りの婦人が和尙さん〳〵大事な御道具が出て居ますと注意した。すると和尙洒蛙〳〵として、オヽ左樣か、欲しくは進しても好いと、曰つたと云ふ噂が高かつた。

若天筆達磨像

○其和尙が提唱するといふこと故何んな節を付けて歌ふのかしらと思つて行つて見たら、左樣ぢや無い。其時の講座は碧巖錄上座佇立の一章といふので。何の事やら只だ驚いた位の者だつた。

○同じ熊本で百貫から有明の温泉に廻はり、冬の日の暮易く夜道ながらに金峰山を越えた。薄明の頃には道しるへせし牛の糞が次第に見えなくなつて、終には闇中幾度か足踏滑へらす邪間物と化せしは如何に。木枯の音冴へて得も知らず物凄し。何處にか人の氣はひする故呼んで見ると向ふから膽を潰ぶし、忽ち灯を消して一目散に逃げ去りき。

○それから京都に轉任する樣に成り暫時は見物に憧がれて物珍らしく暮して居た。彌次喜太の本にもある通り

花貴ふと都に本寺〳〵かな

で何方を見ても名僧智識。イヤ早や賑はしい事かな。

○初めて南禪の僧堂に上り一夜を明した折には、何んとも云へぬ淒愴を感じた。時しも秋の最中、長いのに何ほ寢付かれず。漸く一詩を題す。曰く

秋風山寺晩。落葉撲レ門多。書劍江湖夢。不レ容ニ且過一。

○拂曉から鈴の音冴へ切りて副司寮の誦み上ぐる心經の一節を聽いた時には宛ながら此世の物ならず我より我を忘れ果てき。借て是も今では何時か聽き慣れて。

○外國に行く事になつてから、君は仕合サ、故郷の事も思はずに濟むだらうと云つて呉れた人も有つた。併し夫れは如何か、鼻の下に口ある位は僕として今に忘れないと、答へた事も有つた。

○どうやら三年の任も果てゝ久振東京に着きアチコチと歩いて見た。時勢も大分變つたと見え禪風も少からず擧つて居るらしい。只其處にも此處にも分らぬ御託を彫りつけて、竹林の七賢乎、世をすねて見する變人の集合かと思はれたは谷中全生庵の墓地だつた。餘り妙でもなからう。

○それから何處かの雲水僧に出合ふて話をして居ると空手で飯が食へますかとか何とか言つて居るから、サッサと御馳走になつて置いた。夫れでもイカヌと言ふ樣だつたが借何んな芝居をさす積りだつた歟。敗闕〳〵。

○君の樣に詰らぬ事を曰ふてはイカぬと叱つて下さる人もある。併し此んな人でも此方らから君の行履には及び難い處がある、何にか悟入して居らるゝだらうと云ふと十人が十人皆笑顏をする。矢張悟つては見たいと見ゆる。だが今度は僕から御忠告申す、悟らぬ方が好いでせう。

○余の誠堂も度々の移轉に損じが出來一面の屋漏。イッソの事よと打ち壞はして仕舞ふた。例の長田君さへ故人に成つてからモウ久しい者だ。僕は今所定めぬ樹下石上、時々惡口をきいて見る位が關の山だ。

駒はよし何處から
出すも傀儡師
あかして見せる
種子は物庵